
るアニメの交錯物語? ~ A Cross story of Lost chronicle ~

world-creator.glass

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるアニメの交錯物語？ } A Cross story of
Lost chronicle }

【Nコード】

N6625W

【作者名】

world-creator.glass

【あらすじ】

様々な別世界の治安維持を担当する「時空管理局」。同時に一世の失われた文明遺産が悪用されるのを防ぐ役目も担うこの管理局に、立て続けに舞い込む敵の知らせ。

出勤する管理局「機動六課」の「魔導師」。休みの無い日々が続く。

そして現れた新たな敵。今までの敵とは段違いのその敵の登場に、管理局は、苦渋の策として、機動六課への増員派遣と、極秘開発さ

れていたロストログア兵器の六課への試験投入を決定する。新たな力とともに機動六課に舞い降りたのは……。

交錯物語、アニメのある限り終わることのない物語、待望の続編スタート!!

10月21日、アクセス10000突破しました。
ご愛読ありがとうございます。

prologue (前書き)

初めまして。

前作から読んでいただいている方は、こんにちは。

world-creator・glassです。

ようやくというべきか、「とあるアニメの交錯物語」第二編のスタートの運びとなりました。

今回は前作と異なり、ある一つのアニメ世界をベースに、そこに他アニメのキャラが流れ込む形で世界が構成されています。何故かといえば、前作は何か学園モノだけでおさめたのですが、今回はSFテイストの作品もありますので、どうしても活動範囲を大幅に拡大しなければならなかったからです（笑）。

IFの世界が沢山あるアニメといえば、どう考えてもリリカルなのは以外に思い浮かばなかったのでご勘弁ください（苦笑）。

さらに、世界観が複雑化しているので、回想部分以外のところは前作の主人公視点から第三者視点に切り替えて執筆しています。

原作ファンなら登場人物くらいは軽く理解はできと思いますが、今回もやはりオリジナル要素を含ませているため、原作設定の通りでは無かったり、前作を読んでいなければ理解できない部分もあります。

完全に理解して読みたい人は、前作に目を通してくださると一層裏の設定が分かって読みやすくなるでしょう。

ですが、前作と世界があまりにも変わってしまいました（苦笑）。

最初は前作との世界の違いに戸惑われるかと思いますが、前作とのブランクは後々この物語の中で明かしていこうと思っていますのでご安心ください。

今回は前作よりはるかに長くなるかと思いますが、どうぞ気長にお付き合いいただけると幸いです。

prologue

遠い遠い昔の話。

かつてある世界で、戦争があつた。

ある人種はある人種を憎み、ある人種はそれを力づくで抑え込んだ。

そのもつれ合いはやがて熱を持ち、火種となり、そして戦いの炎となった。

人は命を賭け、命を奪う戦いを繰り広げ、そして瞬く間に時が過ぎて行った。

永遠に続くかにさえ思われたその戦争は、やがて終結した。

しかし、戦いが終わったとき、そこには何も無かった。戦いに燃やされた、命の灯さえそこには無かった。

戦いは終わった。戦った者すべての命を飲み込み、戦いの場となったものすべてを灰塵に帰した後に。

そして、そこには、使う者のいなくなった機械遺産だけが残された。

それはのちに「ロストロギア失われた文明遺産」と呼ばれ、危険な文明遺産として扱われていくことになる。

その文明が滅んでから、さらに長い年月が流れた。

数多存在する、次元も時代も文化も異なる世界。

人はそれを「並行世界」「パラレルワールド」と呼ぶようになった。

そしてある時、その数限りない世界を管理する次元並行世界文明均衡管理局、通称「時空管理局」と呼ばれる組織がつくられた。

その組織は、あちこちの世界を陰から見守り、時としてその世界に降り立ち、その世界を助け、またある時はその世界の文明の過ちを正すため刃をふるった。

その管理局がおかれた次元世界は、のちに「ミッドチルダ第一管理世界」と呼ばれるようになった。

そして、ミッドチルダは、世界の一つ一つに番号を付け、管理し、次元間の平衡を保つ役目を果たした。

それから、どれだけの時が流れただろうか。

ある世界では一カ月かもしれない、ある世界では十年かもしれない、ある世界では一世紀かもしれない。

とにかくとてつもなく長い年月が過ぎた。

「また無人機械が襲撃してきたと？」

敵襲撃を知らせる警報音が鳴り響く時空管理局の司令部で、時空管理局提督クロノ・ハラOWNはうんざりしたような声で呟いた。

「どういうことだ、それでもう三日連続じゃないか」

「だからあ、私に聞かれても困るんだってば！」

いつまでも止まらないクロノのぼやきに、前のオペレートシートに居たエイミィ・リミエツタはこれまたうんざりした顔で言い返す。三日連続で敵がわいて出てくる、ということは、それに比例してクロノのイライラも溜まって行くのである。クロノと昔馴染み、しかも仕事仲間で上司・部下関係にある彼女にとっては、これ以上の

拷問は無いだろう。

「三日連続……ということとは、彼女たちには設立した日から休みが与えられてないことになるな」

「でも皆、結構タフなんですよ〜」

クロノは逡巡した。一応彼女たちは部下ではある、が、それに加えて友人でもある。

友人にばかり負担をかけるような真似は、真面目なクロノにとっては些か苦しい判断だった。

しかし、今はこの状況を何とかするほうが先だった。代わりの部隊を立てるか考えるのは、後で出来る。

「あんまり気は進まないが、無理を承知で彼女たちにコンタクトを取ってくれないか、エイミィ」

「りよおかいつ!」

エイミィは二つ返事でコンソールに向かい、キーボードを叩き始める。頼み事をはばかることなく出来る存在のエイミィがいてくれて助かったと思った。他の真面目なオペレーターだったりしたら、もしかしたら異議を申し立ててくるかもしれないと思ったからだ。

そして、あれこれと負担軽減の特効薬になる対策はないかと思考を張り巡らすクロノの中に、一つの考えが思い浮かんだ。

同時に通信がつながる。

『はい、こちら時空管理部隊第6小隊』

「クロノだ、そっちでも捕えたか？」

『うん、昨日一昨日と同じ反応みたいだね』

「すまない、三日前に設立してから初陣早々休みなしなのは申し訳ないんだが、頼まれてくれるか？」

『わかってるよ、お兄ちゃんの頼みなら断れないし』

「……その呼び方はやめろ、今は上司と部下だ、公私を混同するな」
『あはは、了解』

そう言って通信は切れた。

「あいつ……一度ビシツと教え込んでやらないといけないな……」
兄呼ばわりされたことに顔を曇らせるクロノ。

「だったら、十年間もほったらかしにしておいた母親にでも文句言つとくべきじゃないかしら？」

エイミイが画面から目を離さずに言う。

「かもしれないな……昔の彼女はここまで身内にすり寄るやつじゃ無かったしな……」

スクリーンに映る、敵を表す赤の点と、それに近づいていく味方を表す緑の点を見ながら、クロノはため息をつくしかなかった。

一時間後、スクリーンから赤の点は残らず消えうせ、向こうの隊員から、事後処理が終了した旨の報告が寄せられる。

「やれやれ……」

クロノはどつと椅子に座りこむ。

「お疲れ様」

エイミイがお茶を淹れてくれた。いつもながら何よりの気配りである。

「ところで、さっきから考えていたことなんだが……」
「えっ？」

クロノはそうエイミイに言いながら、先ほどの部隊に再び回線を

つなぐ。

『こちら六課、報告は行つたね?』

「ああ、受け取った。それより、こちらから一つ提案がある」

『お、なんか休みが増える手立てでも思いついたん?』

画面からのぞく相手の顔が意味のわからない期待に彩られた。

「いや、まあ負担が減るということには変わりないんだが、この調子だと休みが早々ないことも視野に入れなければならないかもしれない」

『えっ?』

エイミイと通信の相手が同時に驚く。

クロノの考えでは、三日も続けて同じ敵が襲ってきたというなら単に偶然として片付けることもできたそうだが、クロノが気になったのはそこではなく、敵そのものだった。

調査班からの報告を見比べてみると、単なる機械の暴走であれば、その数は日によって波があつて当たり前なのだが、この三日間で襲ってきた敵は、日を追うごとにその数が二倍近くに増えていることに気がついたのだ。

『それは大変やなあ……それで、その対策を思いついたということか?』

「まあ、そういうことだ」

『何なん?』

「君たちの部隊はまだ設立してから間もないし隊員も少ないだろう? 今はまだ隊長・副隊長陣でどうにでもなるレベルかもしれないが、機械なんて量産はいくらでも利くからな、そのうち君たちの力量だけでは対抗できなくなるレベルになるかもしれない」

『言われてみれば……せやな』

「だから、もしそうだったときは、管理局からそちらに補充要員を送ることになるかもしれない」

『ええっ！？』

エイミイが叫ぶのと、スピーカーが壊れるくらいの叫び声が向こうから返ってくるのは同時だった。

「まあ驚くのも無理はないな……普段本局はこんなことには手を回さないからな、あまり信頼できるものじゃないのは分かってる」

『せ、せやけど、どうするんね！？』

「もしそうなれば、人選は僕がやる。君たちのところに溶け込めそうなメンバーを出来るだけ選んでおくよ」

『……了解や……ほな、そんな時は頼んだで』

通信が切れると、クロノは席を立ち、本部を出て階段を下り、その奥へ向かっていったのだった。

エイミイはそれを心配そうな顔で黙って見送るほかなかった。

増え続ける敵、そして仲間への申し訳なさ。

それはクロノに背中を押させ、急がせた。

不安要素の対策は早めに立てておかなければ。クロノはそう思った。

登場人物紹介？【主人公・メインキャラクター】（前書き）

物語中盤まで、新しいキャラが登場するたびに更新していく予定です。

ストーリーに溶け込ませるために、原作と立ち位置や設定を変えたキャラクターがあります。

登場人物紹介？【主人公・メインキャラクター】

【高岡ヒロユキ】

時空管理局魔導師／機動六課副部隊長・分隊総隊長

20歳／一佐／第97管理外世界出身／魔導師ランクSSS

この物語の主人公。新たな敵の出現により、さらなる戦力が必要とした時空管理局に、クロノに依頼され入局する。超絶的な魔力を持ち、これにより、実質専用機として開発された新型デバイス『ゼロ』を受領する。しかし、その正体は、第97管理外世界で生まれた『人工的に誕生した超能力者、その唯一にして最高の成功例』であり、幼少期から管理施設での生活を送っていた。そのおかげで、幼少期に同じ施設に居た機動六課の隊長陣とは十年來の馴染みでもある。

【高町なのは】

時空管理局魔導師／機動六課「スターズ分隊」隊長

19歳／一尉（一等空尉）／第97管理外世界出身／魔導師ランクS+

時空管理局の魔導師。かつては第97管理外世界で超能力者として生活していたが、18歳の時にあるきっかけで時空管理局の魔導師となる。その能力は高く、新人の教官を任せられるほどである。優しく、時に厳しい隊長として誰からも慕われているが、反面一人で問題を抱え塞ぎこんでしまうこともある。

使用デバイスは遠距離特化型インテリジェントデバイス『レイジングハート』。

【フェイト・T・ハラオウン】

時空管理局魔導師・執務官／機動六課「ライトニング分隊」隊長
19歳／一尉（一等空尉）／ミッドチルダ出身／魔導師ランクS+

時空管理局魔導師。なのはの旧友で、執務官も務める優秀な魔導師。18歳の時になのとともに管理局に入局する。なのは同様、能力の高さから、機動六課では隊長を務める。提督のクロノとは義兄妹である。管理局入局前までは、とある事情によりなのはとともに第97管理外世界で暮らしていた。年下には少々過保護な世話焼きでもある。使用デバイスはなのはと同じインテリジェントデバイス『バルディッシュ』。

【八神はやて】

時空管理局魔導師／機動六課部隊長
19歳／二佐（二等陸佐）／第97管理外世界出身／魔導師ランクSS

時空管理局魔導師で、機動六課の設立者でもあり、部隊長を務める。管理局入局後わずか一年足らずで二佐にまで登り詰めた出世頭だが、これは持ち前の行動力が幸いしての結果である。明るく快活な性格で、なのは、フェイトとは旧知の仲。その昔、足に麻痺障害を患っていた過去があり、身体と精神の二重の苦しみから、自らが使用するデバイスの素体となった『リインフォース』が生まれている。

【クロノ・ハラウン】

時空管理局提督／機動六課後見人／25歳／ミッドチルダ出身

時空管理局の魔導師。名誉提督の母親を持つエリートで、管理局勤め15年のベテランである。以前は前線に出る実力者だったが、母親の後を継ぎ管理局提督になった。生真面目な性格で、物事を理論的に考える人物。しかしその行動とは反対に仲間思いでもあり、機動六課の後見人であると同時に、裏で色々と手を回して六課のサポートをする陰の功労者。

登場人物紹介？【機動六課・その他】

【スバル・ナカジマ】

時空管理局魔導師／機動六課「スターズ分隊」アタッカー

16歳／二士（二等陸士）／ミッドチルダ出身／魔導師ランクB

なのは率いる小隊のナンバー4。明るく快活でボーイッシュ、そのくせ少し内気な面もある年頃の少女。見た目に似合わず大食い。小隊ではアタッカーを務め、格闘戦を基本とした打撃戦を得意戦術とする。姉も親も魔導師であり、また、彼女が魔導師となったのはなのはの存在とそこへの憧れがある。そのため、格闘戦主体でありながら「魔導師」で登録を行っている。

【ティアナ・ランスター】

時空管理局魔導師／機動六課「スターズ分隊」ガーダー

16歳／二士（二等陸士）／ミッドチルダ出身／魔導師ランクB

スバルと同じ小隊のナンバー3。若手であるスバル、エリオ、キヤロのまとめ役でもある。しかし、自分になついているスバルを嫌々ながらも面倒を見ている世話焼きな一面もある。射撃戦術で後方支援を担当する。幼くして亡くした兄も優秀な魔導師であった。兄の後を継ぎ、兄を超える一流の魔導師、引いては執務官となるべくトレーニングを積む。

【エリオ・モンディアル】

時空管理局魔導師／機動六課「ライトニング分隊」ガーダー

10歳／三士（三等陸士）／出身不明／魔導師ランクB

フェイト率いる小隊のナンバー3。10歳という若さでBランクを持つ魔導師であり、将来性有望。しかし、反面女性ばかりの機動六課では少し肩身の狭い思いをしている。スバルやティアナにとっでは弟役。しかし、その生い立ちには謎に包まれており、保護者であるフェイトすらもそれを知らない。なお、フェイトと同じく電撃の魔力変換資質を持ち合わせているのが特徴。

【キャラ・ル・ルシエ】

時空管理局魔導師／機動六課「ライトニング分隊」召喚士
10歳／（三等陸士）／第6管理外世界出身／魔導師ランクC＋

フェイト率いる小隊のナンバー4。10歳という幼さながら竜召喚というレアスキルを持ち合わせており、フリードリヒという使いの竜をいつも連れている。身寄りが無く孤児であったところをフェイトに保護されたという。他者とのコミュニケーションに少し疎いところがあり、感情の起伏もそれほどない。というよりはむしろ内気すぎるほど。

【シグナム】

機動六課「ライトニング分隊」副隊長／二尉（二等空尉）／魔導師
ランクS－

機動六課でフェイトの率いる「ライトニング分隊」の副隊長を務める女性。近接戦闘特化型のスタイルを得意とし、自らの剣型デバイス『レヴァンティン』とともに激しい戦いも難なくこなす。クールで寡黙だが、義理人情には厚い性格である。別世界で発見された『夜天の魔文書』から生まれた『ヴォルケンリッター守護騎士』で、そのまとめ役であ

り、別名『烈火の将』。

【ヴィータ】

機動六課「スターズ分隊」副隊長／三尉（三等空尉）／魔導師ランクAAA

なのは率いる「スターズ分隊」の副隊長を務める少女。見た目は背が低く幼く見えるがその戦闘技術は凄まじく、自らの槌型デバイス『グラーファイゼン』とともに、打撃を得意とし、別名『鉄槌の騎士』。言葉遣いは荒くぶっきらぼうだが仲間思いで熱血でもある。それゆえ、シグナムと同じく戦いには嬉々として参加する一面がある。

【シャマル】

機動六課医療班班長／魔導師ランクA

機動六課で医務を担当する『守護騎士』の一員。魔導師ランクこそ高いが戦闘向きではなく、主に回復魔法と支援魔法、デバイスの『クラールヴィント』でサポートに当たる。ある意味機動六課一番の功労者であり、無茶を厭わない隊長陣ですら頭が上がらないほどに頼りにされている。また、陰に隠れて目立たないがある程度の指示役もこなすことができ、戦闘班不在時ははやてに代わって六課の指揮を任されている。

【ザフィーラ】

機動六課守護騎士／ランク不明

機動六課所属の『守護騎士』の一人。筋骨隆々でがっしりとした男。その正体は獣の力を併せ持った複合生命体『獣人』で、いつもは狼の姿でいる。人型になるのは非常にレア。『守護獣』の肩書きにふさわしく、堅牢な防御魔法に長けており、六課のサポート役をこなす。あまり表立った活動を行わないことから、魔導師ランクの登録はされていない。

【エイミー・リミエッタ】

時空管理局管制官／27歳／ミッドチルダ出身

時空管理局でオペレーターを務める女性。クロノと同じく勤務歴15年来のベテラン。クロノの直属の部下だが、それでいて彼の幼馴染でもある。陽気な性格だがその技術は確かで、クロノも信頼をおく女性である。しかし精神年齢が見た目よりやや低いようで、そこをクロノにいつも指摘されているが本人は気にしていない。

【ユーノ・スクライア】

時空管理局『無限書庫』司書長／20歳／ミッドチルダ出身／魔導師ランクA

時空管理局のデータベース『無限書庫』を管理する司書長で、中性的な顔立ちをした男性。考古学の専門家でもあり、文字を読むことと謎をひも解くことを日々の楽しみにしている。高い魔導師ランクを持つが、前線に出ることは無く、いつも魔法で無限書庫の資料探しや整理をして過ごしている。クロノとは10年前からの付き合いで、彼の頼みは他の誰の頼みよりも優先して解決しようとする。

【マリエル・アテンザ】

時空管理局技術部技術主任 / 26歳

時空管理局の技術開発部署で主任を務める、メガネが特徴の女性。生粋のメカオタクで、それゆえに高い機械技術を持ち、局内でも頼りにされる存在。技術主任として、機動六課へ様々なメカニックのサポートをする。『ゼロ』の開発、および『ガンダム』のシステム対応改造を行ったのも彼女。

デバイスとメカニク

【ゼロ】

正式名称「インフィニティ・ゼロ」。魔導師ランクSS以上の魔導師の使用を前提に設計された新型デバイスで、本機はそのプロトタイプに当たる。処理できる魔術の数、魔力の量ともに今までのデバイスをはるかに凌駕しており、そのスペックは八神はやての『リインフォース』を凌ぐとさえいわれている。これまでのデバイスとは異なる新開発のOS「システム・イヴォルヴ」を搭載しており、未知の可能性を秘める「進化するデバイス」として、機動六課で試験運用されることになる。

【レイジングハート】

なのはが使用する遠距離特化型のインテリジェントデバイス。もともとは、なのは自らの超能力により作り出された「超能力のエネルギーの実体化した欠片」。以前はこれが無ければなのはは超能力を使うことができなかった。管理局入局時にその超能力エネルギーを外装のみのデバイス基盤に固定して正式なデバイスとなり、見た目はそのままに、なのは共々、より能力が増した。なのは同様、無茶を惜しまない性格は相変わらずである。

【バルディッシュ】

フェイトが使用するインテリジェントデバイス。なのは・レイジングハートとは十年来の付き合い。レイジングハートと同じ経緯で誕生したデバイスで、格闘戦に傾いた強化がされているが、実際はオールレンジ対応。フェイトの魔力変換の特性により、使用される

魔法がすべて電撃属性を帯びるため、それに対応した改造が施されているのが特徴。レイジングハートと異なり、冷めたクールな性格をしているが、戦いになるとノリノリになる。

【リインフォース】

はやてのインテリジェントデバイス。なのはやフェイトのものと誕生経緯は同じだが、こちらは精神的な苦しみだけではなく、身体的・感覚的な苦しみも関って生まれたためか、より強力な力を持ち、それにより、入局時の調整によって、自我を持ちながらユニゾンデバイスとしての機能も持ち合わせたインテリジェントデバイスとなった。デバイス本体にも魔力が蓄積されているという点が最大の特徴で、それにより他のデバイスの数段上を行く威力の魔法が使用できる。

【リインフォース？】

はやてのユニゾンデバイス。インテリジェントデバイスの基盤にエネルギーを固定する際に、リインフォースの力に基盤が耐えきれないことが判明し、やむなくリインフォースの力を半分に分けることで誕生した。「リインフォース」が「身体の辛苦の力」に対し、こちらは「精神の辛苦の力」がもとである。普段は身長数十センチの人の姿をしており、機動六課曹長として現場活動をする。「リインフォース」の知能や言語機能などはすべて「？」に集約されている。ゆえに「リインフォース」とは「二つで一つ」とも言える存在。

【レヴァンティン】

シグナムが使用する剣型デバイス。古代ベルカ式魔法を用いた力ートリッジシステム搭載の近接特化型デバイスで、刀身に魔力を纏わせて攻撃の補助に使用したり、魔力を圧縮して遠距離に射出する

こともできる。インテリジェントデバイスではないが持ち主との応答を行うことができる程度の知能を持ち合わせている。

【グラーファイゼン】

ヴィータが使用する槌型デバイス。レヴァンティンと同じく古代ベルカ式のカートリッジシステム搭載型デバイスで、主に打撃による攻撃を主体とするほか、オプションの金属球体を魔力を付加させて打ち出す射撃攻撃も行うことができる。見た目の割に取り回しに優れており、スピードが乗った打撃攻撃は強力無比。

【エクストリームガンダム】

第375管理外世界で、管理局時空警備隊により偶然発見された謎の機体。発見された世界は過去の戦争ですでに文明が壊滅した世界であり、なぜそのような世界にあったのかは謎である。管理局の戦力として転用するにあたり、人工知能AIを搭載し、魔導師のデバイスと連携しての運用が想定されている。スペックや機能など、そのすべてが未だ謎に包まれたまま、機動六課でデータ収集のため実戦投入された。

【マツハキャリバー】

スバルが使用するローラーブレード型デバイス。構造はほぼストレージデバイスだが、ある程度の意思を持っており、その性能はインテリジェントデバイスに匹敵する『第四世代型デバイス』である。格闘戦を主体とするスバルの戦術に合わせ、空中で魔法による道『ウイングロード』を形成できる機能を持つ。また、スバルの右手にはめられた補助具『リボルバーナックル』の制御も行える。

【クロスミラージュ】

ティアナが使用する双銃型デバイス。『マツハキヤリバー』と同じく『第四世代型デバイス』である。その形が示す通り砲撃魔法に特化した構造になっており、多種多様な射撃魔法を操作できるほか、それなりに格闘戦もこなせる機能も持つ。また、ティアナの魔法適性に合わせ『幻術魔法』を操れるチューニングが施されている。

【ストラーダ】

エリオが使用する槍型デバイス。エリオの魔力変換資質が電撃であるため、構造そのものは『バルディツシュ』を参考に作られており、性能およびリーチ、使用できる魔法などもほぼ『バルディツシュ』に準じるが、『第四世代型デバイス』であるため、機能上はなのはやティアナの使用する砲撃特化の魔法術式にも対応が可能な万能型デバイスである。

【ケリュケイオン】

キャロの使用する手甲型デバイス。ブーストデバイスであるため、性能ではストレージデバイスにもやや劣るが、その分魔力増幅機能を極限まで追求したデバイス。キャロの基本戦術が『竜召喚』であるために、基本はその召喚魔力を増幅させる役割を果たす。また、ある程度は戦闘機能も備わっているが、防御魔法などの簡単なものにとどまっている。

「とあるアニメの交錯物語？」の世界（前書き）

こちらにも適宜更新予定。

話を分かりやすくするのとオリジナリティを保つために、解釈を一部独自のものに変えている部分があります。

その点をご理解の上、目を通していただけるとより理解できるかと思えます。

「とあるアニメの交錯物語？」の世界

【並行世界】

数限りなく存在する、文明や歴史、技術がそれぞれ違う異世界のこと。時空を超えて他の並行世界に移動できる技術をもつ世界を「管理世界」と呼び、そうでないものは「管理外世界」と呼ばれる。ちなみに「西暦の地球」は「第97管理外世界」である。

【時空管理局】

並行世界の管理を行う組織の名称。正式名称を『次元並行世界文明均衡管理局』という。その仕事は、災害救助、犯罪の取り締まりに始まり、暴動の鎮圧、行きすぎた技術を持つ世界の争いの火種を摘むこともする。クロノが属する司令本局と、現場活動を行ういくつかの小隊で構成されているほか、技術開発局、記録係などさまざまな組織がある。

【階級】

時空管理局の局員に与えられる階級。一佐以下の階級は、その魔導師の戦闘スタイルによって「空」または「陸」を加えて呼称することもある。

上から順に、元帥＞大将＞中将＞少将＞准将＞提督＞一佐＞二佐＞三佐＞一尉＞二尉＞三尉＞准尉＞曹長＞曹＞一士＞二士＞三士＞研修生

の順に階級分けされている。現場にかかわるのは提督までであり、それより上は、総合的な局の管理を行う「上層部」と呼ばれる。

【機動六課】

八神はやてが設立した、時空管理局6番目の小隊。正式名称を『時空管理局特別部隊第六小隊』といい、その任務は主に、『次元並行世界から発掘されるロストログアの搜索・回収・調査』である。はやての知り合いの人間だけで作り上げた新設の部隊であるため、まだ隊員は少ないままである。

【魔法】

その人物の先天的な資質などにより発揮される、特殊な力。『魔法』は時空管理局内および第一管理世界での呼称で、次元世界によって名称や解釈は異なり、第97管理外世界では『超能力』と呼称される。

また、世界によりその発生原理も異なっており、ミッドチルダの人間では、「体内に『リンカーコア』と呼ばれるエネルギー体がある」ことにより発生する。一方、第97管理外世界では、「体内器官に『筋肉から発生した特殊なエネルギーが蓄積されている』人間が、『それを内臓器官で実体変換する』ことにより発生する」とされるが、どちらも未だ謎が多い。これらのエネルギーの強さを、管理局では「魔力」という。

【魔導師】

「魔法」を扱える者、またはその素質を有する者をいう。定義では『体内に潜在的エネルギーを有し、このエネルギーを实体として変換、または行使できるもの』であるため、厳密には「魔法を使える者」だけではなく「超能力者」などもこのカテゴリーに含まれる。

【ガジェット】

謎の自立機動兵器。プログラムで動き、ビームやタックルなどで攻撃する。一般的な？型、飛行能力のある？型、ムチ状のロッドを持つ大型の？型が存在する。人の手で操作もでき、その場合より高度な動きができる。

【魔導師ランク】

時空管理局の魔導師につけられる、個人の魔力、または魔力の資質の高さをあらわすレベル。FからSSSまで全部で11のランクがある。S以上の高ランクの魔導師は、場合によってはリミッターを掛けて魔力を制限されることもある。また、上位はランクの幅が広く、便宜上＋や－などをつけてさらに細かく分類する。

【デバイス】

管理局の魔導師が使用する、「魔法」の使用を補助する器具。これにより、魔導師のみの状態よりも魔法の精度、魔力効率などが向上するメリットがある。バリエーションとして、単純な補助器具のみの役割である「ストレージデバイス」のほか、疑似人格のAIを

組み込んだ「インテリジェントデバイス」、使い手を選ぶが効果の高い、術者融合型の「ユニゾンデバイス」などがある。

なのはやフェイトら六課の隊長陣が使用するものは、性能が高いが使い手を選ぶ『第三世代』、スバルやティアナらフォワード陣が使用するものは、OSがより進化し扱いやすさが増した『第四世代』、ヒロユキの『ゼロ』は、未知の領域へのテストベッド『第五世代』に分類される。

Cross・01 無限書庫

クロノは管理局の奥へとたどり着いた。ひときわ厚い造りの大きな扉をくぐると、そこには不思議な空間が広がっていた。

見渡す限りの本棚。数えることなど一生かかってもできないだろうと思えるほど数多くの本がきっちり並べられている。そして、その本棚すら、どこまで続いているのか。先が見えなかった。

時空管理局記録係兼データベース、通称「無限書庫」。時空管理局が活動してきた歴史、その中で起こった並行世界における史実、文明、その記録のすべてがここに収められている。次元並行世界のことについて、ここで分からないことはないと言われているほど、その量は膨大だった。

いつ来ても見事だ。そう思いながら、入口にある呼び鈴を鳴らす。無限書庫は限りなく広いのだが、この呼び鈴を押すと司書長に瞬時に連絡が伝わるようになっていいるらしい。程なくして、一人の男性が現れた。

「おや、君が直接ここに来るなんて、よっぽど大事な用でもあるのかい？」

「ああ、少し急ぎの用事があったな」

中性的な顔立ちをし、髪を後ろ手に縛ったその男性、無限書庫司書長ユーノ・スクライアは柔らかな笑みを浮かべてそう言った。

「なるほど、君の考えは分かった。だけど、そうそう見つかるかどうかは分からないことだけは、心に留めておいてくれないかい」

「ああ、わかつてる」

クロノは、もしもの場合を考え、ユーノにそのことを伝えた。いずれ敵が増えれば、六課への増員を考えなければならないこと、そのために今のうちに候補を絞っておかなければならないこと、そしてその候補は、最悪の場合外部の人間に依頼しなければならないこと、その場合を考えて、無限書庫の膨大なデータの中から、それに適する人間を探してほしいということ。

「よし、他でもない君の頼みだ、最優先で探しておくことにするよ」
「いつもすまない、感謝する」

クロノはユーノに頭を下げる。クロノと十年来の付き合いであるユーノは、クロノの頼みはいつも他の仕事を差し置いてでも一番に解決してくれるのである。それは、かつて共に前線で戦った絆と信頼関係の賜物に他ならないのは言うまでもない。

「いいんだ、君が直々にここに来るなら、きっとそれだけ事態は急を要することだろうからね」

「理解が早くて助かる。説明すれば長くなるんだが、それはまた改めてすることにしよう……彼女たちのためにも、頼む」

「合点承知！ 任せておいて」

ユーノは自信満々にニヤツと笑って見せた。

クロノが部屋を出ていくと、ユーノは両頬をパンと叩き、気合を入れ直す。

「彼女たちのためにも……か」

ユーノはそう呟いて、入口の横にあるデスクを横目で見やる。そこには一枚の写真がスタンドに入れて飾られていた。

そこには、クロノとユーノとともに笑う、三つの笑顔があった。

「というわけで、候補の探し出しはユーノに任せた。最終的な決定は僕がやるが、それまで君たちには苦勞をかけることになる。すまないな」

『ええよええよ、こちらら出来立てはやはやの部隊やし、本局も手が回らへんのは承知の上や』

クロノが頭を下げるのを見て、画面の向こうの相手は笑顔でそう答えた。

「僕もユーノの腕は信用してるが、彼でも捜すのには最低三日はかかるだろう……それまで、君たちは身体に気をつけて、無理をせず頑張ってくれ」

『おおきにな、クロノ君』

「ああ、上手く事が運べば一週間ほどでそちらに行かせられると思う、じゃあ、くれぐれも気をつけて任務を遂行してくれ」

『了解や』

通信が切れると、クロノはどつと椅子にもたれかかる。提督の自分が小隊一つのためにここまで粉骨砕身するのもバカらしい話だと思いつく思っではいたが、自分が彼女たちの新部隊設立を容認したときから、こうなることは分かり切っていたことなのだ。今更どう思ったところで、自分の姿勢は変えようとは思わない。今はただ、一刻も早くユーノが候補者リストを作り上げてくれるのを待つほかなかった。

「ふう……」

息をつくとともにどつと疲労感が押し寄せてくる。すると、それが聞こえたのか、エイミイが話しかけてきた。

「随分と走り回る提督さんね」

「一応曲がりなりにも後見人だからな、それなりにサポートはしてやらないといけないだろう……後方で言葉一つで人を動かすだけの僕らは、前線で身を粉にして戦ってる彼女たちとはわけが違う」

「まあ、それもそうね……ところで、さっきクロノが出ていつてる間に、技術局のマリエルさんから連絡があっただけ……」

「やれやれ、今度はあっちか……それで、何かあったのか？」

疲労の波に追い風を上乘せされ、クロノは余計にぐったりとしながらも聞き返した。

「うん、なんでも、二週間前に見つかったロストロギアの技術転用がどうとかって……」

「……わかった、行ってくる」

クロノはゆっくりと立ち上がり、再びドアの外へ消えていった。

その後ろで、エイミイが「お人好しだねえ」などと呟いていたのだが、それはクロノの耳には届かなかった。

「あ、クロノさん、わざわざどうもありがとうございます」

技術部のドックの入口を開けると、眼鏡をかけた女性、技術部監察主任マリエル・アテンザが走ってきた。

「ああ、遅くなってすまない、それで、何か分かったことでもあったのか」

「はい、実はですね……」

マリエルがクロノを呼んだのは、二週間前にとある管理外世界で

発見されたロストロギアについてだった。

第375管理外世界で十数年前に発生した戦乱は、その次元世界すべての民をも巻き込んだ世界戦争に発展した。管理局は介入をしようとしたが、上層部はこれを渋り、犠牲が増えるだけだとして認めなかったのだという。そして、それから数年後、戦争は終結した。

だが、戦争が終結したとき、その世界の民は滅び、後に残ったのは使う者のいなくなった機械兵器だけだった。その兵器の一部が、つい二週間前に偶然管理局の警備隊によって発見され、ここに運び込まれたというわけである。

そして、つい先ほど、この機械兵器の構造の解析が完了したことが、マリエルの呼び出しの理由だった。

「呼び出したということは、相当な発見でもあったということか？」

「ええ、私たちも驚きました」

その後、クロノはマリエルから色々と説明をもらったが、驚きの連続、最後には底知れぬ恐ろしさのようなものが渦巻いていた。

その機械兵器のあまりのスペックの高さ。強靱な防御と、ロストロギアの例に漏れない強大な出力。敵に回せば魔導師の一人や二人程度では相手にすらならないほどの強さであるということを、クロノはマリエルからの説明で身にかけていた。

「これは、この世界では争いの火種にしかないな……あんまり表立ってしゃべらない方がいい、くれぐれも極秘にしておいてくれないか？ シヤリオにもそう伝えてくれると嬉しいんだが」

「ええ、私も同感です、伝えておきます」

行きすぎた力は、時に正義の力となるが、ある時は憎しみの火種

ともなる両刃の剣なのである。過去にそれが仇となり、滅んだり衰退してしまった世界を、いくつかユーノから聞かされたことがあった事を、クロノは思い出す。

「これを管理局の戦力として転用はしたくない……だが、これに目をつけない犯罪者がいないとも限らないからな……もし使うことになれば、その時は思い切ってこいつの性能を表に出す事にしよう……その時が来ないことを願うばかりだな」

クロノは眠ったようにドックに横たわるその機械兵器を見ながら静かに呟いた。

それから一週間が過ぎた。

クロノの願いは裏切られることなく、これまでと何一つ変わりのない状態が続いていた。

しかし、ただ一つ気になることといえば、あの無人機械だった。あれ以来、無人機械は毎日来ることこそなくなったものの、二日か三日に一度はやってくることに変わりは無かった。

さらに、その数は日増しに増えていき、二日前には五十機もの大群が押し寄せてきたのだ。

幸いにも、クロノが後見人である機動六課が活躍してくれたおかげで、その襲撃はすべて退けられ、最終的には何とか事なきを得た。その後管理局では、この無人機械を暫定的に『ガジェットドローン』と名付け、その解析と対策に乗り出すこととなったのだ。しかし、そこからが大変だった。

戦闘で破壊されたものは壊れ方がひどく解析など到底できるものではなく、かといって強引に捕獲しようとすれば自爆する始末で、

結果は同じだった。

結局、一週間で判明したのは、魔導師の魔力反応を感知して自動で攻撃を行うであろうことと、カプセルタイプ、飛行タイプ、多足タイプの三種類が存在することの二つだけだった。

刻々と手ごわさを増す敵に焦りを隠せないクロノに、翌日朗報が舞い込んだ。

依頼していた増員候補のリストがまとまったという、ユーノからの知らせだった。

クロノは早速無限書庫にそれを受け取りに出向いた。

ユーノはクロノの顔を見るなり、想像以上に骨が折れる仕事だったなどとぼやいていたが、クロノはそれにはお構いなしに、データが入った端末と、詳細が書かれた受け付け用の用紙を受け取った。「ありがとう、感謝するよ」

「なあに、また困ったことがあればいつでも聞かさ。なにせ今は管理局が人手不足で大変な時期なんだろう？ 君の気苦労に比べればこれくらい大したことは無いさ」

「そう言ってもらえて何よりだ。僕もいきなり外部の無関係な人間を引き込むのは気が引ける……だけど、背に腹は代えられないんだ、いざとなればこの地位を捨てても、世界のために尽くす覚悟だよ」
「じゃあ僕は骨が粉々になるまで無限書庫の探検かな」

「ははは、君らしいな」

クロノとユーノは顔を見合わせて大笑いする。それはまるで十年

前、まだ幼かったころの二人に戻ったようだった。

そして、再びクロノは本部に戻る。本部の入口をくぐる回数が最近やたら増えてきているとクロノは密かに思った。もっとも、あれこれ機動六課のために東奔西走している自分が引き起こしている事態なのだが。

端末をデスクのストックに差し込み、データベースを起動する。

画面にはあちこちの並行世界に住む、魔導師資質の比較的高い人間が、名前や資質のレベル、生年月日など幾つもの情報とともに表示された。クロノはその情報を一人ずつ隅から隅までじっくり見ていったが、やはり魔力資質はほとんどといった程度の人間ばかりだった。

派遣先の機動六課は、実際のところ魔導師としてのレベルが高い人材が有り余るほどいる。そのことは、他ならぬ六課からの設立の時の報告でクロノも知っていたことだった。その豊富さや、他の部隊では到底あり得ない強さと規模だろう。

しかし、数で攻められれば、いくらレベルの高い、力の強い魔導師であっても、そのうち疲労が溜まり、力尽きてしまう。それを防ぐためには、ぜひとも今まで以上に資質の高い人材が欲しいところだったのだ。

しかし、それを満たしてくれるような人材はなかなか見つからなかった。だんだんと残る人数も減っていき、残り二、三人になった時、クロノは目を疑った。

そこに表示されていたのは、機動六課の隊長陣に匹敵するかそれ以上の資質を有する一人の人物。その上、そこに書かれていた出身地は『第97管理外世界』。

クロノも何度が任務でこの世界に出向いたことがあった。ミッドチルダほど技術は発達していないが、人口は多く、それでいて自然も豊かな世界だった。

そして、この世界で自分が管理局に迎え入れた存在、それが今の機動六課の隊長たちだった。

この世界では、こういった資質を有する人間はごく稀であり、それゆえにミッドチルダと比べようも無いほどに認知されていない『魔法』。

クロノはふと思いつき、別のデータベースから機動六課のメンバーのデータを引っ張り出し、その人物のデータと照らし合わせてみる。

すると、クロノの期待は見事に叶えられた。

六課のメンバーのうち隊長以下三人の、十六年前から管理局に入隊した半年前までに辿った経歴が、その人物の経歴と見事に一致していたのだ。

クロノは思わず手を上げて喜びそうになるのを何とか我慢し、その管理外世界に出向こうと決心した。

Cross・02 機動六課

ところ変わって場所はミッドチルダ南東、湾岸地区、機動六課隊舎。

ここは湾岸地区というとおり、海に近く、潮風が香る場所にあった。ある意味、海に最も近い管理局施設である。

「はあ……今日で五度目や……向こうは一体いつになったら休みをくれるんやろか……」

隊舎の最上階、隊長室で、機動六課部隊長の八神はやては愚痴りながら机に突っ伏した。

自分が管理局内で知り合いの人間を集めてこの部隊「機動六課」を立ち上げたのがつい十日前。しかし、発足した翌日から、立て続けに無人の機械が押し寄せてきて、いきなりの大立ち回りとなったのだ。

初めの三日間は立て続けに、その後、一週間で二度か三度、日は空いたものの、やはり無人の機械、ガジェットと名付けられたそれが大群で押し寄せてきたのだ。

そして、つい先ほども、その機械の集団の撃退に立ち向かい、ようやくその作戦が終わって一息つく暇ができたところだった。

と、そこで呼び出し音が鳴り、ホログラムが映し出される。

『クロノだ。今こちらでも敵の殲滅を確認した』

「了解や。報告は行ったな？」

『ああ、受け取った。それより、君のところの隊員たちも、いい加減疲れがきてるんじゃないか？』

「あはは、一応今はなのはちゃんとフェイトちゃんの二人でもなんとかなる程度やし、新人さんたちはまだ実戦には出してへんから、問題なしや」

心配そうに聞いてくるクロノに、はやては笑顔で答えた。

「そうか。取りあえず、君たちは出来るだけ休みを取れるように、他の仕事は六課以外に回すように取り計らっておく。補充要員がそちらに行く前に主要メンバーが倒れちゃ話にならないからな」

「あはは、そりゃどうも」

はやては苦笑しながら、それをクロノに告げられた時のことを思い出す。

『今はまだ君たちの隊長メンバーで何とでもなるかもしれないが、相手は機械だ、そのうち大群が押し寄せてこないとも限らない、だからこちらからそっちに補充要員を派遣しようと思う』

「ええっ！？」

一週間前にクロノからその言葉を聞いた時、はやては思わず椅子から立ち上がっていた。無理はない。何しろ前線に指示を送るだけの管理局が、隊一つの心配をして戦力を送ってくるなどまずあり得ないからだ。

『今は候補者をユーノに探させて……無限書庫からだからそれに時間はかかるが、早ければ一週間でそちらに派遣できと思う。それまで、くれぐれも無理はしないでくれ』

「……分かった、おおきにな、クロノ君」

通信が切れると、はやては椅子に背中をもたれかける。

「補充要員……かあ」

誰ともなく呟く。管理局がやるとはいえ、戦力になる人員が増えてくれるのはありがたかった。だが、知り合いばかりで作られたこの部隊に、そのメンバーが溶け込めるのかと、一抹の不安も生まれる。

だが、新設したてでまだ管理局にあまり認知されていないこの部隊に、管理局が手を回してくれることは、隊の方からすればかなり幸運なことであった。

素直に喜ぼう。はやてがそう思った時、ドアがノックされる。

「どうぞ、入りや」

「ただいま、はやて」

「ただいま、はやてちゃん」

「お疲れさん、二人とも」

はやては、入ってきた二人、高町なのはとフェイト・T・ハラオウンの二人に労いの言葉をかけた。

「ホンマすまんなあ、二人ともここんとかガジェットの相手ばかりで」

「あはは、気にすることはないよ？　はやてが出る必要が無いだけまだマシだしね」

フェイトの言うことも事実だった。はやての能力はなのはとフェイトのそれよりも一回り上を行くレベルだ。しかし、管理局の規則により、一定以上の魔力を有する人間は、リミッターをかけてそれを制限しなければならない。そうしなければ、周囲に不意に悪影響が及ぶ可能性があるからだ。三人ともがそのリミッターの対象であったが、はやてのそれはなのはとフェイトのものよりも制限される割合が大きく、現在出せるパワーというならはやてよりも二人の方が上なのである。つまり、なのはとフェイトの二人が出て殲滅に回るのが最も効率が良いのは当たり前だった。

はやてはそれにほっとしていたが、内心では疎外感もあれば出ら

れないストレスも溜まっているのもまた事実であり、そのうち全線でひと暴れしたいとも密かに思っていたが、無論二人には言っていない。

「それで、今クロノ君から連絡があつたんやけど」

はやてが話を切り替えると、内容を察したのか二人も表情を引き締めた。

「取りあえず、候補になりそうな人材はユーノ君が探してくれることになったそうや。無限書庫から探し出すらしいし、時間がかかるらしいけど、大体一週間くらいで新人は派遣できるらしいで」

「そうなんだ……クロノ君は何て？」

「最終的な人はクロノ君がやるらしいけど、まあ出来るだけここに溶け込めそうな人材を選んでくれるそうや」

なのはの質問にははやては苦笑いだ。

「候補つて……ユーノはどう選ぶつもりなのかな……」

フェイトの素朴な疑問に、はやても納得したようにうなずく。

「問題はそこやな。運よく隊長クラスの人間が見つければよし、そうでなかったら、人数をこっちによこすつもりやるな、クロノ君は」

「人数つて……ここ、そんなに収容力あつた？」

なのはが首をかしげると、はやては笑って答えた。

「そこはまだ問題ないで？ まだ設立したばかりやし、隊舎の方はあと三十人くらい空きはあるんや、それくらいはこぞつて来てくれても何も問題ないで」

「そうなんだ……だけど……どっちもどっちで微妙だね……」

なのはは難しい顔をした。それはフェイトとはやても同じで、（とりあえず、今は私たちが自分で何とかするしかない）

そう思っしかなかった。

三日後、クロノから、次元世界から管理局に候補者を連れてきたと連絡があった。管理局の入隊適性試験は一発でオールクリアし、現在は新型デバイスの調整中とのことだった。

「しかしユーノ君もすごいお宝を見つけてきたもんやなあ」

はやてが苦笑しながら言うと、画面の向こうのクロノも同じ顔をした。

『ああ、正直僕も驚いた。まさか管理外世界にあれほどの資質を持った人間がいたとはね……こんなことはなのはの時代だよ』

「にやはは……でも、私と同じってことは、それってやっぱり先天的な体質ってこと？」

『僕たちのところで見た限りではそう見えた。ただ君たちと違うのは、デバイスを一から用意しなければいけないところ……いや、それだつたらむしろ最初から用意しなくてよかった君たちの方が例外だな』

「ちよつと、それなんか馬鹿にしてない？」

クロノが珍しく皮肉を言ったので、思わずなのはは反論した。

『ははは、すまない、ちよつと新人のすごさに圧倒されたからな』

「そんなにすごい人なの？」

クロノが驚くこともめつたにあることではないので、フェイトは不思議に思った。

『ああ……すごいなんてものじゃない、はつきり言えば、彼はデバイスなしでも十分にこの世界でも戦っていけるような人間なんだが、まあここに入れた以上、そんな力をおいそれと野放しにしておくわけにもいかないし、悪い言い方をすれば犯罪に加担されたりはしてほしくないからな……そんなことをすれば何があるか分からない』

「ちよう待って、今クロノ君、『彼』って言わへんかった？」

『ん？ ああ、言ったがどうかしたのか？』

「新人さん、男なん？」

『今頃気づいたのか？』

しれっとクロノは答える。だとしても、はやてには気がかりなことがあった。

「ええんやるか……こんだけ女が多い六課に来たりとかしても」

呟きが思わず口に出てしまう。

「そういえばそうだね」

なのはもフェイトもそれを聞いて思い出したように同意した。だが、それを聞いた画面の向こうのクロノは笑いだした。

「ははは、それだったら何も心配はないよ。言っただろう、僕が『溶け込めそうな人材を選んでおく』って」

「そりや言うつつたのは覚えてんよ。けど、何でクロノ君がそんなこと分かるん？」

三人はクロノの確信の根拠が全く予想できなかった。

「わかるさ。だって彼は――」

そこまでクロノが言ったところで、機動六課内にアラートが鳴り響いた。

「な、なんや！？ クロノ君！？」

慌てて画面に視線を戻す。

『南東海上より、ガジェットの反応！！ 数は…… 15、20…… 30です！！』

横からエイミイの顔が割り込んできた。

「よっしゃ、とにかく、なのはちゃん、フェイトちゃん、準備を――」

『待つて、同じ方向に新たな反応が！！』

はやての言葉は途中でエイミイの声にさえぎられた。

「新たな反応やて！？ どないなんや！？」

『ちょっと待ってください……数は5、でも……お、大きい!! 熱量がガジェットの数倍はあります!!』

「なんやて!? アンノウンか!？」

はやては思わず叫んだ。ガジェットの種類によっても熱量に違いはあるが、七倍というのは明らかにガジェットの熱量の値ではなかった。完全に別物である可能性が高いことになる。

『生体反応、ありません!! 無人兵器です!!』

エイミイの言葉がその緊張感に拍車をかける。

「新型のガジェットか何かやな……了解や、出来るだけこつちで対処するけど、もしもの時は救援の準備をしといてな」

『わかった、無理なら撤退も考えてくれ……無茶すぎて倒れるんじゃないぞ』

「わかつとる」

通信が切れる。

「どうする、はやて」

フェイトは真剣な顔で聞いてくる。新型の敵が来たなら、万全を期していつも以上の戦力で行くのが最善ではあるのだが、三人以外のメンバーはまだ多くが研修中で、実戦に出るには些か実力が足りていなかったのだ。

「なのはちゃんとフェイトちゃんの二人でまずガジェットの方を殲滅してくれへんか？」

「新型の方は？」

「私が後から出る」

「ええっ!？」

なのはとフェイトが同時に驚く。

「こつちもちよつと実戦でひと暴れしたい気分なんや。ええやんか、

たまに出るくらいは」

はやてが、ニヤツとした悪だくみをするときの顔で言ってくると、二人はそれ以上何も言えなくなってしまう。はやての心情も分からなくもなかったからだ。

このところ前線に出ているのは二人だけで、はやてはずっと後方指示に回っていたのである、ストレスがたまるといいうのも頷ける話だった。そして、そのストレスを発散できるのが実戦しかなかったのもまた然りである。

結局はやてに押し切られる形で、ガジェットをなのはとフェイトで、新型の方をはやても加えた三人で迎撃することになったのだ。た。

「来た！！」

管理局員の戦闘服、バリアジャケットに着替えたなのはとフェイトは、湾岸地区の港に居た。そして空から、機械が群れをなして迫ってくるのが見えた。

「敵、ガジェット？型30機、確認しました。スターズ01、ライティング01、これより殲滅します！！」

フェイトが叫ぶと同時に、二人は飛び出す。

今までの戦いで、敵は無人操作ということは分かり切っていたため、無論敵は単純な動きしかできないことは承知の上だった。

しかし今回は未知の敵がいる。魔力温存のために、いつものように大威力広範囲の攻撃でまとめて殲滅することもできたが、それをするとの戦いでガス欠になる恐れがあった。後ろの敵はどれだけの力を秘めているか分からないのである。そのため、今回は、時間がかかっても一機ずつ落としていくしか方法は無かったのだ。

「ハーケンスラッシュュ!!!」

フェイトが目の前に迫りくるガジェットに魔力の刃を放ち、その刃は真一文字にガジェットを両断する。その手に握られているのは、格闘戦仕様の人工知能付き杖型デバイス『バルディッシュ』である。フェイトが小さいころからの付き合いであり、バルディッシュを作り出したのもフェイト自身であった。

管理局に来る前、フェイトは『第97管理外世界』において、なのは、はやてとともに生活を送っていた。ミッドチルダで『魔導師』と呼ばれる人間は、その世界では『超能力者』と呼ばれた。三人は、自らの力で『杖』を作り出し、それを自らの手足のごとく振り回し、様々な超能力を使えるものとしてその世界に居た。

しかし、ミッドチルダほど『超能力』なるものが認知されていない『第97管理外世界』、またの名を『地球』。その世界ではむしろ、三人の方が異様な人間だった。不思議な現象を見たとしても、トリックの一言で片づけられてしまう。そんな世界だった。

その世界で、彼女たちは傷つき、居場所を失くした。自分の超能力を失いかけてりもした。彼女たちにとっては、日常そのものが、かけがえのないただ一つの輝きであった。そして次第に三人は、自らの超能力に自信を失い、自らの超能力の存在意義すら見失い、ばらばらになっていった。

そんなとき、事件は起こった。

彼女たちの周りの人々が、次々と超能力を失い、倒れた。それはたった一人の人間の持つ憎しみが起こした出来事だった。

しかし、それが彼女たちを再び一つにまとめるきっかけとなったのだ。

彼女たちの友人は、戦っていた。その友人が、彼女たちにきつ

けをくれ、失われた超能力の誇りを取り戻し、三人は再び自らの、自らの超能力の存在意義をそこに見出した。

「誰かを助けるため」に、その超能力を振るうこと。それが、すべての存在意義そのものだった。

そして、ある時、三人はその力を求められた。

世界のため、誰かのため、その力を振るってほしいと頼まれた。

断る理由など、無かった。

「アクセル……シューットオー!!」

なのはの周りに魔力の塊の球が幾つも形成され、ガジェットに向かって突撃していく。敵はバリアを張ったが、勢いを止めるにはパワーが足りなかったのか、球体はバリアを砕き、そのまま機械の装甲すらも貫通した。そしてその現象が幾つも立て続けに起きる。

「はあっ!!」

フェイトも負けじと『バルディッシュ』の先端に形成した鎌状の魔力刀を振りかざし、向かってくるガジェットを片っ端から斬り捨てていく。斬られたガジェットはたちまち爆散し、海にドボドボと落下していく。

「気を抜かないで、なのは!! まだ残ってる!!」
「うん!!」

二人は全方位に気を抜かないよう注意しながら、魔力消費の小さい技で的確に敵の急所をぶち抜き、瓦礫に変えていく。

五分もたったころ、攻めてきたガジェットは、全てが何の変哲もない金属片へとなり果て、海の底に消えていた。だが、今回はそれで終わりではないのだ。

「こちらライトニング01、ガジェット？型30機、殲滅完了」

フェイトは通信回線を開き、はやてに報告を入れる。

『了解やフェイトちゃん、新手的反応はそこから550のところに迫つとる！ 私も今からそっちに向かうから、無理したらアカンで！！』

はやてはそれだけを早口で言うと、通信を切った。

「距離550……大体一分あればここに来る……ってところかな」
なのはは呟いて、自らの杖型デバイス『レイジングハート』を握り直す。

フェイトの『バルディッシュ』と同じく、この杖は、もともと『第97管理外世界』で彼女たち自身が生み出した「超能力の一部」であり、それをミッドチルダで基盤に括りつけてデバイスとしたものであった。ゆえに、動きそのものは何一つ昔と変わらない。

なのはは魔力残量をチェックする。まだまだ大丈夫そうだった。フェイトも同じように魔力はまだまだ残っていた。いつもより魔力消費の低い術を、それもかなりパワーを絞ってやったのだから当たり前なのだが。

その時だった。

「！！！」

二人はただならぬ気配を感じて海のかなたを見遣る。それはだんだんと近づいてきた。そしてそれが目視確認できる距離まで迫ってきたとき、なのはとフェイトは同時に言葉を失った。

「何……！？ あれ……！？」

それが最初に二人の口から出た言葉だった。

なぜなら目の前に現れたのは、ガジェットとは似ても似つかぬ機械型兵器。

緑色の金属装甲に包まれた手足を持ち、手にはマシンガン、左肩にはスパイクアーマー、右肩にはシールド、顔には紅く光る一つのアイカメラを持ったロボットだったからだ。

顔の周りと腰回りにはパイプが回されている。何かの回路だろうか。しかし、それは今の二人には知る由も無い。

そして、そのロボットの目が不気味に輝きを放ったかと思うと、次の瞬間、二人に魔力弾の嵐が降り注いできた。

Cross・03 立ちふさがる力、立ち上がる力

『はやてちゃん、急いで！！ こいつら、ガジェットとはぜんぜん別物だよ！！』

なのはからの通信でそれを聞いた時、はやては色々な意味で焦った。

一つは自分の予想よりもはるかに脅威となる敵であったこと、もう一つは最初から出ておけば良かったと後悔したことだった。

なのはが通信をしている間にも、画面の向こうで爆発と衝撃が起こり、画面が揺れ、ノイズが割り込む。誰の目にも異常事態であるのは明らかだった。

「頼む、持ちこたえてくれ！！」

はやてはそう叫びながら、バリアジャケットを展開し、隊舎の屋上から飛び立った。

「ファイア！！」

フェイトは無数の雷撃の矢を敵に向かって放つ。

しかし、その矢はすべて、敵の装甲に弾き返され、砕け散ってしまふ。

「くっ、やっぱりこんな威力の低い誘導魔法じゃ歯が立たない！！」
フェイトは歯噛みした。なのはのアクセルシューターといい、フェイトのフォトンランサーといい、スピードだけで威力にはさほど重きを置いていないため、弾き返されてしまふ。

かといって、接近戦をしかけようものなら、見た目通りの質量にものを言わせて反撃され、その大きな図体がぶつかっただけでもかなりのダメージを受ける可能性があった。ゆえに、こうして遠距離

攻撃魔法で遠くから対応する以外に方法が無いのである。

「なのは!!」

「しょうがないね……行くよ!!」

二人は覚悟を決め、本気の構えをとる。それを察知してか、敵も身構えるような動作をとった。

「デイベイイイン……バスタアアアツ!!」

『Divine Buster』

レイジングハートが復唱すると同時に、その先端から特大の砲撃が放たれる。そしてそれは狙い違わずまっすぐに人型機械に向かっていき、命中した。

轟音とともに爆煙が上がり視界が遮られた。そして、視界が晴れた時。

「なっ……!!」

「そんな!？」

そこには、無傷で屹立している敵の姿があった。その体勢から見て、どうやら右肩にあるシールドのようなもので防いだようだったが、そのシールドでさえ、管理局での砲撃魔法で一、二を争うとまで言われるなのは『デイベインバスター』を食らったにもかかわらず、少し溶けて凹んでいるだけであつたのだ。シールド以外の場所に当てても、恐らく焼け石に水程度の効果でしかないだろうことは明白だった。

「なのは！！」
「っ！！」

その隙に、今度は先ほどとは別の人型機械が、腰にマウントされていた斧のような武器を振りかざし、一直線に向かってきた。

なのはは慌ててプロテクションを展開し防御態勢に入る。

凄まじい金属音とともに衝撃音が響いた。しかし、押し負けているのはなのはの方だった。

「……う、く……あ」

受け止めたその斧は恐ろしい熱量を持っていた。魔法で物理的な壁を作って衝撃を相殺することはできても、その斧から発生するさまざまな熱までは防ぎきることはできない。しかもそれを至近距離で浴びれば、反射的に身体が防御行動をとってしまう。

「プラズマスマッシュアアッ！」

フェイトが放った一直線の電撃が機械の頭部に直撃した。反動で相手はふらつく。やつのことではなのははその均衡から抜け出せたが、熱で受けたダメージはちょっとやそつとでは済まされないものだった。バリアジャケットがところどころ熱で焼け焦げている。

どう考えても勝てる相手ではないのは目に見えていた。リミッターを掛けているとはいえ、それでも一撃でガジェットを何十機も殲滅できるなのはの『デイベインバスター』を食らってあの状態なのだ。繰り返しやれば撃破は可能かもしれないが、それだと逆に落とす前に二人の魔力が底をついてしまう可能性が高かった。しかし、今はそんなことを憂慮している場合ではないのだ。

やらなければ。二人は無理でもそう考えるしか方法は無かった。それでもまだ、道は残されていると信じて。

その時、二人の上に影が浮かぶ。

「……！」

見ると、いつの間にか人型機械のうちの一体が二人の上に位置取っており、そして今まさに、肩に持った長大な銃器を二人に向けて放とうとしているところだった。

「しまった、上だったんだ……！」

フェイトが叫ぶと同時に、銃撃が放たれる。大型の魔力弾と思しき攻撃が、強烈なスピードでなのはとフェイトに向かってきた。二人は間一髪でそれを避けたが、避けた弾は海中に着弾すると爆発を起こし、大きな水柱を噴き上げる。

「……！！！」

二人はそろってその威力とスピードに呆然とするしかなかった。威力は恐らく『デイベインバスター』に匹敵する強力さだろう。しかし、威力は同じでもスピードが段違いなのだ。速度は『デイベインバスター』はおるか『プラズマスマッシャー』と同じかそれ以上であるようにさえ見えた。

図体の大きさに見合わない、でたらめな攻撃力と防御力。今目の前に居るのは、それを持ち合わせたかつてない敵だった。

「……！　なのは、上……！」

言われて上を見ると、まさに二発目が発射されようとしていたところだった。あんな破格の攻撃を何発も打てるのか。その考えが、その恐ろしさが、二人の背筋を駆け抜け、動きを一瞬だけ鈍らせた。無論相手がそれを見逃すはずも無く。

魔力光が収束していく。が、それは銃口を離れることなく、その火器の持ち主が、横から飛んできた何かの直撃を受け、体勢を崩す。

「行け、バルムンク!!」

はやてがそう命ずると、8つの光の矢が一斉に敵めがけて突撃し、そして残らず命中する。

「大丈夫やったか!？」

「なんとか……ね」

「でも、正直私たちじゃ敵う相手じゃないよ、はやて……リミッタをつけてるとはいえこうだもの、はずせば何とかかなりそうなんだけど……」

「その前に私たちの体が持たん……そういうことか？」

はやての質問に、フェイトは無言で頷く。

「……上等や、ほな、私が一発きつついのをブチかましたるで」

「ちよつとはやて、何する気!？」

フェイトが慌てて聞き返すが、はやては含み笑いを浮かべて答える。

「大丈夫や、滅多なことはせえへん、ただ、二人と違って手加減を最初から抜きでいくだけや」

そう言つと、はやては剣十字が先端に付いたデバイスの杖『シュベルトクロイツ』を構え、先端に大型の魔方陣を形成する。

「撃ち貫け!! ミストルティン!!」

はやてが叫ぶと同時に魔方陣から七つの矢が放たれる。そのうちの二発が、敵の手に持たれた銃器をとらえ、そこに食い込む。すると、銃器は矢が食い込んだ部分からたちまち石になり、次の瞬間に

はひび割れて砕け散っていた。そこまでは良かったのだが。

「なっ……んなアホな!？」

驚いたのははやての方だったのだ。武器を砕いた残りの矢は、真っ直ぐ命中し、敵の外装に食いこんで石にするかと思われた。が、食いこむはずの矢は、装甲を凹ませるところか、かすり傷をつけただけで弾き返されてしまった。

「ミストルティンでもダメ……ってこと!？」

フェイトは今起こったことを噛み締めるように、しかし信じることができないといった様子で呟いた。

「ほんならこれで!!」

はやての杖の先に再び大きな魔方陣が形成される。

「撃て、白銀の風!! フレスヴェルグ!!」

魔方陣から銀色の光が放たれ、まっすぐ敵に向かっていく。光はそのまま狙い変わらず真ん中に居た一体に着弾し、爆発した。眩しい光になのはとフェイトは思わず目を覆う。

煙が晴れた時、そこには左の半身を胸から腰辺りまで抉られ、火花を散らす敵がいた。抉られたところからは配線が飛び出し、スパークを起こしている。

「やつぱり機械、しかも無人……無人であそこまで強力な攻撃をするなんて……」

フェイトが呟くと同時に、その相手の顔に赤く光っていたカメラアイの光が吸い込まれるように消えていき、そのままそれは力なく海に沈んで行った。

「はやてちゃんの『フレスヴェルグ』で、ようやく一体……」

「どんなもんや」

そう啖呵を切るはやてであつたが、すでに少し息が上がつていた。リミッターを掛けていなければもつと撃てるのだが、今の状態では出せるパワーも低く、低い中で無理やりこじ開けるように攻撃しようやく一体始末できたのである。どう考えても効率が悪すぎる。

「まあとにかく、これくらいの大威力の砲撃魔法でないと通用せん言うことや」

はやてはそう言つて表情を真剣に戻す。

「もつと威力の高い魔法……つて言つたつて……」

なのはも割り切れないと言つた表情だ。

あるにはある。なのはにもフェイトにも。今まで使つた魔法より威力は数段高い、最後の切り札と言つべき魔法があるにはあつた。

しかし、どう考えても不可能な話であることは明白だつた。一度その魔法を使えば最後、休まなければ二度撃つことはできない。最後の切り札は一度きりなのだ。しかも、リミッターを掛けていればなおさらである。一度の砲撃で倒せばいいが、倒せなかつたら逆にピンチになりかねない。そのうえ、仮に倒せたとしても、敵は5いるのだ。数でもこちらが不利である。数を減らせても、自分たちが疲労してしまえば、たとえ敵が自分たちより少なくとも一氣に押し返される危険もあつた。

かといつてはやて一人では、リミッター解除なしでこれを全滅させられる可能性も限りなく低かつた。あいにくとなのはもフェイトも、はやての魔法の威力にはまだ及ばないところが多いのである。リミッターを解除せずに、かつ切り札を使わないことを考えると、先ほどの一撃が精一杯だつた。

「どうすんの？ 一か八か、やるん？」

はやては横目でなのはとフェイトに問いかける。

「……………」

二人は唇を噛んで悩んだ。今までも散々逆境を切り抜けるために無茶はしてきた二人だったが、今回はそれをはるかに超える無茶をしなければ切り抜けられるはずもないのである。

「……わかった、やりたくはないけど、やるしかないみたいだね」

「……うん」

フェイトの答えになのはも頷いた。二人はそれを実行に移すべく、杖を構え直した。

だが、魔法を発動させようとしたその時、残った四機の人型機械は、静かにゆっくりと踵を返し、元きた方向へ飛び去っていった。まいった。

「……撤退、してく」

「とりあえず、助かった……のかな」

少し拍子抜けした感じもしなくはない三人であったが、今は素直に喜ぶことにした。そうでないと、アレと戦ったあとでは生きた心地がしなかったからだ。

翌日、機動六課から本部へ報告が行われた。さすがにクロノもそれ以外の誰もが驚きを隠せなかったようで、画面の向こうからざわめきが聞こえてくるのを聞こえなかったふりをして、はやては手短かに報告を済ませた。

打開策はそう簡単には見いだせないと思っていたはやてであったが、それに対してクロノの回答は意外なものだった。

『大丈夫だ、増員と一緒に、調整を済ませた対抗兵器を六課に送る』

「へっ!？」

それを聞いて、はやてはなのはとフェイトと一緒に間の抜けた声を出してしまった。自分たちでさえあれだけ苦戦したあの人型兵器を撃退できる対抗策のカードが管理局にあったとは、まったくもって寝耳に水だったからだ。

「対抗兵器……って、なんやねんそれ!? 私ら聞いてへんぞ!？」
『そりや当り前だ、管理局内部でもこのことを知ってる人間は少ないんだ、知らないのが普通だ』

しれつと答えるクロノに、はやては一杯食わされたと思った。もしあそこであの敵と遭遇していなければ、その対抗策が機動六課に回されることも無かつただろうと思ったからだ。

「要するに、六課はテストベッド、そういうわけやな、クロノ君？」
そう皮肉を返すと、画面の向こうのクロノは困惑したような顔を一瞬したが、すぐに、

「そう思われても仕方がないな、まったくだ」
苦笑いをして答えた。

それから三日後。

管理局では作業が大詰めを迎えていた。第375管理外世界で発掘されたロストロギアの機械兵器に、管理局が開発したデバイスのOSの発展型を組み込んだそれは、技術スタッフの手によって、OSの最終調整が行われている真つ最中だった。

一方、そのメカとともに機動六課に派遣される隊員は、クロノの判断で一人に絞られていた。誰かといえば、それは紛れもなく、ユイノが発見した魔力資質の高いその人であった。

その人間のあまりの能力の高さに、管理局の人々は皆、舌を巻いた。管理局の入隊試験、魔導師適性試験はすべて文句なしにクリアだった。そして、その高さたるや、今管理局に存在するどのデバイ

スすら処理が追いつかないほどのものがあつた。現段階での最新型デバイスをもってしても、彼のスピードには到底追いついていなかった。

そして管理局は、無理を承知で、技術部により処理能力の高い新型デバイスの開発を命じたのである。ただでさえロストログアの兵器転用調整で忙しい技術部は、舞い込んだ追加の仕事にてんてこ舞いだったのだ。おかげで新型デバイスの開発に時間がかかった分、ロストログア兵器の最終調整が予定より二日もずれ込んでしまっていた。

ロストログアが横たわるドックを右往左往する研究員をガラス越しに上層の廊下で眺めながら、クロノはその人物に新型デバイスを渡していた。

「これが今回、管理局技術部が総力を挙げて開発した新型デバイスだ。名前は後で君がつけてくれ」

「感謝する」

彼はそのデバイスをしげしげと眺めた。ピンバッチとして携帯できる代物で、銀色のX字型をしたアクセサリーの真ん中に澄んだ水の色をした菱形の宝石。X字の全ての端には四つの円い水晶。

「綺麗なもんだな」

「気にいったなら何よりだ」

「それで？ アレも機動六課とやらに持って行けということは、俺にアレの操縦をやれということか」

彼はガラスの向こうに横たわるそれを見ながら聞いてきた。

「見透かされていたか。早い話、そういうことだ」

クロノは少し驚いたかに見えたが、冷静にそう答えた。

「大方、誰も操縦どころか、乗ったことすらないんだろう？」

「この世界、ではな」

「それで、この世界でも力に出来るモノはなんでも力にするということか？ 随分と欲があるな、管理局も」

「君に言われるまでも無いが……致し方のないことさ」

クロノは苦い顔をして答えた。

クロノが彼にここまで砕いた話し方を許しているのには訳があった。それは今から五日前にさかのぼる。

機動六課が四度目のガジェット殲滅戦に出撃していたその日、彼は時空管理局にやってきた。招いたのは誰であろうクロノ本人である。

クロノが期待していた通り、彼は機動六課の隊長陣と知り合いであった。彼女たちの痛みを知る人間であったことに、クロノは内心驚きを隠せないでいた。

そしてクロノは、管理局の力になってくれなかと頼み込んだ。当然、名も知らぬ組織に勧誘されれば、戸惑うか断るかすると思っていた。だが、彼から返ってきたのは、答えではなく質問だった。

「『力になってくれ』ってのはどういう意味だ？」

クロノは一瞬理解ができず、聞き返していた。彼は答えた。

「力は、使う者によって善にも悪にもなる。お前が俺に求める力は、何をするための力だと聞いているんだよ」

クロノは戸惑ったが、答えた。世界の平和を守り、世界の悪と戦うための力になってほしい、と。少し前までは力を持つ管理局はただ純粹に正義であると考えていたクロノだったが、今考えればそれは間違いであったのだから。

彼が言うことを当てはめれば、管理局に対抗する犯罪組織があつても、場合によってはそれが純粹に悪とは限らないということだ。管理局のやり方が気に入らなくて反抗するのであつても、それは横

から自らの正義を無理やりその世界に当てはめて押し通そうとする管理局が気に入らないということでもある。

クロノは数年前ある出来事でようやくそれを理解したのだった。追い詰められたある手配犯が、こう叫んで自ら命を絶っていたからだ。

「覚えておけ。正義とは必ずしも正しいわけではない。正義であっても、その正義と戦う人間にとっては、その正義はたちまち悪になるのだ」と。

戦うということは、すなわち自らの正義をぶつけあうということである。ぶつかる側にすれば、ぶつかる相手は悪だ。自らが正義だと考えている以上、相手は悪でしかなくなるのである。そしてそれは相手も然りであるのだ。

クロノがそう答えると、彼は口元に笑いを浮かべて言った。

「どうやらお前は、力の使い方を分かっている人間らしいな。わかった、その頼み、引き受けるよ」

クロノが、「自らが悪と捉えていたモノ」にこれほど感謝したことは今まで無かっただろう。自らを正義として他者を一方的に悪と決め付けるのは、それこそただの悪でしかないのだ。クロノはそれが自分も理解できていたことに内心ホッとしていた。

そして同時に、クロノもまた、彼を力の使い方をよく知る人間だと直感していた。彼の目が、力による過ちがどれだけのものであるかを、そして、そこから来る悲しみがいかなるものかを、嫌いというほど知っていることを物語っていたからだ。だからこそ、クロノはあの質問の意図を理解出来たのであった。

そして、彼の知る、力が生み出した悲劇を、力を求めるがゆえに存在する悲しみを、クロノも知っていた。

だからこそ、クロノは彼を自らよりも遥かに正義と悪が何たるかを知っている人間だと認め、そこから二人はかなりの歳の差にかかわらず、あれほどまでに腹を割って話せる関係になったのであった。

「それで、機動六課とやらには誰が居るってんだ？ 何でも俺の知ってる人間だとか言っていなかったか？」
「ああ、詳しくは伝えていなかったな、確かに君が良く知る人間だよ」

だが、クロノがその名を言う前に、その声はアラートによって遮られた。

海上に、機動六課が遭遇した人型機動兵器が10機、出現したという知らせだった。

「クッ、こんなタイミングで！ 機動六課を急いで迎撃に当たらせるんだ！！」

クロノは通信を開くと、本部のエイミィに怒鳴るように指示した。
『わ、わかりました！ でも、数はこの間とは……！！』

「わかってる！！ 管理局も武装隊を派遣すると伝えておいてくれ！！」

『りよ、了解！！』

エイミイが通信を切ると同時に、マリエルからの通信が割り込んだ。

『クロノさん、ロストロギア機動兵器のOS調整、完了しました！！』

「なに！？　そうか、いいタイミングだ、良くやってくれた！！　すぐにでも機動六課の応援に向かわせるから準備をしろ！！」

『ええ！？　もう動かすんですか！？』

「今は動いてもらわなければ困るんだ！！　六課のメンバーを見殺しにするわけにはいかない！！」

『りよ、了解しました、起動準備に入ります！！』

クロノの切羽詰まった怒鳴り声に、マリエルは慌てふためきながらも了解した。

クロノの案内で、彼はドックに降りた。

「調整済みでした、問題が無ければすぐにでも動く筈です」

「そうか、わかった、行ってくれるな？」

クロノは彼に向き直る。彼は頷いた。

「あつちの人間が誰かは知らんが、命を黙って見捨てるほど俺も悪じゃないし、する気も無いからな」

鈍く光る銀の四肢。藍色、黄色、赤のトリコロールに染められたその胴体。黄色と白のV字アンテナと緑色のツインアイが印象的な頭部。背にはブースターと思われるバーニアと武器の使用に供する二つの棒状の装置が付いたバックパックがあった。

彼はその腹部にあるコックピットに潜り込む。

ゆつくりと扉が閉まる。マリエルに言われた、コンソールの中央にある起動スイッチを押す。

すると、目覚めるようにツインアイに輝きが宿り、コックピット内にあるスクリーンは徐々に周囲の景色を映し始める。

『問題はないか！？』

「まだ慣れないが、何とかなるだろう」

外からのクロノの通信に彼は答える。

『コンソールの中央上にある凹みに、貴方のデバイスはめ込んでください』

マリエルに言われて見ると、確かに起動スイッチの上の方に、デバイスはめ込めるくらいの窪みがあった。色々なデバイスで運用するのを想定したのか、重なって色々な形の穴が段状に上手く空けられているのには感心させられてしまった。

Xの形に空いた一番上の浅い段の穴に上手くはめ込むと、

『hello, my master』

宝石の部分が光り、言葉を話した。

「よう、初めましてだな。いきなりの実戦だが、焦らず行こうぜ、ゼロ」

『ゼロ……私の名前ですか？』

「ああ、俺もお前もゼロからのスタートだからな、ついでに可能性もいろいろだ。お前は進化するデバイスだと聞いたからな。0は足した数字をそのまま答えにする、だったらその方が意味合いとしてもいいだろうと思ってな」

『なるほど……確かにそうですね』

デバイスの声は納得したように言った。

「それじゃあ行くぜ？ インフィニティ Infinity ゼロ Zero、システムを

この機体のOSに直結、サポートを任せる」

『All right. Link to system, Drive starting』

同時に画面にウィンドウが表示され、機体がデバイスのOSと直結したことが表示される。

『Extreme Gigantic Unlimited Neutral Drive Assault Module』

「エクストリーム、ガンダム……」

システムの起動完了画面に表示されたその文字を見て、彼は自然とそう呟いていた。それがきつとこの人型兵器の名前なのだろう。

『Hello, Infinity Zero. My name is "EXTREME G.U.N.D.A.M"』

この機体のOSがゼロに自己紹介をする。これを見ると、機能的にはもはやデバイスに等しいと考えていいだろう。

「くれぐれも喧嘩だけはするなよ？ どう動くかは俺が指示する」

『All right.』

彼が釘を刺すと、二つの『デバイス』は同時に了解と答えた。

『エクストリームガンダム』がゆっくりと背中から起こされていく。床がせり上がり、ガンダムを直立姿勢にした。

『頼んだ。いきなり実戦は危険だと思うが、君なら何とかできると信じてる』

「了解した。無理でも何とかしてみせるさ」

『システムオールグリーン、発進準備OKです』

マリエルの声とともに、『ガンダム』は背中のパニアを勢いよ

くふかす。

『エクストリームガンダム、これより正体不明の機械兵器撃退、および機動六課の援護のため、発進する！！』

そして、銀色の巨人は、光と風と共に、空へ飛び立った。かけがえない仲間を護るために。

Cross・04 再会

「はあ、はあ……」

なのはとフェイトは息が上がりがらも、10機の敵との交戦を続けていた。すでに何発もの砲撃魔法を使用していたため体力は限界に近かった。しかし、それだけの魔力を持っても、相手は未だ大いに健在だった。

「サンダーレイジ!!」

フェイトは拘束の効果を兼ね備える雷撃魔法を発動させ、確実に当てようと試みる。しかし、拘束をかけたままでは良かったが、その拘束を爆発させてダメージを与えるはずが、力ずくで拘束を破壊されてしまう。

「デイベイン、シュータアツ!!」

ならばと、なのはは『デイベインバスター』の威力を落とした代わりにスピード強化を施したタイプの砲撃魔法を放つ。砲撃魔法とは思えないスピードで敵に迫る桜色の光。だが。

「嘘!？」

驚いたのはなのはの方だった。何と敵は、十数メートルはあろうかというその巨体にとても似つかない俊敏な動きでその砲撃をいとも簡単に避けてしまったのである。

「んなアホな!？ あの大きさでなのはちゃんの『デイベインシューター』を避けるなんて!!」

はやても同じく驚きを隠せていない。だが、敵は驚いている暇など与えず、手に持った機銃のような武器から雨あられと魔力弾の嵐を浴びせる。三人は何とかガード出来てはいたが、スピードがあまりに早く、衝撃を完全に消すことはできていなかった。

「うああっ!!」

ついにプロテクションが限界になり、三人の中で最もバリアジャケットの防御機能が薄いフェイトに直撃が命中した。まともに食ら

ったフェイトはそのまま衝撃で吹き飛ばされ落下する。

「フェイトちゃん!!」

なのはが叫んだが、それを見逃すまいと、敵はこの前と同じように、再び斬りかかってきた。なのははとっさにガードするが、やはり斧が持った凄まじい熱量を相殺することはかなわなかった。

「プロテクション……ブレイク!!」

なのはがそう唱えると、魔法で形成したバリアが消えると同時に爆発した。その衝撃は、本体にこそダメージは及ばなかったが、斬りつけるのに使った斧を粉碎した。

なのははその隙に墜落したフェイトのところへ向かったが、武器一つを失った程度で敵が怯む筈も無く、再び魔力弾の嵐が押し寄せてくる。

「クロノ君!! 今管理局の方はどうなつとるんや!!」

はやては攻撃を必死で防ぎながらクロノに向かつて怒鳴る。

「今応援がそっちに向かつてる!! あともう少しだけ持ちこたえてくれ!!」

クロノも焦りを隠せていないのは同じだった。しかし、まだ希望を捨てているわけでもなかった。

「早く来んかい、でないと、ウチらが先に墜ちてまうやんか」

はやては唇を噛んでその時を待つ以外になかった。

「フェイトちゃん!? フェイトちゃん!!」

衝撃で数十メートルも吹き飛ばされ、湾岸地区の森に墜落したフェイトのダメージは深刻だった。たった一発の魔力弾は、フェイトの右手と左足、左下脇腹のバリアジャケットを砕いていた。どう考えても魔術師が放つ魔力弾とは威力も速度も次元違いであるのが一目瞭然であった。食らえばなのはもはやても無事では済まないだろ

う。

「クッ!!」

なのははフェイトの無事を信じて空へ飛び上がる。しかし、その直後、横からひととき大きな魔力弾が飛んできて、なのはが咄嗟に張ったプロテクションに命中し、なのはは体勢を崩す。そこにもう一撃とばかり、相手がそれを放ったバズーカのような重火器を構え、狙いを定める。

「させへん!! フレスヴェルグ!!」

はやてが間一髪のところそこで白い砲撃を撃ち込み、どうにか火器を粉碎した。

「どうもないか!? なのはちゃん!?」

「な……なんとか」

なのははふらつきながらもなんとか体勢を立て直す。しかし。

「しまった!!」

ふたりは同時に叫んだ。いつの間にか四方を丸く敵に囲まれていたのである。そして囲んだ敵は、全てがそれぞれバズーカを持ち、二人に向かって一斉に砲撃を叩きこもうとするところであった。

魔力光が四方で収束していく。二人が避けられる死角の場所ははどこにもない。

二人が一か八かとプロテクションを張ろうとするが、それを言い終わる前に、四つの緑色の砲撃が一斉に放たれた。

フェイトは動かない身体とぼやける視界で、その様子を見ていた。叫ぼうとするが、痛みあまり声が出なかった。それでも必死で立ち上がり、飛び上がるうとしたが、そうしようとして上を見上げた時、そこに見えたのは四つの魔力光が一斉になのはとはやてに向かつて放たれる瞬間の光景であった。

脳が動けと命令するが、身体が動かない。だが、その時、フェイ

トの視界にもう一つの光が映り込んだ。

プロテクションを張り終わるのが先か、相手の攻撃がこちらに来るのが先か。どちらにせよ大ダメージは免れなかった。それでも二人はあきらめずに抵抗を試みるほかなかった。そして、こちらに向けられた四つの銃口から、一斉に緑色の魔力光が放たれ、一直線にこちらへ向かってくる。視界が緑色に染まっていく。二人は思わず目を閉じた。

しかし、いつまでたってもその衝撃は来ることはなく、代わりに奇妙な爆発音が響いた。二人はさすがに妙だと思い恐る恐る目を開けてみると、こちらに向けられていた四つの重火器が全て爆発し、燃えながら敵の手から落ち、海に落下していくところだった。

「え……！？」

二人は一瞬何が起ったのかと思い呆然とする。だが、その理由はすぐに分かった。二人の後ろから水色の魔力光が飛んできて、二人の横にいた別の一機を貫いたのである。

二人は驚いてその方向を見遣る。すると。

「アレは……！？」

二人の目が驚きと疑問に彩られる。

二人の目に映ったのは、背中から光を放ちながらこちらに向かってくる、銀色の人型機械であった。

「あれって……もしかして……」

その様子をフェイトは地上から見ていた。その人型機械は、右手に持ったライフルのようなものから水色の光を放ち、なのはとはや

ての周囲に居る敵の頭部や胸部を撃ち抜き、たちまちのうちに沈黙させていく。

なのはやはての砲撃でさえ決定打を与えられなかった敵の装甲を、たった一発の魔力光で貫き、黙らせる。あの攻撃が一体どれほどのものであるかは、遠目に見るフェイトには分からないことだった。しかし、そうしている間にも、敵は、相手を二人から銀色の人型機械へと変え、魔力弾の嵐を浴びせようとしていた。

「なに……あれ!？」

「もしかして……アレがクロノ君の言うところの応援か!？」

なのはとはやては、突然のイレギュラーの乱入に内心驚きを隠せないでいた。一瞬敵かと身構えたが、銀色に輝くその機体は、右手に持った銃のようなものから水色の光を放って敵を次々爆散させていくのを見て、そうではないと確信したのであった。

援護すべきかと考えるが、今の自分たちの状態では無理な話であった。疲労も限界近くまで溜まっており、その上援護できたとしても、有効打を与えられない自分たちではかえって足手まといになるかもしれないと思いなおし、ただ見ることにしかなかった。

しかし、そうしている間にも、彼女たちが避けることさえまなならなかった魔力弾の雨が、銀色の機体めがけて浴びせられていく。

しかし、銀色の機体は、それを意に解さぬとでも言うように華麗なバレルロールとブーストで避け、お返しとばかりに敵の四肢を残らず吹き飛ばし、海に沈めていく。

銃撃戦では分が悪いと判断したのか、敵の一機が再び腰の斧を構え、銀色の機体に肉薄する。すると、銀色の機体は背中についた二本の棒状のものの片方を掴んで引き抜いた。同時に、その棒の先端から、桃色の魔力光が伸びる。それはまるでフェンシングのサーベルのようにしなり、銀色の機体はそれを振りかざして、向かってくる敵に突撃する。

武器の刃同士がぶつかり、つばぜり合った。かと思われたが、その直後、細い光の剣は、敵の斧ごと敵の胴体を真一文字に両断していた。そしてその勢いで、援護しようとして機銃を構えていた後ろのもう一機も斬り裂いてしまう。斬り裂かれた二機はそれぞれ爆発を起こし、細かな金属片となって海に落下していった。

そしてとうとう、敵は一機が残るだけとなったが、その時、その敵は、腰についていたいびつな形の何かをこちらに向かって投げつけてきた。次の瞬間、それは目の前で大音響とともに爆発し、飛び散った欠片が四方八方に飛び散る。同時に煙が巻き起こり、視界が遮られた。

欠片は空中、地上お構いなしに降り注ぐ。三人は何とか余力を振り絞ってそれを防ぐことに成功するが、煙の向こうで、敵が背中についたバーニアをふかす音が聞こえた。

恐らく、投げたのは目くらましのためのクラッカーのようなもので、それを使って敵が怯んだ隙に逃げるという算段だったのだろう。しかし、銀色の機体はそれをまるで気にしていないかのように、煙の中を突き抜け、逃げる相手を追いかける。

煙が晴れた時、三人が見たのは、逃げた緑色の敵が、銀色の機体に追いつかれ、手に持っていた光の剣と、いつの間にか抜いていたもう一本の光の剣で、X字に胴体を破断されるところだった。

斬り裂かれた敵が海中に沈んで行ったあと、銀色の機体はこちらに戻ってきた。

しかし、まだ油断はできない。助けてくれたとはいえ、たまたま利害が一致していただけという可能性も捨てきれなかった。真偽を確認すべく、はやてはその機体に向かって念話と呼ばれる、テレパ

シーのような意識会話術を使い、コンタクトを試みることにした。
「こちら、時空管理局機動六課部隊長、八神はやてです。救援、感謝します。しかし、貴方が味方であるかどうか確認が得られません。味方であるなら、今ここで名前と所属部隊を名乗ってください」
なのはとフェイトもそれを聞きながら、銀色の機体を見つめる。
と、その時、はやてだけでなく、彼女たち三人の前に、念話ではなくホログラムの通信画面で返信が返ってきた。

『……えっ！？』

その画面を見た途端、三人の顔は驚きで一杯になった。

『よう、久しぶりだな』

話し慣れたような言葉遣いで三人に話しかけてくる画面の向こうの顔は、彼女たちにとってあまりにも見覚えのある、いや、見慣れた顔であつたからだ。

『高岡……君……！？』

三人はまだ驚いた顔のまま呆然としている。

『いつまでそうしてるつもりだ？ 詳しい話は機動六課の方でやるから、行くぞ』

そう言うと、銀色の機体が背のバーニアを吹かし、機動六課の本

部がある隊舎の方向へと飛んで行った。

「い、今のは……」

「うん、間違いなく、高岡君……だったよね」

はやての問いに、なのはも驚きを隠そうともせず答える。

「本物……なんかな……!？」

「分かんない……とりあえずフェイトちゃんを連れて隊舎に戻ろっか？」

「せやな……」

そう言つて、はやては先に隊舎のある方向へ飛んでいった。なのはその後からフェイトを拾つて、片手を繋ぎ、そうしてどうにかフェイトも引つ張られて六課へ戻ることができたのであった。

戻つてきてみると、銀色の機体は、隊舎の裏手にある、ヘリなどを整備点検するためのドックの入口の横に着地するところだった。なのはたちはそれを見ながら、バリアジャケットを解除しドックのシャッターの前に降り立つ。

すると、機体の腹部がプシュツという音とともに上に開き、中から一人の青年が、開いた出入り口から下に伸びるロープに掴まって下降してくるのが見えた。三人は、その姿をよく知っていた。管理局では見かけない白い制服を着てはいたが、その顔は二年前に見た時とほとんど変わっていなかった。

「改めて、久しぶりだな、三人とも」

「ほ、ホンマに、高岡君なん？」

はやてはまだ目の前の人間が本人であると信じられないと言った様子で聞き返してくる。

「残念だが、本人に間違いないさ」

彼は軽く冗談めかして言った。

「……やっぱり、高岡君も、クロノ君に呼ばれて……？」

「ああ、初めは驚いたんだがな、まあ、あいつはあいつなりに考えがあるようだったし、力の使い方をよくわかってる人間だと思っただから頼みを聞いたんだ。管理局の力になってほしい、ってな」

なのはの問いに、彼はこれまでクロノと交わした言葉を説明してみせる。さすがに機動六課になのはたちがいるということまでは聞いていなかった、というより、聞きそびれてしまい、そこまでは知らなかったということではあったが。

「それで、これは何なん？」

はやてはそこで、一番聞きたかった銀色の巨人について切り出す。他の二人も頷いて聞く気満々だという素振りを見せる。

「『エクストリームガンダム』。一か月前に管理局の警備隊が第375管理外世界で偶然見つけた機械兵器だ。一種のロストロギア、と言ってもいいかもしれない」

「ロストロギアやて!？」

そこではやてが叫ぶ。ロストロギアを探す立場にあるはやてからしてみれば、探すべきはずのロストロギアを逆に手元に置いておくというのは納得のいかない話だった。しかし、彼は冷静に話を続ける。

「まあ、無理も無い。第375管理外世界は、とつくの昔に戦争で文明が滅んでしまった世界だ、そんなところにこんな機械兵器があるのは明らかにおかしい話だからな、管理局も、残しておいては犯罪者に拾われると判断してこうしたんだろう」

「管理局は、それをどうするつもりやったん？」

「滅多にない拾いものだったらしくてな、クロノが言うには、管理局の戦力として転用すべきってことで、A IとデバイスのO Sに対応したシステムを組み込んで改良したらしい。で、それを俺がここに持ってきて、今ここにあるというわけさ」

はやてはまだどこか割り切れない顔をしていたが、管理局にも何か考えがあるのだと理解したのか、それ以上の追及はしなかった。

「機動六課に配備されることになってから、技術部が突貫で対応作業をしたらしい。まあ性能は保証済みだ。一応今は俺のデバイスで動くようになってるが、同庁作業さえやれば誰のデバイスでも動かせるようになってる」

「俺のデバイス……って、高岡君、デバイス持ってるの？」

なのはが思いだしたように聞き返してきた。

「ん？ ああ、言ってなかったな、俺のデバイスはこいつだ」

『ゼロです。お初にお目にかかります』

「これがデバイス？」

フェイトは彼の胸に付いたピンバッジが光って言葉を発するのを見て聞いた。今までここまで収納性重視のデバイスも見たことが無かったからだ。

「まあ、聞きたくもなるだろう。魔導師ランクS S以上の魔導師の使用を前提に、技術部が総力を上げて開発した次世代型デバイス、これはその試作型だ」

「S S以上お！？」

はやてが素つ頓狂な声を上げた。無理もないことだろう。管理局内でもS S以上の魔導師は少ない。ましてS S以上となると相当少なくなり、指で数えられるか数えられないくらいしか居ないのである。はやても他の二人も、過去に彼の力量がどれほどのものであるかはよく分かっていたが、それでもそんな狭い対象範囲に限定してそれ専用の高性能デバイスを作るなど、はたから見れば資金の無駄遣いもいいところである。

「ああ。だがこれはクロノの独断じゃない、俺の適性試験に立ち会

った局員全員が全会一致で決めたことだ、文句を言われても困る」
彼は困惑したような顔をする。

「俺がこの世界に呼ばれたのは、この機動六課の戦力増強のため、あるいは、お前らが戦ったあの人型機動兵器の対策のためだ、このデバイスも、あの機体も、全てはそのためにここに持ってきた」

まるで便利屋のような扱いであることに、三人は戸惑った。彼の過去を知る三人にとっては、これ以上彼がそのような扱いを受けることによく同意できたものだと思ったが、次の言葉でそれは否定された。

「俺自身、こんな管理局の使い走りみたいな役回りは正直困る。だが、それ以上に今は、どんな立ち回りをやらかしてでも、守るべきものを守るしかないのさ」

その言葉に三人はハツとする。そして同時に理解した。彼はただ言われるがままここに来たのではなく、彼なりに守りたいものがあり、それを守るためにこの世界に来たのだと。

「そうなんか……結局、また一緒に何かを守ることになったんは、二年前と同じみたいやけどな」

はやての言葉に、彼は苦笑した。

「まったくだ。だが、今回は俺だけじゃない。三人にも俺と同じくらい守る力が無いと守るものも守れないんだ……あの敵からはな」
そう言われて三人は納得する。確かにそうだ。今の自分たちの力では、守るものも守れない。その力が圧倒的に足りていないのだ。敵に致命傷を負わせることすらできなかった自分たちの無力さに、三人は思わず唇を噛んだ。だが、その暗い気持ちを、彼はすぐさまひっくり返したのである。

「だから、三人に、とびきりのプレゼントを持ってきてやった」

「……へ！？」

三人は思わず間抜けな声を出してしまう。

「とりあえず、その話は俺がここの隊員になってからにしてくれないか？」

「あ……」

その言葉で部隊長であるはやては思いだす。彼は機動六課に味方してくれてはいたが、まだここの隊員というわけではないのである。そんな人間からプレゼントを受け取るというのはどうにも組織として空気に悪い気がする。

「ほな、とりあえず隊長室に案内するわ」

はやてに言われ、四人は最上階を目指して歩き出した。

階段を上り、ガラス張りで明るい日差しが差し込む廊下を進む。しかし、彼は一つ気にかかったことがあったらしく、はやてに尋ねた。

「随分閑散としてないか？ 隊員は他にもいるんだろ？」

「ああ、おるよ。いつもならこの時間は訓練してんのやけど、今日はさっきまでの騒ぎもあったし、まだ帰ってきてへん隊員もおるんだよ」

「ああ、そういうことか」

「とは言つても、人数的にはまだまだでな、宿舎には空き部屋がまだ結構あるんや」

はやては苦笑いしながら説明した。発足して十日余りと聞いていたが、こんなものなのかと彼は思った。

「今の隊員は三十七人、一応宿舎には五十人分の部屋があるんだけど、そこまで人数が集まるかどうか、正直不安なんだ」

フェイトもまた苦笑しながら言った。今の機動六課はまだまだ成

長段階なのだなと彼は思わざるを得なかった。というよりは思いうしかなかった。先行き不安なのは誰であれ同じなのである。自分だけではなく、やはりもうすでに機動六課も戦いは始まっているのだということだ。

「ここや」

はやては最上階の一番奥にある部屋の戸を開け、彼を中に招き入れる。その部屋は広くも椅子と机しか置かれていない整ったものであった。

「さてと、ほな改めて自己紹介をさせていただきます。機動六課部長、八神はやて二佐です。貴官の救援に感謝します」

「機動六課戦闘教導官、兼、分隊長、高町なのは一尉です。危ない所に駆けつけていただき、ありがとうございました」

「機動六課執務官、兼、分隊長、フェイト・Ｔ・ハラオウンです。階級は一尉扱いです。私も危ないところを救っていただいて、感謝の言葉もありません」

「本日付で機動六課へ正式配属となった、高岡ヒロユキ一佐であります。非才の身なれど、全力で任務を全うする所存でありますので、なにとぞよろしくお願いいたします」

四人は互いに敬礼と返礼を交わす。そして、しばしの沈黙の後。

「三人とも、随分と敬礼が板に付いたもんだな」

ヒロユキは呟いた。それを聞いて三人は笑いだす。

「あはは、まあ一応軍みたいなもんやからなあ、規律は守らなあかんわ」

はやては頭をかきながら苦笑する。

「高岡君だって、まあ最初から結構サマになってたけどね」

なのはは照れながら言い返したつもりなのか、ニヤニヤしている。

「まあな。それで、さっきの話なんだが」

「あ」

三人は思いだしたようにヒロユキの方を見た。

「今回、管理局は、ガジェットと新型機動兵器の戦闘の回数の多さから、活動の中心が機動六課になると判断したんだが、それを受けて、技術部が急遽、六課に、開発中だったデバイスの強化部品を優先的に回すことにしたらしい」

「それって……」

「ああ、魔導師一人の力で対抗不可能なあの人型兵器に対抗することを可能にする装備だ。詳しくはゼロが説明してくれるから聞いてくれ。ゼロ、頼む」

「はい、マスター」

ヒロユキの指示を受けて、ゼロは壁に映像を映し出す。そこに映し出されたのは、ある部品のデータ。

『レイジングハート、およびバルディッシュの強化装備、「カートリッジ・ブースターシステム」です』

「カートリッジ？」

理解できない三人は聞き返してくる。

『はい。これは、デバイスに魔力を蓄積したカートリッジを装着し、戦闘中にそのカートリッジを使用することで、一時的にはありませんが、瞬間的に術者の魔力と魔法の威力を高めることができるシステムです』

「ふーん……具体的にはどれくらいのもんなんや？」

『カートリッジ一つの使用で、最低でもおおよそ使用前の二倍は威力を引き上げられます』

「二倍い!？」

なのはとフェイトが同時に叫んだ。それに驚くことなく、ゼロは淡々と説明を続ける。

『そうです。これにより、カートリッジを一つか二つ使用するだけで、貴女方が使用している砲撃魔法の術式に改造、鍛錬を必要とすることなく、あの機動兵器を撃破できることになります』

「ええええっ!？」

今度は三人が同時に驚いた。術式の改造も、自身の鍛錬もなしに魔法の威力を引き上げられるとは、これほどおいしい話というものはない。しかし、はやてだけは何かに気づいたらしく、途中でそれを遮って言葉を次いだ。

「それで？ そんなうまい話があるうちゅうことは、その話にはなんか裏があるんやろ？」

「え？」

なのはとフェイトがポカンとするが、ゼロは答えた。

『ご明察です、マスターはやて。カートリッジシステムは、瞬間的に魔力を引き上げられますが、あくまで外部から強引に魔力を注ぎ込むやり方であるために、術者とそのデバイスにはかえって負担を強いることになります。威力は折り紙つきですが、使えば使った分だけそれ相応の疲労が身体にはね返ってきます。いわばこれは一種のドーピングなのです』

その言葉になのはとフェイトの表情が硬くなる。リインフォースという、自身も強大な魔力に裏打ちされたデバイスを持つはやてとは異なり、自らの魔力だけで戦わなければならない二人にとって、今後今日のような戦いがあればはやて以上に苦戦することは目に見えていた。それを何とかするためには、このオプションを使わざるを得ないことは当然であった。しかし、メリットにはデメリットも付きものである。使えるだけ使っておいて何も無いわけがないのだ。

「どうする？ 使うか使わないか、判断はなのはとフェイトの二人に任せる。付けようと思えばいつでもすぐに装着はできるから急ぐ必要はない」

ヒロユキはそうは言っていたが、内心ではゼロの考えには同意だった。昔から二人は物事に打ち込むとすぐに無茶を厭わずやるのである。そんな二人が、これを渡したところでいつか無茶をするのは目に見えていたが、かといって渡さなければそれだけ自分やはやての負担を増やすことになる。自分とはかく、はやてが一人で敵に立ち向かえるかといえば、正直それも別の意味で無茶な話であった。

二人はしばらく考え込んでいたが、やがて顔を上げ、

「私は使う。無理は承知だけど、それくらいしないと守るものも守れないもの」

「私もなのはに同意。あいにくと無茶は慣れてるから、大丈夫だよ、多分」

二人とも答え方は柔らかかったが、顔は真剣だった。昔からヒロユキはこの顔をよく知っていた。一度この顔で決意表明されたら最後絶対に引かないのだ、この二人は。

「……相変わらずだな、二人とも」

ヒロユキが苦笑いしながら言うと、二人も苦笑いするしかなかった。

「では、レイジングハートとバルディッシュの準備はいいな」

『OKです、マスターヒロユキ』

『いつでも大丈夫だ』

杖の状態となって二人の手にある二本の杖は準備万端と返事をした。

『では、お二人に強化装備を施します』

ゼロがそう言うと同時に、ゼロから二機に光が浴びせられる。

すると、二つの杖は、その形を少し変える。

レイジングハートは、先端が二つに分かれて音叉状に変形し、その付け根近くに二つのバルブ式の排気孔と、柄の先にカートリッジを収めた弾倉のアタッチメント、その後ろにトリガー式のカートリッジ排出口が形成される。

バルディッシュは、同じく先端の回転部分に二つの熱排気孔、柄の先端部分には6連装リボルバー式カートリッジスロットとスライド式カートリッジ排出口が形成される。

『装着、デバイスOSとの対応プログラム、修正完了。強化作業、終了しました』

ゼロはそう言うて光を静かに消す。

「これが……私たちのデバイス……!？」

二人は生まれ変わった自らの分身を興味と驚きの混ざった目で見ている。

『はい。カートリッジシステムを組み込んだ以外は何も変わっていません。ですが、カートリッジの連続使用に耐えうるフレームにはまだなっていない。お二人ともあまりやり過ぎはしないようにしてください。それを自分で制御できないというほど、貴方達は愚かなデバイスでもありませんでしょうから』

『言われるまでもありません』

『善処しよう』

二機の新生デバイスはゼロの皮肉に斜で答えた。

『レイジングハートに組み込んだのは弾倉交換式の「エクセリオンブースターシステム」、バルディッシュに組み込んだのはリボルバー式の「アサルトブースターシステム」といいます。なのでお二人

の名前はそれぞれ「レイジングハート・エクセリオン」「バルディッシュ・アサルト」となるでしょう。技術局はその方向で登録を更新するそうです」

『いいでしょう』

『覚えておこう』

デバイスがそこまで答えたところで、ヒロユキは、すっかり蚊帳の外のはやてが、なのはとフェイトの後ろでいじけ気味になっているのに気が付いた。

「おいゼロ、少しははやてにも気を配ってやれ。あいつしよげてるじゃないか」

「……別にいじけてへんもん」

そういつつもはやては涙目であった。それで思い出したのか、ゼロはつけたすように言葉を続けた。

『ああ、そうでした。マスターはやて、貴女に関してはデバイスの強化はありませんが、管理局からリミッターレベルの一段階引き下げの許可が下りています』

「ホンマ！？」

それを聞いたはやてはパツと椅子から立ち上がる。現金なものだとヒロユキは思った。ゼロはお構いなしに答える。

『はい。今より制限量が減りますので、この先は戦闘時であればAAAランク前後の魔力を使用できますよ』

「そりやまたおおきになあ〜」

はやてはニヤニヤを抑え切れていない。だが、何故か疑問を顔に浮かべている。

「どうした、はやて」

ヒロユキはそれに疑問を感じて聞いた。はやては答える。

「うん、さっきからなんか違和感を感じるんやけどな、原因が分からへんねん」

「違和感ッて……何が？」

フェイトが聞くが、はやてはピンとこない様子であった。

「多分、高岡くんやと思うんやけど……なんなんやろ？」

「あ、確かにそれ私も感じてるんだよね。なんなんだろ？」

なのはは感覚的には分かっていたらしかったが、やはりピンとこないらしかった。

「お前ら……当人を差し置いてこそこそ話すんなよ」

ヒロユキは頭を抱えていた。しかし、その答えが思わぬところから飛び出してきたのである。

『我らのマスターはいまいち人を見る目がありませんね』

『まったく』

『私も、三人がここまでマスターヒロユキの心配りに疎いとは思いませんでした』

レイジングハート、バルディッシュ、ゼロが、唐突に三人を言葉で引っ叩いたのである。

「ちょっと！！　どういう意味やそれは！！」

「レイジングハート！？」

「バルディッシュ、ちょっとは考えて——」

三人が猛烈に言い返してきたが、三機は涼しい顔をして言うける。

『言葉通り、貴女方がその違和感の正体が分からないのをダメだと言っているだけです』

『同じく』

『私もレイジングハートと同意見です』

その言葉にはやては一瞬キレかけたが、ふと思いなおし、

「ちゅうことは三人は分かったんか、違和感の正体」

『当然です』

「何やそれ！？ 教えてえな！！」

はやてはレイジングハートに詰め寄る。他の二人も視線で教えると言っているのが見え見えだった。

『仕方ありませんね。答えは、呼び方です』

「呼び方??」

三人は意味が分からずポカンとする。レイジングハートは続けた。

『はい、呼び方です。マスターヒロユキは、ここに来てから貴女方三人を一度も高町、ハラオウン、八神などという呼び方をしていません。なのは、フェイト、はやてと、昔とは違う呼び方になっています』

「あっ……」

そこで三人はようやく気付く。昔は彼に名字で呼ばれていた三人だったが、ここで再会してから一度も名字で呼ばれていなかったのだ。それどころか逆に名前で呼ばれていたことを思いだし、三人はようやく納得する。そして、三人は視線で「どういうこと？」とでも言いたげにヒロユキの方を見た。

「ああ、それか？ クロノから、部隊になじめるよう祈ってるとか何とか言われたんでな、努力しようと思ってそうしてみたただ、悪いかな」

ヒロユキがそう答えると、三人は再び顔を見合わせ、何やらひそひそ話していたが、すぐに、

「いや、関係あらへん、むしろ歓迎や」

「うん、全然問題ないんじゃない？」

はやてとなのははすぐに同意したが、フェイトは、

「ひ、ヒロユキがそう呼びたいなら、いいよ」

フェイトが顔を真っ赤にして言ったその一言で、はやてとなのはが驚いてフェイトの方を見、すぐさま詰め寄る。

「ちよつと！？ どういうことや！？ フェイトはん！？」

「フェイトちゃん！？ 今のどういう意味！？」

なのはとはやてに詰問され、フェイトはたじろぎながらも答えた。
「だ、だって、そういう私たちだって、ヒロユキのこと、名前で呼んだことないじゃない……」

「あつ……」

そこまで言われて二人はようやく気が付いた。確かに自分たちも今まで彼を名字でしか呼んでいなかったことに。そして、先のフェイトの一言は、そこに気兼ねを感じたフェイトの気配りだったのである。

「ははは、まあ、呼び方を急に変わると言われても無理だと思うが、まあ好きに呼べばいいさ」

その一言で、三度なのはとはやての顔が猛烈な勢いでヒロユキの方を向き、しばしの沈黙の後。

「じゃ、じゃあ、名前で呼んでもいいかな……ヒロユキ……くん」

「せ、せやな、お互いさまや、ヒロユキも、私らも」

二人が顔を真っ赤にしてさういうと、四人は顔を見合わせて笑い

だす。

そして笑い声がおさまった時、誰かがグーッと腹を鳴らした音が聞こえた。

見ると、はやてが顔を赤くしている。

「あ、あはは、そういえば、もう昼やな」

時計を見ると、時刻は12時半を回ったところであつた。

「確かに俺も、腹が減ってきた」

「ほんなら食堂に案内するわ。六課の案内と、ついでにメンバーの紹介もしたいしなあ」

そうして四人は隊長室を出て、階段を下り階下の食堂へと足を運ぶことにした。

こうして、高岡ヒロユキは、正式に機動六課の新たなメンバーとなったのであつた。

Cross・05 フォワード・チーム

食堂は一小隊の隊舎の設備にしてはかなり広く、綺麗に整えられていた。しかし、昼時だというのに人っ気がほとんどなく、とてもではないがメンバーがいるとは思えにくいほどの静けさだった。

しかし、それでもやはり四人と同じことを考えている人間はゼロではなく、先客が二人いた。亜桃色の髪をポニーテールに結った寡黙な女性と、橙色の髪を三つ編みに結んだ少女の二人である。

「なんや、シグナム、ヴィータ、もうそっちは片付いたんか？」

「はい、そちらと違ってこちらは警戒線を張るだけでしたので、そちらよりはすぐ済みました」

「まあ、元から来るわけないとは思ってたんだけどな……って、誰だお前」

「見かけない顔だな」

二人は怪訝な顔でヒロユキの方を見た。警戒されるのも無理はないが、敵意を表に出し過ぎではないかとヒロユキは思った。はやてが、新人が果たしてすぐ溶け込めるかと憂慮していたことに少しだけ納得がいった。

「自己紹介がまだやったな、彼は高岡ヒロユキ、私らの昔馴染みや」
「高岡ヒロユキ、階級は一佐。今度この部隊に配属された。まあ、よろしく頼む」

「昔馴染み」と「一佐」という言葉を聞いて二人は一瞬顔をしかめたが、今ここでそれを表立って言うべきではないと判断したのか、すぐに立ち上がって敬礼した。

「これは失礼。機動六課、ライティング分隊副隊長、シグナムです。以後お見知り置きを」

「同じく、機動六課、スターズ分隊副隊長のヴィータだ。お前、はやての昔馴染みだって？」

どう見ても年下にしか見えない背丈の少女が、ここまで気を張った言葉を言ったのに、ヒロユキは内心少しだけ驚いていた。が、同時に、背の高い女性の雰囲気には、少しだけ警戒心にも似た感覚を覚えていた。その目は、自分自身に絶対の自信を持つ、そう言っているような目だったからだ。

「彼には、管理局から、スターズ分隊とライトニング分隊のまとめ役、まあ六課の副部隊長みたいな位置づけにせえ言われてんねやけど、ま、そない気にせんでもええで」

はやてはそう言って二人の警戒心を解こうとする。

「では、彼は何とお呼びすれば？」

「好きにすればいい。俺もはやてと同じ、固苦しいのは苦手だ。それにシグナムもヴィータも、俺より場数も経験値も上だろう？　むしろ俺がいろいろ教えてもらう立場だ、敬語もさん付けもいらない」

「……いいだろう、後で私もヴィータも話したいことが少しばかりある、構わんか？」

「……わかった」

シグナムは少し間をおいてそう言い、食器を片づけにかかる。その後ろでヴィータがそれに同意して頷いていた。

「まあ、三人ともそれくらいにしないと、今は腹ごしらえが先やで」
はやてはそういいながら食券をカウンターに渡す。

「はやてちゃん、ちょっとオジサン臭い……」

「腹が減つとつたら戦はでけへんで？　人間食って寝て戦うんが性分や、しっかり食える時に食うとかなあかんよ。それに……」

「それに……？」

「……何でもあらへん」

はやてはむくれたようにそれっきり黙りこむ。だが、後ろに並ん

でいたヒロユキがはやての視線の向く先に気づいて、小声ではやてに耳打ちした。

「色々と負けてるから追いつきたい、と」

「んなっ!？」

それを聞くなりはやては耳まで真っ赤になり、憤慨してヒロユキをポカポカと殴りつけるが、はやてとヒロユキの身長差はどう見ても兄妹喧嘩にしか見えない。もっとも、そのせいではやては怒っているのだが。

「ヒロユキは、もうちょいデリカシーちゅうんを考えるべきやと思うんよ」

はやては涙目で反論するが、ヒロユキはおかしくなり笑いだしてしまった。

「はやて、どうかしたのかな？」

「どうしちゃったんだろうね？」

なのはとフェイトはそんなことを知る由も無く、ただ首をかしげていた。

食券を買った時、ヒロユキは不思議に思った。この世界では国という概念は殆どない。ゆえにこの食堂にはどんなメニューが用意されていても不思議ではない。

だがどういうわけか、メニューには定食を始め、味噌汁だのカレールイスだの親子丼だのスパゲティだのラーメンだのと、一体この食文化かと思えるようなものばかりであった。西洋料理、イタリアン、和食などと幅こそ広いが、イタリアでカレーライスがあったとしてもラーメンはまず殆ど見ないに決まっている。これくらい多彩な食文化が混在するのは日本くらいのものだ。

「随分とまた隊長好みのメニューばかりだな」

受け取ったとんかつ定食を口に運びながらヒロユキは横目ではやてに言った。

「どや？ この世界に来て、味には不自由せんやろ？」

はやては生姜焼き定食を前に、先ほどの意趣返しのもりなのか、してやったりという顔で自慢げに胸を張って言った。おそらく、この食堂には、隅から隅まで日本生まれのはやての手が回されているということが容易に想像できた。

「まあ、せやけど、私だけやないで？ 見てみ」

はやてはカウンターの窓口の上に書かれたメニューの一覧を指差す。

「アレがどうかしたのか？」

「あのメニュー表の白飯から左側のメニューは全部なのはちゃんのリクエストなんよ」

「むぐ!？」

はやてが言うと、向かいの席に居たなのはが定食の唐揚げを喉に詰まらせかけていた。隣に居たフェイトが慌てて背中を叩く。

「まったく、なのはちゃんはどうしても白飯が無いと生きていけないとか言うし、フェイトちゃんはフェイトちゃんて洋食をちよつとでいいからメニューに加えてくれ言うし……」

「おいおい……」

要するに、二人もこのメニュー構成には一枚噛んでいるというわけだ。二人を見ると、苦笑いを浮かべている。フェイトが洋食好きなのはまだイメージ的に分からないでもないが、なのはが白い米ななくして生きていけないというのには正直ヒロユキは驚かされていた。「まったく……自分で料理作るでもないのにメニューを自分好みに改悪するんじゃないよ」

そう言いながら味噌汁を啜るヒロユキに対し、三人は妙なことを言った。

「そんなこと言うたかて、私レパートリー少ないし……」

「私も……」

「なかなかチャンスっていうチャンスも、ね……あはは」

両手の指を突き合わせながら小さくなって言ってくる三人に対し

て、ヒロユキはそこで察しがついてしまった。

「要するに、味見してくれる人間がいなかったわけか」

その言葉に三人が小さく飛び上がる。どう見ても凶星であった。

「ったくよ、自分からそういうところアピールしないからいつまでたつても言い寄ってくる男がいなかったの」

すると今度は、三人が一瞬何かハツとした後、また小さくなる。

「その……言い寄られても、おかしくないってこと？」

なのはが顔を真っ赤にしながら恐る恐る聞いてくる。ヒロユキは答えた。

「ああ、問題はないだろ。むしろ局内でファンクラブとかあってもおかしくないと思うんだが？」

「そ、そうなんだ……」

フェイトが照れながら俯いた。

「ま、そうなりたければせいぜい努力することだな。人生長いんだ、チャンスはいくらでもあるが、それを活かせなかったらどうにもならんからな」

「そんなこと言うたかて、そもそもチャンスすら来てへんもん……」
「自己鍛錬と向上心が足りねえんだろ。三人とも戦いのイメージばかりだからそれで引かれるってことも無いでは無いと思うんだが」
「うぐ……」

この中で一番戦いで活躍しているであろうなのはが一番ダメージを受けていたようであった。

「ま、イメージを変えるってのもそう簡単にできるわけでもないかな。せいぜい周囲にアピールすりゃそのうち変わるんじゃないかな？」

「簡単に言うてくれるなあ……」

「簡単なんだよ。男ってのは女のビジュアルとスキルと性格で大概イエスカノーか決まるって知ってるか？ このメンツで言うならビジュアルはなのは、性格はフェイト、スキルならはやてが一番だと

俺は予想するが、どれか一つでもクリティカルがあれば、言いよってくるやつはいるもんだぜ？」

「……………」

三人はそれを聞いて考え込む。確かにヒロユキの言うことにも一理あった。というよりは結構当たっていたからだ。

なのは教導官としては厳しいとよく噂されるが、それでもなのは見たさに訓練を見に來たりする人間はいないわけではなかった。

フェイトは新人の教育に関して、なのはから甘いとか過保護だとかよく言われるが、それは性格面では男から見ればむしろプラスと言える。

はやては独り暮らしであつたがゆえに料理や家事のスキルは一通り身につけていた。最近はそう言うスキルを発揮する機会は殆ど無くなったものの、家事ができる女性は確かに魅力的であり、性格やビジュアル面でのデイスアドバンテージを補って余りあるということも考えられないではない。

「……………どうした？ 分かりづらい話だったか？」

ヒロユキのその声で三人は我に歸る。

「分かんない……………けど、分かる気がする」

なのはとフェイトは納得したように頷く。

「せやけど、やっぱりチャンスが來てへんのは事実やしなあ」

はやてがそう言つと、二人もまた考え込んでしまふ、が。

「あ、せやせやー!!」

はやてが何かひらめいたようにガッツポーズをする。

「何かいい案でも思いついたの？」

なのはとフェイトの期待の視線に対し、はやてはためらいもなく言つてのける。

「せやつたら、チャンスを自分でつくればええんやー!!」

「え？」

ポカンとする二人に、はやては笑顔で言つ。

「せやから、私らがいろいろと自分で相手に言いよればええんや」
「でも、そんな相手なんて……」

「おるやんか、ここに」

そういつてはやては、ヒロユキの肩にポンと手を置く。

「おいおい、まさか……」

「つつわけで、ターゲットはヒロユキに決定や」

「はあ？」

「えええっ!？」

ヒロユキは怪訝な顔をし、なのはとフェイトは驚く。

「だって一番近くに居る男言ったらヒロユキしかおらへんやんけ」
しれっと言うはやてだったが、思いだしたように付け足す。

「なんやったらこのまま嫁さんにもらってくれても構わへんで？」

「え……ええええええええええ!？」

はやてのダイナマイト発言に、二人の目が信じられないと言った表情に変わる。

「ちょ、ちよつとはやてちゃん!？ 何を言ってるの!？」

「なんや、なのは嬢は嫌なんか？」

「そういう問題じゃなくて!! こういうのはもうちよつと良く考えてから……!!」

「そう言うつといてチャンス来えへんかったら人生時間だけが過ぎてくんや。それやったら今のうちに決めてしまった方がええやんか」
「そ、そうかもしれないけど、はやては後悔しないの!？」

「別にせんでもいいやんか、ヒロユキなら昔からよく知つとるし、問題は無いで？」

「う……………」

そこまで断言されて、二人はそれきりぐうの音も出なくなってしまう。

「な、ヒロユキ、ええやろ？」

「別にいいけど」

「そうか、ええんか……って」

はやてが一瞬硬直し、続いて、

「ええええええええええええつ!!?」

三人の渾身の叫び声。

しかし、叫び声は三人だけではなく、何故か食堂の入口からも聞こえてきた。見ると、制服を着た隊員と思しき若手の四人が、折り重なって倒れ込むように食堂になだれ込んできた。

「八神隊長！！今の本当の話ですか！？」

「プロポーズするなんて、大胆ですね!!」

「成功したみたいで、何よりです！」

「そ、その、おめでとぅございます！」

四人に加えなのはとフェイトにも口ぐちに詰め寄られ、はやては焦る。

「い、いや、そのお…… あ、あれは冗談や、冗談！！ 私やてそんな軽く物事決める女やないんやて！！」

「だろうつと思っただぜ」

「あつ……」

はやての顔が真っ赤になる。自分で掘った落とし穴に見事に落ちたサルだった。まさかここまで冗談が大ごとになるとは到底予想し

ていなかったに違いない。

「け、けど、いつから分かったん、冗談やって？」

「お前が『ええやろ？』って聞いてきたところだ。お前は詰めが甘い、あそこで口元がにやけなければまだ俺に勘違いさせられていたかもしれないんだがな」

「あちゃあ……まだまだやな……ははは」

はやては自嘲気味に笑った。そう、本当に本気でプロポーズするなら、口元がにやけているわけではないのである。もしにやけているとしたら、それは冗談か、もしくは裏で腹黒いことを考えているかのどちらかなのだ。はやてはそれをつい顔に出してしまったのである。

「ま、俺を騙そうとするなら、もうちょつと演技力を磨いてからにするんだな。もっとも、今のやつでも、部隊の年末パーティーのネタとかにするんなら十分通用すると思うぜ」

「あうう……」

はやては頭から湯気を立ててしよげる。自分の冗談を見破られた上に、それを冗談で返され、さらに純粋な若手をおおいに勘違いさせてしまったことで、心理的ダメージはかなり大きかった。

「ま、それはまた後で話のネタにするとして、彼女たちは隊員か？」

「あ、せや、自己紹介がまだやったな、なのはちゃんとフェイトちゃんか面倒見てる、将来の若手ホープや。皆、こっちは私らの昔からの知り合いや」

「申し遅れました、機動六課スターズ分隊、ティアナ・ランスター二等陸士です」

「同じく、スターズ分隊、スバル・ナカジマ二等陸士です!!」

「機動六課ライトニング分隊、エリオ・モンディアル三等陸士です」

！」

「同じく、ライトニング分隊、キャロ・ル・ルシエ三等陸士です。こっちは使役竜のフリードリヒ」

キャロと名乗った少女の横に浮いている生物は、良く見ると羽が生えている。一見すると分からないが、良く見ると確かに竜だった。

「そうか。俺は高岡ヒロユキ。今度管理局のお偉いさんから直々に言われてここに来た。階級は三佐だ。まあ、よろしく頼む」

「はい、よろしく願います！」

四人はそろって頭を下げる。

「あれ、ヒロユキ、今三佐って言ったよね？」

「ああ、言ったがどうかしたか？」

「確か、ここに来てシグナム達に自己紹介した時とか、一佐や言うてへんかったか？」

「ああ、それか。実は管理局本部から直接こっちに派遣された人間は、部隊内で階級を二階級上として扱うという特例があるんだよ。俺も最近知ったことだな」

「じゃあ、表向きだけってこと？」

「ご明答だ、なのは。あくまで扱いだけではあるんだが、一応形式的な場で名乗る時は高い方の階級を名乗れっていうことらしいんだ。あのときはああさせてもらったただけだ。今はそういう場でもないから本来の階級を言ったんだよ」

「なんや、そうやったんか」

はやてが何やら胸をなでおろしていたが、ヒロユキはそこに一言だけ付け加えておく。

「一応言っておくが、部隊内での階級は上だから、いざって時ははやての権限を超えて命令を出せる。まあそんなことは無いだろうが、もしものときはそれ使って隊長さん方の無茶を止めなけりゃならん

「からな」

「あ、あはは、ほどほどにしてえな？」

「まったくだ。それじゃ俺は副隊長さん方の呼び出しに応じてくる」
そう言ってヒロユキは食器を元の場所に戻すと、食堂を後にした。

一方、ヒロユキが行った後の食堂では。

「はあ、焦ったわ……！！」

はやてが大きなため息をつきながら茶を啜っていた。

「見事に冗談を冗談で返されたね」

フェイトは苦笑しながら言った。

「まったく、何で私たちまであんなに焦らないといけないの？」

なのはは言われのない焦りに少しだけイラッとしていた。そこにはやては懲りずに追撃をかける。

「焦ったいうことは、それは恋やな」

「ぶっ！？」

なのはとフェイトは同時に茶を思い切り吹き出して咽せ込む。

「だ、大丈夫ですか？」

スバルとティアナが慌てて二人の背中をさする。

「だ、大丈夫……ちよつとはやてちゃん、いい加減にしてよ！！」

「なんや、違うんか？」

「ち、違うに決まってるでしょ！？ でなきや、誰が焦ったりなんか……」

「あはは、まあヒロユキはヒロユキで需要ありそうやし、一応印だけ付けといた方がええかもしれんで？」

「……確かに、ヒロユキって性格はアレだけど、アレで結構優しいところあるからね……」

「お？ フェイトちゃんはアプローチかける気か？」

「ふえ！？ な、なんでそうなるの！？」

フェイトが呟いたのを、はやては聞き逃さなかった。

「今、優しいて聞こえたで？ フェイトは優しい男が好きちゃうんか？」

「そ、そんなわけ……」

「もう、フェイトちゃん困ってるじゃない」

フェイトがオーバーヒートしかけている。見かねたなのはそれをフォローしにかかる。

そんなやり取りを横目で見ながら、若手の四人は昼食にようやくありついたところだった。

「いやあ、仕事の後に食べる料理は、やっぱり格別だねえ」

スバルはそういいながら大盛りの親子丼とサラダをガツガツ平らげていく。

「そんなに急いで食べたら、喉詰まるわよ」

ティアナは呆れた顔でスバルに忠告するが、

「んぐ！？ んんんっ！！」

言うなりスバルがジタバタもがきはじめる。

「ああ、もう、言わないことじゃないんだから！！」

ティアナは顔をしかめながらもスバルの背中を叩く。

「ヒロユキさんでしたっけ？ 珍しいですね、本部から直接派遣されてくるなんて、しかも男の人ですし」

エリオは感慨深げに言う。

「あゝ、エリオは助かるよね、六課には男が全然いないから」

スバルがエリオを茶化すように笑って言った。

「フリードにあんまり驚きませんでしたね……ミッドチルダ生まれの人なのでしょうか？」

キヤロは自分の竜に驚かなかったことに少し疑問を持ったが、
「さあねえ……名前しか聞いてないし」

ティアナはそれに答え、同時にため息をつく。

「ティア、何か不満でもあるの？」

スバルが質問してくるが、ティアナは否定する。

「別に。ただ、あの人、なんか雰囲気がちよつとね……」

あの時感じた普通とは違う雰囲気。まるで、この世のすべての悲しみを知っているかのような目。ティアナはそれが少しだけ気になっ
っていたのだった。

「なら、隊長たちに聞いてみれば？ 昔馴染みだつて言つてたし」

「何言つてんのよバカスバル、そうホイホイ人の生い立ちとかを掘り返すもんじゃないの！！」

ティアナはそう言つてスバルの後頭部にチョップをぶつける。

「痛あゝ、殴ることないじゃんかあ」

「配慮に欠けてるから叩いただけよ」

こうして、この日の食堂の長い昼は過ぎて行つた。

そのころ、機動六課の傍にある海に面した訓練場では、副隊長二人とヒロユキが顔を合わせていた。

「呼びだしたつてことは、何か聞きたいことがあるんだろ、シグナム」

「察しがいいな。では単刀直入に聞こう、お前はなぜあんな嘘をついた？」

「嘘だと？」

「とぼけても無駄だ。お前があたしらより場数も経験値も少ないなんて嘘、よく付けたもんだなつて言つてんだよ」

シグナムに続いてヴィータも警戒心をあらわにする。

「……何を根拠に？」

「お前の目だ」

「……………なに？」

「お前がどういう意図でああ言ったのかは知らんが、お前の目は戦いと、戦いからくる悲しみを知っている人間がする目だ。普通の人間は誤魔化せても、我々には分かる」

「……………」

「それとも一つ。お前の胸にあるそれは、ただのバッジではないだろう？」

『……………バレていましたか、インテリジェントデバイスのゼロです。正体を隠しだてするつもりは無かったのですが』

ゼロが観念したように口を開く。

「……………わかってんなら仕方ねえな。じゃあこっちも聞け？ お前は今、我々には分かると言ったが、つまりお前らは戦士ということ間違いはないか？」

「差し支えは無いが、何故聞く」

「理由の一つは今言った通りだ。もう一つは、お前らが俺が戦士だと知って、何か得することか損することがあるか、それとも知ったならどうするのかということだ」

「どういう意味だよ？」

怪訝な顔をするヴィータに、ヒロユキは答える。

「簡単なことだ。戦士が戦士に戦士であるかを聞くということは、戦士として興味が湧いたということだ。そして、戦士が戦士を戦場の傍に呼びだすということは、つまり、俺の力量を見なくなった、もしくは俺と俺のデバイスの戦いを知りなくなった、そういうことだろう？」

シグナムは黙っていたが

「……………見透かされていたか」

観念したというような顔で小さく笑った。

「ちえ、上手く誤魔化せたと思ってたのに」
ヴィータは面白くないという顔をした。

「それで？ どうしたい？」

「一对一の真剣勝負を申し入れる」

「シグナムの後はあたしがやる」

つまりは二連戦。これはいわば一つの試験とも言つべきか。戦う場所に出向く以上、その覚悟があるか、今ここで問われるということだ。

だが、ヒロユキには覚悟など初めからあつた。それもここに来てからの初めではない。自分がものを理解したその時からであり、守るものができた時からである。

「分かった、模擬戦は受ける。ただし二連戦じゃない、一回きりだ。二人まとめてかかってこい」

ヒロユキは凜とした声で静かにその言葉を突き付けた。

Cross・06 試練という名の

「シャーリー、準備を始めてくれ」

シグナムは念話で指示を送る。

『ええっ！？ 新人さん相手にもう模擬戦をなさるんですか？』

ひっくり返ったような驚きの声で、若い女性が答えた。

「問題は無い。管理局から直接、それも提督のハラウンが直々に指名した人間だと聞いた。実力など今更考えずともどれほどのものは察しがつく」

『で、ですけど……』

「いいから、とっとと訓練システムを起動させろってんだ！ アタシもシグナムも、このままバカにされて黙ってられるかよ！！」

「わ、分かりました……！！」

ヴィータがイライラしながら怒鳴ると、向こうは気圧されたのか、慌てて準備に取りかかる。

「二連戦じゃない、一回きりでいい。二人まとめて相手する」

その言葉を聞いて、シグナムは眉をわずかにひそめ、ヴィータは半ば逆上した。

「はあ！？ てめえ何をナメた口きいてやがる！？ 自分の実力つてのを——」

「実力は分かってるさ、分かってるから言ってるんだ」

「んだと！？」

「ならもつと分かりやすく言うぜ？ 最初から本気でかかってこい、でなければ返り討ちだ」

「なっ……！！？」

ヴィータは愕然とした。自分がその実力を認められて副隊長になつてから、態度が悪い新人はいるには居たのだが、ここまで睨みを利かせてくる新人は初めてだった。しかし、彼の目はバカにしているというわけではない。自らが何人もの戦士を見てきていれば、当然目で覚悟のほどは分かるつもりだった。そして、彼の目は覚悟を超えた何かを宿した目であつたのだ。しかし、憤慨していたヴィータにはそれが見えていなかった。なおも食つてかかるうとするヴィータを、シグナムが横から制す。

「てつめ——」

「よしておけ、ヴィータ」

「シグナム!？」

「落ち着け。そして奴の目をよく見る。奴の言っていることはブラフでもハツタリでもない」

「シグナム、あいつの言うこと本気だとしても言うつもりかよ!？」

「奴の目をよく見ると言っている。そしてお前はもう少し冷静になれ。決め付けと過信と侮りは、戦場では敗北にしか繋がらん」

そこまで言われ、ようやくヴィータは冷静になる。落ち着いて考えれば分かることだったのだ。管理局からの直接派遣。専用インテリジェントデバイスの所持。一佐という階級。そして戦う者の目。それは、今まで見てきた優れた戦士が持つ要素のすべてだった。

「……手加減はしねえからな」

「してくれなくて構わない。手を抜いたとしても後で惨めになるだけだ」

「良かるう。ならば全力で行かせてもらう……レヴァンティン!!」

「グラーフアイゼン!!」

二人が叫ぶと同時に、制服がたちまち戦闘用バリアジャケットへと変化し、シグナムの手には剣型の、ヴィータの手にはハンマー形のデバイスがそれぞれ握られていた。

『準備、出来ました』

三人の頭上にホログラムが映し出され、眼鏡をかけた長髪の女性の姿が目に入る。

「お前は？」

『あ、申し遅れました。機動六課通信使兼メカニックデザイナーのシャリオ・フィニーノです。シャーリーと呼んでください』

「わかった」

「いい加減メカニックデザイナーを自称すんのやめろよ、シャーリー」

『ええ、いいじゃないですか、別に悪いことは無いですし』

「冗談はいい。ステージを出してくれ」

『はあ、いい』

シグナムの冷静な対応にシャーリーはむくれながらも従う。どうやらメカニックデザイナーというのは自分で付け加えた自己アピールだったらしい。

そして、海上の方を見ると、何もなかった海の上に、見事なまでにリアルな廃墟が映し出される。どこかに戦車や兵士が隠れていても可笑しくないほどに。

「なるほど、海に近いこの部隊だからこそできる訓練というわけか」
ヒロユキは納得してほくそ笑む。

『今回は私をお使いになりますか？ マスターヒロユキ』
ゼロが戦いに際して自分を動かしてくれるのかと聞いてくる。

「……そうだな、危なくなれば、ということにしておく。お前もまだ未知の部分が多いからな、使い方に迷って足元さらわれたら話にならん」

『分かりました。こちらもなるだけ分かりやすい形で対処します』
「頼んだ」

『ええ！？ デバイスなしで模擬戦なさるんですか！？』
シャリオの素っ頓狂な声が響く。それにシグナムとヴィータも反応する。さすがのシグナムもこれは予想していなかったらしく、怪

訝な顔で聞いてくる。

「まさか、素手で我々と一戦交えなくても言う気か？」

「そのつもりだが、どうかしたか」

「てめえ、からかうのもたいがいにしろって——」

「からかってなどいない」

ヒロユキはヴィータの当然の文句を遮る。

「お前は自分の力を過信しすぎているのではないのか、高岡」

シグナムも、冷静を装って反論する。

「いくらお前といえど、デバイスもなしに我々に挑むなどと、随分となめられたものだ」

「なめてなどいない。だが……」

ヒロユキは一度間を置き、そこで言い方を変えて少しばかり言い聞かせるように言う。

「自分の力は自分が一番よく分かってるつもりだ。だから言うておく。俺に本気を出させないでくれ。デバイスなど使ったら手加減できる自信も、事故を起こさない自信もない……俺はそういうバカみたいな力でできた人間だからな」

「……………！！」

シグナムとヴィータは、その悲しくも威圧するような眼を見て言い知れぬ恐怖感を覚えた。が、それと同時に、わずかながら期待のようなものを抱いてもいた。戦士という血がそうさせるのかは分かっていなかったが、湧き出る高揚感がかすかにあった。

「承知した。だが、我らとて戦士だ、得体のしれない相手と手加減して戦って負けましたでは話にならんからな、手は抜かんぞ」

「了解だ。くれぐれも命だけは手放さないようにしっかりと抱えておけよ」

ヒロユキはやはりそうなるのかと思いながらも、それを認めるしかなかったのであった。

崩れかけたビルの上にヒロユキは立った。その向かい側のビルの屋上に、シグナムとヴィータがこちらを見下ろす形で立つ。

「準備はいいか？」

「いつでもいいぜ」

「手加減はしねえからな」

「元よりされるつもりもない」

ヒロユキは落ち着いて一つ一つの答えを返す。ここで気持ちが高ぶれば、どうなるか分かったものではないからだ。

『それではこれより、高岡ヒロユキ六課副隊長、対シグナム・ヴィータ両分隊副隊長による模擬戦を開始します！！ 始めてください！！』

「はあっ！！」

「シャリオが言い終わるか終わらないかのうちにシグナムが動いた。
疾^{はし}れ陣風、シュトゥルムヴィンデー！」

シグナムの右手に掲げられた剣型デバイス『レヴァンティン』の刀身が一瞬光を放ち、シグナムがそれを振りおろすと同時に三日月形の衝撃波が放たれた。しかし、単純な動きであったため、ヒロユキはそれを横にステップしてかわす。

「おらあ！！」

すると、かわしたところにヴィータが槌型デバイス『グラーフアイゼン』を構え、叩きつけるような一撃を押し込む。

「ちいっ!!」

ヒロユキはそれをすれすれで避ける。槌身こそ大きいものとはいえなかったが、仮にもデバイスである、ぶつかればタダでは済まない。コンクリートに穿たれたヒビと凹みでそれが良く分かった。

だが、無理な体勢で避けたためか、反動でヒロユキはバランスを崩した。

「そこだ、飛竜一閃!!」

再びレヴァンティンの刀身が振り下ろされ、今度は直線状に炎のような衝撃波が向かってくる。

「くっ!!」

ヒロユキは転がってそれをかわしたが、その衝撃波はそのままヒロユキの立つビルの後ろにあったもう一つのビルの壁に大穴をあける。

「やるな!!」

シグナムはかつてない未知の相手に戦う愉しみさえ感じていた。精神を削り合い、お互いの身と骨を粉にして戦う相手。それを今まで生きてきて何人見てきただろうか。数えるほどしかない。

「ちよろちよると!! シュワルベフリーゲン!!」

ヴィータはどこからともなく銀色に鈍く光る鉄球を4個取り出し、そこに魔力を注ぎ眼前に4つの魔力球を形成したかと思うと、それをグラーファイゼンで思い切りヒロユキに向かいスイングした。光を纏い、真っ直ぐな光条を残してまっしぐらにヒロユキへ向かう魔力球。

「避けられるもんなら避けてみな!!」

「そんな必要はない!!」

ヒロユキは右手を魔力球の飛んでくる方向に向かって突き出す。右手の指をすべて魔力球に狙いを定める。

そして、5本の指の先に光が収束したかと思うと、次の瞬間、5本の指それぞれから真っ直ぐに白い光が走り、4本が、飛んできた4つの魔力球に命中し、ともに弾け飛んだ。

「なにい!？」

一瞬にして自分の放った攻撃がすべて撃ち落とされてしまったことに驚くことしかできないヴィータだったが、そう思う間もなく、ぶつからずに残ったもう一つの光が爆煙の仲から真っ直ぐヴィータに向かってきて、そのままヴィータの脇腹にクリティカルヒットする。

「ぐああっ!！」

完全に不覚を取られ、ヴィータは数メートル後ろに吹き飛ばされた。

「ヴィータ!！ くそっ!！」

シグナムは齒ぎしりしたが、一瞬ヴィータに気を取られていた間に、ヒロユキの姿はそこから消えてしまっていた。

「さてと……回避は問題なし……課題はこちらから反撃するタイミングだな」

少し離れた別の廃ビルのあるフロアに隠れながら、ヒロユキは作戦を練ることにした。

『あちらのチームワークも思ったよりありますね』

「ああ、それよりも問題なのは、奴らのデバイスだ」

『カートリッジシステム……ですね』

ゼロが静かに呟いた。

先ほど、シグナムが衝撃波を放つ瞬間に見えたのだ。

刀身の根元にある部分がスライドし、そこから薬莢のようなものが落ちたのを。

「ああ……お前がなのはとフェイトにやったものより構造は単純だが、腐ってもカートリッジシステムであることには変わりが無いからな、ポテンシャルは見た目以上に高いと考えるべきだろう」

『私を使ってください』

ゼロは突如として進言した。

「なぜだ？」

ヒロユキは聞き返す。

『あちらのチームワークは綿密です。避けるだけなら問題は無い、しかし、それでは勝負が付きません。かといってあのチームワークの下では、いくらマスターであつてもせいぜい先ほどの攻撃が精一杯でしょう。であれば、根本的なところを底上げして対処するしか方法はありません』

「随分と言ってくれるな」

根本的なというのは恐らくゼロの補助で一時的に魔力の流れをコントロールし、身体能力を引き上げるという意味であろう。

『それでも心配しているのですから』

「そうか……だが心配はいらない。俺はまだ本気を出しちゃいないさ。さっきのはあくまで、あれで撃ち落とせるか試してみたただけだ」

『ですが……』

なおも食い下がるゼロに、ヒロユキは静かに言った。

「分かつてる。お前もデバイスとしての意地があるんだろ？ 戦いに連れて行かれただけで活躍もしないんじゃないや、デバイスの名前負けだからな。活躍の場はちゃんと用意してやるから、安心しろ」

『それで充分です。気苦労おかけして申し訳ありません』

申し訳なさそうに頭を下げるゼロを見て、ヒロユキは小さく笑った。

「お前を託された、俺の責任だからな」

「ちつくしょう、あの野郎、どこに隠れやがった!？」

ヴィータは先ほどの一撃を当て逃げされたことに対して頭に血が上っていた。シグナムはそれを咎める。

「少しは頭を冷やせヴィータ。怒りは視界を狭める」

「けどよ……!」

「落ち着けと言っている。それでは奴の思いつぽだ」

その一言でヴィータはようやく冷静に戻る。しかし、内心では自分の得意技をすべて撃ち落とした上に一撃をくらわせて逃げた相手に怒りは収まるはずもなかった。

「あいつ、絶対ぶっ潰す」

ヴィータはシグナムに聞こえないように小さく舌打ちした。

「ゼロ、今のお前はどこまで対応ができる」

『自分はゼロから作られたデバイスです。ゆえに貴方と同じ新人……ですが、私の製作者はとっておきのカードを私の中にしまいこんでおいってくださいました』

「切り札ということか？」

『はい。名を”システム・イヴォルヴ”と言います』

「なんだそりゃ？」

『簡単に言うなら、読んで字のごとくです。進化・進歩するデバイスのOS、とでも言うべきものでしょうか』

「進化か……ではお前はそれがどこまで可能になったんだ？」

ヒロユキは半分の興味も手伝ってかそれを聞く。そしてゼロは、小さな声でその内容を語った。

「……なるほど、なら、今回はそれを少しだけ使わせてもらおうか」
『いいのですか？　そこまで賭けに出ずとも、マスターの実力ならば押し切れる可能性はありますが』

「言つたろ、活躍の場は用意してやるつて。それともお前はこのままこの模擬戦を傍観するだけの方がいいのか？」

『……なるほど。私もバカなものですね』

苦笑しながら項垂れているゼロを見て、ヒロユキは笑いながら言つた。

「お互いにな。新人だし仕方が無いさ。なら、行くとしますか」

水色の光が走り、シグナムとヴィータのいるビルを貫いたのはその直後だった。

「なに！？」

「飛ぶぞ、ヴィータ！！」

衝撃でビルが揺れ、二人は慌てて空中に飛び上がる。その直後、ビルは音を立てて崩れ落ちた。

「奴め、あれほどの威力とはな」

「シグナム、あそこだ！！」

ヴィータが指差した先には、崩れ落ちた隣のビルの屋上にいつの間にか立っていたヒロユキの姿があった。

「あいつ……！！」

「待てヴィータ、来るぞ！！」

シグナムの叫び声と同時に、二人の方向めがけて向こうから水色の大きな砲撃が飛んでくる。

「なに！？　今のは……」

その砲撃に二人はかすかに見覚えがあった。しかし、今はそんなことを気にしている場合ではない。

「行くぞ！！」

「おう!!」

二人は先ほど打ち合わせた作戦に打って出る。

「はああっ!!」

「おりゃあ!!」

先ほどと同じく、衝撃波とオレンジ色の光条がヒロユキめがけて打ちだされる。ヒロユキはそれをバツクにかわして避けたが、避けたそばから次の攻撃が追い打ちをかけ、反撃をさせない。

それが二人の作戦だった。魔力消費を承知で連続で遠距離攻撃を繰り返しつつ徐々に距離を詰めていき、隙について近距離の必殺技で決めるというものだ。

そして、それは二人の思い描いたとおりになっていく。ヒロユキはビルや道路を駆け回って攻撃をかわすのに必死で反撃のチャンスは作れていなかった。そして、その実、確実に二人との感覚は詰まっていく。そして。

「食らえ!!」

「うおお!!」

渾身の一撃が二人から放たれる。それはヒロユキの眼前にヒットし、道路をえぐって砂埃が舞い上がる。視界が遮られるが、それが二人の狙いだった。

「今だ!!」

「終わりだあ!!」

二人はそれぞれ自らのデバイスからカートリッジを二つ弾きだし、各々の大技で決着をつけにかかる。

「シュランゲバイセンツ!!」

「ラケーテン・ハンマアアツ!!」

刀身に炎を纏ったレヴァンティンとシグナム、槌の片面から炎を吹き出して猛烈な回転で攻撃をかけるグラーフアイゼンとヴィータ。鬼気迫る二つの衝撃が、砂埃を突き抜け、そこにいたヒロユキに

振り下ろされた。

「なんやて！？ シグナムとヴィータが！？」

はやてはシャリオからの通信でそのことを知り、なのはとフェイトともども、慌てて昼食を平らげて訓練場へ向かっていた。戦いのあまりの激しさにビビったシャリオが、はやてに連絡したのである。「ああもう、何でもつと早く気いつかへんかったんや！！」

苛ついた声ではやては自分に怒鳴った。訓練場の使用には部隊長である自分か、戦闘部隊の隊長であるのはかフェイトの許可が必要なのである。それを誰にも言わずにシャリオまで巻き込んで勝手にドンパチやらかすなど、はたから見れば規則違反も甚だしい。

「は、早く止めない！」

フェイトも同意見だったが、なのはだけはそれに異議を唱えた。

「違う……二人とも、何か考えがあるんだよ……」

「考えて……どんな考えがあるっていうんや！？」

「分からない……でも、そうでなかったらこんなこと、二人がやるはずないよ」

それはある意味事実でもあった。六課に来てからというものの、今までの生業から来るものなのか、忠実すぎるというほどまでに任務と訓練をこなしてきた二人であったのだが、当然のことながら無断で何かをするような人間でないことは最初から三人とも分かっていたつもりだった。しかし、今そうでないことが起きている。それはにわかに信じ難かったが、なのはだけはまだ二人を信頼していたのだ。

「とにかく、聞くんは向こうについてからや！！」

何か大ことになる前に間に合ってくれ。三人はそう思うしかなかった。

「それ、私たちも見ていいですか!？」

「えっ!？」

フェイトとなのははその声に振りかえる。見ると、スバル、ティアナ、エリオ、キャラの四人が三人の後ろを追ってついて走っていた。

「ちょ、四人とも何で来とんのや!？」

「いいじゃないですか!! 隊長クラスの模擬戦なら、おいに実戦の参考になります!!」

スバルは見る気満々の顔でそう言つてのける。それに他の三人も頷いて同意した。

「はやて、どうする?」

フェイトははやてに聞き、それを受けてはやては一瞬考え込む。

ヒロユキの本当の実力、そしてその非常識さを考えると、いきなり本気のヒロユキを新人たちに見せるのはためらわれた。しかし、はやては決断する。

「わかった、来てもええけど、その代わり何を見ても驚くんやないで!？」

「はい!!」

四人は同時に勢い良く返事をしながら、三人の後について走り続ける。

「頼むで、ヒロユキ……」

はやては祈る気持ちで呟いた。シグナムとヴィータにはバカにするように申し訳ないと思いつつ、二人を相手にしてさえ、ヒロユキが本気を出さずとも勝てることを願った。

そして、一行はその戦いの舞台にたどり着いた。そして着いた瞬間、一行の目に映ったのは、まさにシグナムとヴィータがヒロユキに向かって気迫の一撃を振り下ろそうとしているところであった。

誰もが声を上げる間もなく、二つの攻撃は狙い変わらずヒロユキに命中した。さすがのヒロユキですら耐えられなかったのか、ヒロユキはそのまま後ろに猛烈な勢いで弾き飛ばされ、突き当りにあったビルに激突、壁を突き破り姿が見えなくなった。

「ああっ!？」

誰かが裏返った声で叫ぶ。恐らくはそのあまりの苛烈さに目を覆いたくなっただけに違いない。だが、そこで終わらせるシグナムとヴィータではない。すかさず開いた穴に突入し、惜しむらくはその首に刃を突き付けて勝利宣言とすべく、行動を起こしていた。

「い、今、高岡副部隊長、思い切り壁にたたきつけられましたよね!？」

「う、うん、そう見えたな」

「そう見えた……って、心配しなくていいんですか!？」

スバルとティアナからの猛抗議に、しかしはやては涼しい顔で答える。

「大丈夫や。ヒロユキも、伊達に副隊長務めてへんからな」

「え……!？」

その言葉の意味を四人が理解する前に、三人がいる廃ビルからシグナムとヴィータが慌てた様子で飛び出してくる。続いてそこから水色の砲撃が壁を突き破って放たれ、その光はゆっくりと、まるで二人の動きが見えているかのように上昇する二人を追いつけて角度を変えていく。たちまちのうちにビルは真つ二つに縦割りになり、音を立てて崩れ落ちる。

そして、崩れ落ちたがれきの中からゆっくりと、しかし何事もなかった様子で、高岡ヒロユキが立ち上がった。

「ええ!？　嘘、シグナム副隊長のシランゲバイセンとヴィータ副隊長のラケーテンハンマーを食らって平気だなんて!？」

スバルが素っ頓狂な声を上げる。

「しかもバリアジャケットなしであれに耐えたっていうの!？」

ティアナも驚きを隠せない。それはそうだ。見た目はあの時食堂で見たその人と何ら変わりが無い。バリアジャケットがあるかは知らないが。あつたとしても制服と同じ見た目ということは無いであろうし、バリアジャケットが無ければなおさら驚きの事態である。

しかし、当の隊長たちはそれこそ想定の範囲内であるかのような顔で平然とそれを見ている。

「フェイトさんたちは、アレを見て平気なんですか？」

キヤロは完全に目の前の戦いにおびえながらも、フェイトに問いかける。

「平気って言うのはおかしいけど、私もなのはもはやても、アレくらいでヒロユキがやられるなんて思ってたないから、大丈夫」

「アレくらいって……」

エリオがそれを聞いて冷や汗を流す。エリオ自身は経験は無かったが、スバルやティアナから何度かその話を聞いたことがあった。ヴィータのラケーテンハンマーはプロテクションを張らなければ即アウト、シグナムの斬撃も、プロテクションなしで食らえば相当なダメージが来ると聞いた。それを食らったことのあるスバルとティアナのタフさにも驚かされたが、そうなったときのことをエリオはよく覚えていた。二人ともしばらくそのダメージで倒れたまま起き上がることもできなかったからだ。

そんな攻撃を、目の前で、しかもバリアジャケットもデバイスのサポートもプロテクションもなしで受けて、なおかつそれでいて何のダメージも受けていない人間がいるのである。驚くのは当たり前前の話だった。

そんなエリオの驚きをよそに、戦いの炎は再び燃え上がった。

「つあつ!」

叫び声とともにヒロユキは足で瓦礫を蹴って高く飛び上がり、一

直線にシグナムに切りかかる。

「くっ！！　なんだそれは！？」

シグナムは驚きを隠しきれなかった。デバイスもなしで自らの剣と切り結ばれたのだから。

ヒロユキは自らの腕を刃にしてシグナムに切りかかったのだった。それはかつてヒロユキが望まずして持ち合わせた力。かつて守るべきものを守るために使った力であった。

「だがな！！」

しかし、隙ありとばかりにヴィータがグラーファイゼンを構えて殴りかかる。ヒロユキはそれを受け止めたが、衝撃までは消しきれず、地面に向けて落下する。

しかし、そこから地面に到達するまでの刹那。ヒロユキは小さく呟いた。

「インフィニティ・ゼロ、『システム・イヴォルヴ』起動。メモリング『記録術式』・テクスチャ解放」

『了解。記録術式、解放します』

「なっ！？」

その光景を見て驚愕したのはシグナムとヴィータの二人だけではなかった。外にいる七人と、モニタールームで監視をしているシャリオまでが驚いていた。

それも当然だ。なにしろ、落下している最中に反動の大きい砲撃魔法を使ったこともそうだが、それが皆の良く知る砲撃魔法であったのだから。

「記録術式NR0003」

『NR0003 術式名"ショートバスター"、魔力解放。魔力使用率138%』

ヒロユキが空に向けて手をかざす。その先に水色の光が収束したかと思うと、次の瞬間魔力光が勢いよく上空の副隊長二人に向かって放たれる。完全に叩きつけたと思っていたのか、油断していたのか。その光は外れることなく二人に命中した。上空で爆発が起こる。

「い、今のは……!!」

「ショート……バスター……!？」

フェイトとなのはは一様にハトが豆鉄砲を通り越して耳元で鉄砲を鳴らされたような顔になり、身動き一つ取れずにいた。

『ショートバスター』。なのはが『デバインバスター』の応用で作りに出した魔法で、『デバインバスター』の威力を犠牲に発射までのタイムラグを解消したものである。しかし、威力の低下は激しく、なのはは実戦で数えるほどしか使っていなかった。

そして、その術式を、今日の前で使った人間がいたのである。驚かないわけが無い。しかも、オリジナルと比べて速度も威力も、タイムラグの小ささも段違いなのだ。明らかに『デバインバスター』に迫る威力の砲撃を『ショートバスター』よりも短い時間で収束、発砲したのだからなおのこと、驚いて当たり前だった。

しかも、ヒロユキはここに来て初めての实战である。新しい術式には慣れが必要で、正確な砲撃を行うならなおさらの話であるのだが、ヒロユキの場合、訓練どころか、術式すら見たことが無いのである。自身で開発したという話もありえないではないが、超能力エネルギーを魔力に変換する特殊な処理を管理局入局時に受けていても、その前から術式の開発をしていたと考えるのには些が無理も矛盾もある。管理局にいる間にそんな時間があるというわけでもなく、さらに魔法の使用にすらまだ慣れているかどうか疑わしい中で、ヒロユキは初見でそれを使用し、成功させたのである。驚かない人間

がいるのならそれこそ驚きというものだ。

煙が晴れ、シグナムとヴィータの姿が現れる。ギリギリのところ
で直撃は免れたが、かすった程度でもダメージはそこそこ大きかつ
た。

「くそ、まさかあのタイミングで砲撃をやるなんて!!」

ヴィータは地団駄を踏んで悔しがる。だが、そんな間もなくシグ
ナムはそれを遮る。

「まだだ!! ヴィータ、奴の着地際を狙うぞ!!」

「お、おう!!」

シグナムに続き、慌ててヴィータも飛び出す。砲撃魔法の反動で
着地には相当の衝撃が来るだろう。その瞬間に体勢を崩したところ
を狙う。それがシグナムの目論見だった。そして、シグナムが予想
した通り、ヒロユキは着地の衝撃で膝をつき、バランスを崩した。

「そこだ!! シュランゲバイセン!!」

「食らえ!! ラケーテンハンマー!!」

二つのデバイスから再びカートリッジが二つずつ弾きだされる。
ヒロユキが立ち上がった時、二人は彼の目の前まで迫っていた。プ
ロテクションを張る時間など無い。

再び衝撃が走り、地面が弾け飛び、砂埃が舞い上がった。

まだ『ショートバスター』の驚きから抜け出せていなかったメン
バーであったが、戦況はそれを待ってはくれなかった。上空から猛
烈な勢いで副隊長の攻撃が迫り、それが見事に直撃した途端、その
激しさに全員が言葉を失ってしまった。

さすがの隊長陣もこれにはまずいと感じたのか、「だ、大丈夫、
だよな!?!」「ま、まあな」などと明らかに動揺を隠しきれていな
い。

「うわあ……同時にもらえる直撃食らっちゃった……」

「高岡さん、大丈夫でしょうか……！？」

「さ、さあね……」

若手の四人でさえも、自らが体験したことのあるものとは次元の違う攻撃に息がつまりそうだった。エリオとキヤロに至っては顔が青ざめている。さすがにあれだけの攻撃を見れば血の気も引くというものである。

しかし、直後、モニターの視界を覆い隠していた砂埃が晴れた時、そこにあつた光景を目の当たりにして、シグナムとヴィータを含め、その場にいたヒロユキ以外の全員が驚愕した。

「えええええええッ！？」

隊長とフォワードチームの渾身の叫び声が響き渡り、蒼い海に吸い込まれていった。

全員が目当たりにした光景は、もはや冗談かと思えるほどのものだった。

直撃したかと思われたレヴァンティンとグラーファイゼンの攻撃だったが、砂埃が晴れた時、そこにあつたのは倒れたヒロユキの姿などでは無かった。

なんと、ヒロユキは傷一つない姿でそこに仁王立ちになり、右手にレヴァンティンの、左手にグラーファイゼンの、それぞれの攻撃を、プロテクションを張るところか、何もせずに素手で受け止めて

いたのである。

「嘘……あんなことが……」

「シグナム副隊長とヴィータ副隊長の攻撃を……受け止めるなんて……」

「しかも素手で……」

「何者なの……あの人は……!？」

キャロ、スバル、エリオ、ティアナが順に驚きながら何とかそれだけを口にする。

「あちゃあ……」

「やつちゃったね……」

「多分ああなったら、ヒロユキはもう……」

はやて、なのは、フェイトも、予想はしていたとはいえ、こうも凄まじいことを見せつけられるとさすがに引いてしまう。

これで驚かない者などいるはずが無い。外にいたものは当然のよ
うに、そしてシグナムとヴィータまでもが、目の前の光景に目を疑
わざるを得なかった。

「ば、馬鹿な!？」

「あたしたちの攻撃を素手で受け止めやがった!? そんなことが
できるわけが……!!」

「さすがだな」

ヒロユキの静かな声が響いた。今の二人にとってはそれが悪魔の
声にも聞こえたであろう。

「さすが、副隊長の肩書きを持つだけのことはあるな……だが、ま

だまだだ」

「な、なに!？」

シグナムはその言葉の意味が分からなかった。

「お前らは俺を甘く見過ぎだ」

ヒロユキは両手に力を込める。

「リミッターをかけているとはいえ、俺はまだ半分の力も出しちゃいないぜ？」

「んだと!？」

ヴィータが負けじとすごんだ。しかし、顔はおびえていた。

「ゼロの試運転ということでは付き合ってみたが、まあそれなりに結果は出たからよしとしよう……それじゃ、終幕だ」

ヒロユキがそう言い終わるか終わらないかのうちに、ヒロユキの両手が一瞬光り輝いたかと思うと、次の瞬間、地響きが起こるほどの轟音とともに凄まじい爆発が起こり、訓練場全体が砂埃に覆われて何も見えなくなってしまった。

「ぐあああつ！！」

「うあああああ！！」

煙の中で二人の痛烈な叫び声がこだまする。立ちこめる砂埃でギヤラリーからは見えなかったが、二人はそこで爆発の衝撃によって弾き飛ばされ、身動きできずに地面に転がる。

そして、煙が晴れ、シグナムが痛みに耐えて体勢を起こそうとすると、その首元に刃が突きつけられていた。少しでも動けば音もなく切られてしまいそうなほどに鋭いその刃は、しかしデバイスではなかった。凶器ですらもなかった。

それは、ヒロユキが自らの腕を『物質変換^{トランス}』して作り上げた刃。

つまりはヒロユキの左腕そのものだった。傷一つなく輝くその刃を首の真横に感じたシグナムは、その鋭さには物怖じしてはいなかったが、その刃から発せられる気迫と覚悟に圧倒されていた。剣士だからこそわかる、その心に。

「シグナム！！ この――」

「やめるヴィータ」

ヴィータが飛び出そうとするが、シグナムがそれを制した。

「チェックメイトだ」

ヒロユキが小さく言うと、シグナムも頷く。

「参ったな。我々の負けだ」

シグナムは観念したという顔でそう言った。

「すまない、模擬戦とはいえつい熱くなっちゃった」
「情けないという顔のシグナム。」

「いや、俺もつい本気を出しちゃったからお互い様だ」
ヒロユキは苦笑した。

「やいてめえ！！　なんださっきのは！！」

ヴィータがものすごい剣幕で噛みついてくる。

「なんだとはなんだ？　それはさっきのシグナムに使ったやつか？」

「たりめえだ！！　アレは魔法じゃねえだろ！！」

「そうだが、それがどうかしたのか？」

しれっと答えるヒロユキ。ヴィータはまるで獲物を取られまいとしてライバルに立ち向かう猛獣のように吠える。

「どうもこうもねえ！！　お前魔導師じゃねえだろ！！」

「ん？　言ってなかったか？　超能力者だって」

「超能力者あ？　そんな奴がどういう見でここにいんだよ！！」

ヒロユキが超能力者だと名乗ると、それにシグナムは目を細め、ヴィータは怪しい感情をあからさまに表に出す。

「了見も何も、俺は管理局の推薦でこの世界に来て、管理局の決定でこの部隊に来た、ただそれだけだ。それに、超能力とは言うが、本質は魔法と変わらん。人間の潜在的エネルギーを使うという点でな」

「そついう意味じゃねえ！！　あの技はなんだって聞いてんだよ！！」

「それは言わない。というか、アレはもう使いたくないんだ」

ヴィータが頭から湯気を立ててわめくのを、ヒロユキは面倒くさそうに軽く答えるだけで受け流す。

「んだと！？　あんだだけ堂々と使っておいていまさら何を言ってるだ！？」

「アレはお前らの魔法みたいな生易しいもんじゃないんだ、知らない方が身のためだ」

まるでまともではない目的のためのものであるかのような言い方をするヒロユキ。

「てめ——」

「もうよしておけ、ヴィータ」

ヴィータがいよいよヒロユキに飛びかかって噛みつきそうになったところで、それをシグナムがすつと横から制する。

「シグナム……けどよ……」

「分かっている。私とて彼奴きやつに聞きたいことは山ほどあるが、それは奴自身の問題だ。我らが詮索したところで知ることはかなわん。根掘り葉掘り聞くのはやめておけ。仮にもお前は騎士だろう」

「……………」

ヴィータはまだ納得できないという顔をしていたが、騎士という言葉で思いとどまったのか、それ以上の追及はしてこなかった。

「感謝する」

「いや、いいんだ。守護騎士の過失は将である私の責任でもある。迷惑をかけた」

「いや、あの場はあある以外に無かったから覚悟はしてたんだが、まさかここまで噛みつかれるとは思わなかったよ」

ヒロユキはクククツと笑いながら言った。

「そうだ、色々と質問されたついでに、こっちもひとつふたつ聞きたいことがあるんだが」

「……いいだろう、詫びの印だ、答える」

「じゃあ単刀直入に言う。まず、お前らはこの世界で生まれた魔導師じゃないな？」

「……何故そう思う」

シグナムは一瞬目を細めたが、そう聞き返す。

「戦い方だ。ミッドチルダ生まれの魔導師や、なのは、はやてのよ
うな魔導師は、デバイスによって魔力を砲撃としたり刃としたりし
て戦う、つまりは魔力を攻撃の用途に使うが、お前らはデバイスそ
のものを武器として使っているだろう？ ヴィータは特にだ。そん
なスタイルを使う人間は管理局には少ないからな」

「……いかにも。我々は確かにお前と同じく、この世界で生まれた
魔導師ではない」

シグナムは、やれやれといった顔で話し出す。

「我々は、超古代の魔法書『夜天の書』を守護するため生まれた、
ヴォルケンリッター
『守護騎士』だ」

「超古代の魔法書……つまりはロストログアか」

「ここではそう言うらしいな。私も最近知ったのだが……それはさ
ておき、我々はデバイスそのものを戦闘の道具として、そこに魔力
攻撃を交えて戦う戦闘スタイル……ここでは『古代ベルカ式』とい
うのだがな」

「古代……」

シグナムが言うには、『古代ベルカ式』とは、魔法という文化と
技術が確立されたばかりの時代にあつた原始的な方式なのだという。
魔法を遠距離に放てる技術がまだ未熟であつたがゆえに、戦闘は必
然的に近接中心となり、デバイスそのものが武器となるようになって
たのである。

『夜天の書』は、そんな時代に生みだされた、『持ち主に大いなる
魔力と魔法を授ける書物』であり、この本そのものが魔力を持ち、
空白のページを、手にした人間が自らの魔力を用いて埋めることで、

知識と魔力を思い通りに扱える、そんなものであったのだという。しかし、手にした者は、ページを埋めるために、自らの魔力のみならず、他人の魔力を強引に奪ってまで埋める人間もいたということとらしかつた。『守護騎士』はただ持ち主の命に従い、ページを埋める事の手伝いと、持ち主から他の人間の手に渡らないよう監視する役割だけを課せられていたため、それを判断することはなかったというより、その資格はなく、ただ従うしかなかったという方が正しいのだろう。

そして、持ち主となったものは次々と強大な力を手にいれたが、その力に飲み込まれ自我を失ってしまったたり、恐れをなして自ら手放したりと、今まで夜天の書を御しきれたものは誰ひとりとしていなかった。

そして、夜天の書は、一年ほど前、管理局のロストログア搜索の途中、違法魔導師のアジトにあったところを偶然発見された。管理局が保管することになると知った時、守護騎士たちは自らの役目の終わりを悟った。だが、その守護騎士の運命に異議を申し立てた人間がいた。

他ならぬ、なのは、フェイト、はやての三人であった。

もともと管理のわずらわしさに手をこまねいていた管理局は、その権利をなのはたち三人にあつさりと渡した。そして守護騎士たちは、自らの正体を三人に話し、運命を話した。

すると、三人はその定められた運命を生きなければならない宿命とも言うべきものを背負った騎士たちに対し、自分たちの力でその運命を変えてみせると言ったのである。

夜天の書のページがすべて埋まり、その大いなる力を手にし、夜天の書と生涯切れぬ契約を結んだ時、守護騎士は主を守護する騎士

となる。それが運命を変えるための方法だった。

そして、三人は任務の傍ら、黙々とページをしかし確実に埋めていき、半年間で400ページすべてを字で埋めてしまったのである。そして運命の通り、守護騎士たちは夜天の書を守護する任を解かれ、三人のパートナー……いや、言うなれば三人の守護騎士となったのであった。

「そして、この機動六課が立ち上がるにあたって、我々はあの三人から推薦され、ここで小隊の副隊長として任務を行っているというわけだ」
「なるほどな。もう一つ聞くが、カートリッジもはじめからあったのか？」

「ああ、少なくとも我々はそうだが、それがどうかしたのか？」
「いや、実は管理局から来るときに聞いたが、ミッドチルダ式魔法に対応したデバイスに実装するための、新型カートリッジシステムをここで試験運用するということらしい」

「なに？　管理局はシステムの仕組み以前に存在そのものを把握していたという気か？」

シグナムは明らかに意外だったという顔をする。横のヴィータも同じだ。

「さあな。無限書庫の中にたまたまあった記録が見つかった、ってことも考えられないがな、あの司書長のことだ」

ユーノというあの司書長なら不可能ではないとヒロユキは思った。
「けどよ、試験で言っただって、システムをそんな簡単にミッドチルダ式に出来んのか？」

ヴィータはそれこそ出来たら驚きだと言いたげな顔だった。

「俺はメカニクスの専門じゃないから分からないが、俺のゼ口のようなハイスペックのデバイスを作り上げたあの技術部ならやっても

おかしくはないだろう」

「デバイスに加えてあの『ガンダム』まで、突貫で対応作業をやつてしまうあの技術部のタフさと速さを考えれば、それを実際に見た人間にとつてはそう言わざるを得ない。」

「俺が見る限りでは、仕組みそのものはお前らのデバイスのものより複雑だし、カートリッジの装填数も多くなつてると思う。それくらいしないと、今の隊長メンバーの力でもってしても、あの敵に生身では勝てんからな」

現状、特別な細工なしであの緑色の人型機械を撃破できるのは、同じ人型機械の『ガンダム』しかないのだ。人型機械は、パワーは生身の魔導師とは比べ物にならないほど高いが、その大きさに加えて起動には少し時間がかかることから、魔導師ほど小回りの利く立ち回りは期待できないのである。

「どちらにせよ、今の六課はそれほど大変な状況に置かれてるってことだ。隊長だけで対処できるうちはいいが、いざとなったら六課を総動員してでも対処をしなければならないんだ……しかもまだあいつらはカートリッジに慣れていない。つまりそれまでは、お前らの負担が少しばかり増えることになつちまうが、それでもいいか？」

「……使い方の教育と、いざとなれば防衛に回らなければならんということか？」

「そういうことだ」

「わかった、そういうことなら、ぜひとも力になってやらねばな」

「ああ、アタシも楽しみだ」

さつきまで仏頂面だったヴィータまでが、いつの間にか期待めいた笑みを浮かべていた。

「まあ、教えられる立場なのは俺も同じだ、俺はパワーだけで、長い間戦い慣れてるお前らと違って力押ししかできないし、作戦を考えるのも得意じゃない。魔法の術式だってまだゼロのおかげで何と

かなってるが、基本見よう見まねだからな。色々とお前から学ぶことはありそうだ。そのところ、よろしく頼む」

「ああ、我々の戦い方が参考になるのなら、教えられることは教えよう。今度お前もフォワードの奴らと一戦交えてみたらどうだ？」

「それもいいかもしれないな。そのときは頼んだぜ？」

「言われずとも、そのつもりだ」

どちらからともなく手を伸ばし握手を交わす。シグナムの顔にはかすかな笑みが浮かんでいた。

「いつか暴いてやるからな……お前の正体」

ヴィータは視線を合わせないようにしながら握手をした。

「さあて、それはいつになるかな」

ヒロユキはそれに苦笑して応えた。

「はあ、何とか平穩におさまったみたいやな」

三人が互いに握手をする様子をモニターで見ながら、はやてはほつと胸をなでおろした。ヴィータがものすごい剣幕で噛みついてかった時はヒヤリとしたらしい。

「でも、シグナムもヴィータも、いつになく本気で戦ってたね」

フェイトが思い出すように呟くと、はやても、

「せやな……それだけヒロユキが張り合える相手やったいうことかも知れへんけどな」

しかし、シャリオの叫び声がそのほつとした空気を打ち碎いた。

「はやてさん、はやてさ〜ん！！ た、大変、大変です〜！！」

「なんやシャーリー、今ええとこなのに」

はやては少し困惑した顔をする。

「それどころじゃないんですよ！！　今、さっきの模擬戦の分析結果が出たんですが……」

そう言ってシャリオはホログラム画面を映し出す。

「どこが大変なん——」

その言葉を最後まで言い終わる前に、はやての目は驚愕に見開かれた。

「な、な、な、なんやてええええっ!？」

その叫び声に、訓練場に居る三人を除く全員の視線がはやてに向けられた。訓練場は周りに魔法が飛び火するのを防ぐためのフィールド魔法が防音壁の役割も果たしているため、三人にそれが聞こえることはなかった。

だが、そんなことなどお構いなしに、全員が我先にと争って画面をのぞき込み、そして覗き込んだ順番の通りに驚愕の叫び声を上げていく。それもそのはずだ。画面に表示される結果が理解のできないものであれば誰だって驚くに決まっている。

「総合判定、リミッター付きでSランクう!？」

誰かが叫んだ。それはもはや驚異的と呼べるものではない。異常と言える結果だった。

『おい、いつまで俺たちをこっちにどけとく気だよ、シャーリー』

「あ!？　あ、す、すいません！　すぐに消しますね!」

シャリオが慌てて別の画面を呼び出し、スイッチを切ると、海上に浮かんでいた廃墟都市はあっという間に霧のように消えていった。魔法に不可能はないのか。ヒロユキはそう思った。

三人が海岸の丘に戻ると、そこにいた六課のメンバーが待ち構え

ていたようにヒロユキを質問攻めにする。

「Sランクってどういうことですか!？」

「リミッターをつけててどうしてあんなにパワーを出せるんですか!？」

「さっきの魔法はどうやって出来たんですか？」

ヒロユキに答える暇が与えられない。さすがのヒロユキもこれにはたじろいだ。

「フォワードにとっては疑問だらけだろうね……あの戦い。ねえ、なの……は？」

フェイトが呟いてなのはの方を見ると、

「……………」

なのははポケーとした顔で若手に質問を投げられまくるヒロユキを突っ立ったまま見ていた。

「あ……………」

そこでフェイトは思いたす。そうだ。一度きりではあつたがヒロユキは模擬戦の中でなのはの魔法『ショートバスター』を二度も、しかも練習なしのぶっつけ本番の中で使ったのである。それを考えれば、呆氣に取られているなのにも納得が行った。

「なのは何？」

「え、え？ な、なに？」

フェイトはあえて気付かないふりをしてなのはに呼び掛ける。ようやく我に帰るなのはだったが、その顔からはまだ動揺の色が消えてはいなかった。

後あの事を聞こう。フェイトは小さくそう決意した。

「はいはい、みんなそこまでや! ヒロユキが困つとるやんか」
はやての鶴の一声で、フォワードのメンバーは渋々ながら引きさがる。

「すまん、助かった」

「ええよええよ。それより、ヒロユキの模擬戦の結果なんやけどな……」

「……Sランク？」

ヒロユキは分らない顔をするこしかできなかった。

「せや、Sランクや。どういうことや？ ヒロユキ、管理局からリミッターの取り付けはされてんのやろ？」

「ああ。何でもはやてがつけてるのより強いやつを、俺とゼロの両方に取り付けてるって、クロノから聞いたが」

「んな！？」

はやてがまたしても驚いた。それも無理はない。自分と同じリミッターをつけてあの結果というのは正直あり得なかったからだ。

管理局の魔導師の中で、飛び抜けて高い魔力を有する人間は、周囲の魔力構造体への不意な影響や、部隊に認められる魔導師レベルの総合ランク合計をクリアするために、リミッターをかけて魔力を制限されることがある。これは管理局の規則で定められていることなのだが、特になのはたち三人を筆頭にSランクを超える魔導師が多数所属する機動六課においてはこの傾向が強いのだ。はやては前者、なのはやフェイト、シグナムは後者の理由でリミッターをかけている。

そのリミッターにも1段階引き下げるものから5段階引き下げるものまで様々あり、なのはやフェイトは本来S＋ランクであるのをリミッターにより2ランク下のAAランクに、はやてはSSランクを4ランク下のAランクにまで抑えられている。

しかし、ことヒロユキに関しては例外と言うよりどう考えても無理のある話なのだ。ヒロユキのリミッターははやてと同じ強さのも

のだということを考えれば、ヒロユキは高めに見積もってもA A Aランクが限界、ランク一段階引き下げのリミッターをつけているシグナムとヴィータの二人を相手にすれば、良くて片方を倒せて、片方に引き分けが関の山と考えるのが妥当であった。

だが、ヒロユキは最高レベルのリミッターをつけてさえSランクの戦闘レベル、おまけにシグナム、ヴィータを相手に一撃で勝負をつけてしまうという結果が出た。Sランクということは、すなわち二人を同時に相手にしても、はなから勝敗は見えていたということになる。加えて、なのはのものに匹敵するほどの砲撃魔法を使用したゼロにすら同じ強さのリミッターが掛けられていたということは、プロのボクサーに素人が両手にウェイトを付けて挑むくらいのハンデを背負って、ヒロユキはあの模擬戦をやっていたということになるのだ。これはもはや信じろという方が無理な話であったが、目の前で結果は出てしまったのだから信じるしかない。

「なるほどな」

「なるほどな……って、いくらなんでも無茶苦茶やで!? おかしいとか思わへんの?」

はやては焦ったような顔になる。しかしヒロユキはそこで俯き加減に言った。

「俺はもともと無茶苦茶なくらいの人間だぜ? 自分自身でも、まだ自分が100%分かってないんだ、どんな結果が出たところでそれは俺が出せる必然的な結果でしかないからな、今更驚かない」

「あ……………」

はやては自分の言ったことを後悔した。ヒロユキはもともと無茶苦茶とも思える願いから生まれた人間だということをすっかり忘れていた。そんなこと昔から知っていたはずなのに。この世界の常識

ミッドチルダ

と、ヒロユキの、はやてたちの世界の常識は違うということに、何故言うまで気がつかなかったのかと。

「ご……ごめんな……おかしいなんて言うて」

「管理局の連中には嫌ほと言われた、もう慣れてるよ」

ヒロユキのそう言う笑顔は、しかしその奥に少しばかり悲しさが滲んでいた。その一挙手一投足を、シグナムとヴィータは見逃さなかった。

「……うすうす感じてはいたが、彼は何か暗い闇を抱えているというのには間違いないな」

「けど、その過去を掘り返されても、怒りも泣きもしねえつてのも、ちよつと変だな」

「ただそうしなだけなのか、それとも受け入れる覚悟があるのか……どちらにしろ、触れない方がいいのには変わらないかな」

「ああ、こればかりはあいつの問題だ、アタシらが迂闊に踏み込んでいい領域じゃねえ」

「そうだろうな……いつかは聞かねばならん時が来るか……とにかく今は、彼自身をここに迎え入れてやらねばな……ヴィータ、シャルのところに連れて行ってやれ。いくらランクSとは言え、我々の技を直撃で食らったんだ、なんともないわけではなからうからな」

「ああ……けど、アイツだけじゃなくてアタシらもな」
「……そうだな、ははは、まったくだ」

シグナムは自分のことを指摘されたことに頭を抱えて苦笑するしかなかった。

「シャル、仕事だぞ」

ヴィータがある一室の扉を開ける。

「あら、ヴィータもシグナムも……また模擬戦で無茶したの？」

部屋の中にいた白衣の女性は、またかというように少し困った笑

いを浮かべて言った。

「無茶をしたというよりは、想定外に無茶をしなければならなかった、と言った方が正しいかな」

シグナムは呟いた。

「紹介しよう、機動六課医療班のシャマルだ。我々と同じ『守護騎士』の一員でもあるがな。主に回復魔法と後方支援担当だ」

「あら、新人さん？」

シャマルと名乗る女性はヒロユキに気づき、不思議そうな顔をした。

「高岡ヒロユキです」

「新人ってーか、実力はプロ級だけだな」

ヴィータがシグナムの言葉に注釈を付ける。

「さっきまで彼と一戦やっていてな、思いの外やられた。さすがにこの部隊で一佐扱いと言うだけはある」

「あらあら、それは大変ね」

シグナムの自嘲的な笑いを含んだ言葉に、シャマルは今度はヒロユキを見る。

「二人が苦戦するなんて相当なものだね。改めて、医療長のシャマルです。模擬戦するのはいいけど、怪我させるくらいにコテンパンにしちゃダメよ？」

「……善処するよ」

さすがにいつい本気を出してやり過ぎてしまったのは事実だったので、ヒロユキはそう答えるしかなかった。

「結構やられてるわね。相当な爆発魔法食らったでしょ？」

「ああ、プロテクションバーストに近いのをゼロ距離で食らった」
ヴィータは診察されながらムスツとして答える。

「貴女達だからほとんど問題はないけど、これフォワードが食らってたらヤバいんじゃないかしら」

「そんなに激しいのか？」

シグナムは感覚的に理解できないのか首をかしげた。

「ええ、ほんのわずかな時間だけだけど、瞬間的にSランクに匹敵する魔力がぶつかったみたいね。彼が相手を加減してたのかしら、ほぼ問題はないけど」

「高岡、アレは全力でやったのか？」

シグナムは先ほどのバーストがどうだったのかを聞いてきた。

「どうだったか……必死でやってたからそうかもしれないし、そうじゃないかもしれない」

「まあ、Sランクってのは否定しねえけどよ。実際そういう判定出てたし」

「ああ、しかも部隊長と同じ強さのリミッターをつけてこの強さだ、相手を加減して貰わねばこうはならんだろう」

「ああ、同感だ。でも俺はあの一瞬でそこまで手加減できるほど器用じゃないんだが……あ、もしかするとゼロが——」

「ええっ!？」

シグナムとヴィータが当たり前のように話すのを聞いて、シャマルも当然驚く。その驚きはヒロユキの言葉を遮った。

「え、ってことは、彼、相当な魔導師ってこと!？」

「さあな。そうかもしれないし、詳しいことはまだ分かん」

シグナムは肩をすくめる。

「別にどう思ってもらってもいいさ、俺はまだここでは新人でしかないからな」

ヒロユキはあくまで新人という立場でしかないと告げる。

「まあ、そういうことならいいけど、でもあんまり私の仕事増やさないでね？」

『それは仕事をする人間のセリフとは思えませんが、シャル医師』
「ふえ！？」

今まで沈黙していたゼロが突然口を開き、シャルはそれに驚いて椅子から転げ落ちそうになる。

『失敬、驚かせてしまいましたね。ドクターシャル、初めまして、ゼロと申します。マスターヒロユキのデバイスです』

「びつくりした……貴方がデバイス……でも、それじゃあもしかして貴方がさっきの模擬戦で……」

『ご明察です、ドクターシャル。あの一瞬に、私がマスターの魔力放出量をコントロールしたのです。あのままコントロールしていなければ、お二人はあの程度では済まなかった筈ですから。と言っても、あのときは私も直感に頼っていて、ひよっとして抑え過ぎたのではないかと一瞬思ったのですが』

「へー、相当優秀なデバイスなのね」
『光栄です、ドクター』

シャルとゼロのやり取りを見ながら、シグナムはヴィータに小声で耳打ちする。

「どうだ？ デバイスが手加減したと聞いて、お前は彼の実力をどう見る」

「正直、アタシは今のアイツはまだデバイス頼みってところだなと思う。でも逆にアイツからデバイス取り上げたらいざって時に事故ったりするかもしれないな」

「そうだな、私も同感だ……フォワードと模擬戦をさせても問題ないと思うか？」

「あんだだけデバイスが優秀なんだ、それくらいは問題ないんじゃないね」

えか？ フォワードとやるんなら、アタシらみたいにコンマの戦いまで至ることは早々ないだろうし」

「納得だ……よし、明後日あたりから早速同行してもらおうしよう」

「ああ、楽しみだ」

シグナムとヴィータが陰で小さくニヤリと笑ったのに気付かず、シャルはゼロとヒロユキと笑いながら話し続けていた。

Cross・08 System・Involve

フォワードの模擬戦にヒロユキが参加するのは明後日からということ、とりあえずヒロユキはシグナムとヴィータからは解放された。が、ヒロユキの肩を掴んで引きとめる人間はこれで終わりではなかった。

誰あろう、なのは、フェイト、はやての三人が待っていたのである。

三十分後、ヒロユキは再び隊長室に来ていた。

「……で、三人そろっていろいろ聞きたいことがあるって顔だな」
ヒロユキは分かりきった顔で小さく呟いた。

「まあ、私はそこまで聞きたいことはあらへんけどな」
はやてはそれを聞いて訂正する。

「じゃあなんだよ？」

「ああ、いやその……単に謝りたかっただけ……なんよ」
ヒロユキはそこで理解する。はやてはあの時の言葉をまだ引きずっているのだと。

「あれは別に今に始まったことじゃないからいいだろ。それに、あの結果に疑いを持たなかったならそれで帳消しだろ」

「………せやけど」

「言ったる、今更驚かないって。それを今まで知っていたはずなのに、あんなことを言ってしまった、ならそれだけの話さ、引きずられるとこっちが後味悪いからやめてくれよ」

「………うん」

少し嫌ったらしく言うと、それではやては黙る。これ以上言っべ

きこともなくなったようだ。

「さて、本題に入りましょうか、お二人さん？」

ヒロユキはなのはとフェイトの方に向き直る。二人とも口をきゅつと結んでいたが、やがてその口から申し訳程度に言葉を紡いだ。

「さっきのあれは……あの砲撃は……なんだったの？」

最初に口を開いたのはフェイトだった。

「やっぱりそのことか……別に隠すつもりなんてねえから単刀直入に聞いてくれりゃいいのによ」

「だ、だって、聞きにくいよ……！！」

フェイトはわたたししながら抗議をする。

「まあ、気持ちは分からなくもないがな……答えると、あれは『シヨートバスター』だ」

「それは分かっているの！！　そうじゃなくて私が聞きたいのは……！！」

なのはがいきなり沈黙を突き破って大声を出した。その声にはいらつきと歯がゆさが混ざっているのが感じられた。

「落ちつけ……分かってる、何で俺が見もしない砲撃魔法を使えたかっていうことだろ」

それを聞いてなのはだけでなく他の二人も頷いた。誰かが小さく息を飲み込む音が聞こえた。

「それは今から説明する。だが、説明するのは俺じゃない」
「えっ！？」

三人が一瞬目を丸くしたが、その理由はすぐに分かった。

『私が説明しましょう』

ゼロの声だった。ゼロは水色のコアを光輝かせて説明を始める。

『簡単にいえば、あれは私のシステムがなし得られることの一つです』

「システムやて？」

『はい、私ことゼロのシステムとOSは、インテリジェントデバイスのそれを一回り進化させたものが使われています』

「それって、単に私たちのデバイスよりも高性能ってこと？」

『そういうことになります。インテリジェントデバイスのAIを進化させ、より人間の知能に近い機能を得たもの……名を「システム・イヴォルヴ」と言います』

「システム・イヴォルヴ……独立、進化、進歩するシステム、ってことでええんか？」

『はい、大体はそのような解釈で構いません』

「ほんで、それはどういうシステムなんや？」

『システム・イヴォルヴ——かいつまんで言うなら、戦いを重ねるほどに学び、進歩し、より高度な戦闘を可能にするシステム、といったところでしょうか』

「成長……戦うほどにどんどん強くなっていくの？」

『そういうことです、ミスフェイト。例えば、貴女達は新しい魔法の術式を創り出す時、自らの魔力資質やすでに有する魔法術式と相談し、魔力のコントロールなどを考え、それをデバイスに伝えて精

度を高めていくでしょう。しかし、このシステムでは、新しい魔法術式を編み出す時、システムが構築を行い、完成したそれを魔導師に伝えるという、本来とは真逆ともいえるやり方なのです」

「システムが魔法を作るやて？ それを使う人間は問題ないんか？」

「はい。完成した術式は神経電波、脳波、筋電流など、ありとあらゆる人体感覚機能を介して分かりやすい形で伝えられるため、一度伝えるだけで、録音したように、刻み込んだようにその術式を扱えるようになるのです」

「けど、それがさっきの『ショートバスター』を使ったこととどう関係があるの？ 一からあの魔法を完成させたの？」

なのはが最大の疑問を投げかける。いくら高性能で処理能力の高いデバイスといえど、模擬戦中のあの一瞬で術式を思いつき構築を完了させることはできるわけがない。

しかし、ゼロは冷静に答える。

「いえ、ミスなのは。あの時『ショートバスター』を確かに使いはしました。しかし、あの術式は私が構築したものではありません」
「じゃあ、ヒロユキくんが？」

「マスターでもありません。構築したのは貴女自身です」

「えっ!？」

なのはは目を丸くした。

「分かりやすく言うなら、あの『ショートバスター』の術式は貴女が構築したものであり、私はそれをマスターに伝えたにすぎません」
「で、でも、どうやって理解したの!？」

「……………」

ゼロはそこで何故か黙り込んでしまった。

「どうかしたの？」

フェイトが心配そうにゼロを覗き込んだ。
するとゼロは重々しく一言告げる。

『実を言うと、理解したのは模擬戦の少し前です』

「模擬戦の前って言うところ……私たちがここで会ったときしかゼロは喋ってへんけど……」

『まさにその時です、ミスはやて。私はあの時そちらのお二人のデバイスに強化処理を施しました。それを行うには一度強化先のデバイスのOSにアクセスして、システムの構造を把握し許可を得なければなりません、その時にお二人に気づかれないうちに、ストレンジされている魔法のデータを一部分コピーしたのです』

「なっ!？」

なのはとフェイトの目が驚愕で見開かれる。

「つまり、二人のデバイスにストレンジしてあった魔法を盗み出した言っんか!？」

はやては思わず椅子から立ち上がっていた。

『やはり、そうだったんですね』

不意にレイジングハートが口を開いた。

「レイジングハート、知ってたの？」

『知っていたわけではありませんが、違和感のようなものは感じていました』

『システム同調とアクセス許可、新システムの組み込みというのは、君たちの例えで言うなら身体の寸法を測って、それにあった服を着せられるようなものだ』

バルディツシュも話し出す。

『それならまだいいのだが、あの時、ただ測られるだけではなく、身体を撫でまわされるような妙な感覚があったのだ……システムの同調をしていたので気のせいかとは思っていたのだが、まさかデーターを盗み見られていたとは思ってもよらなかった』

二つの被害者デバイスは呆れた声でゼロに愚痴を言う。

『こんなことを行うのは悪であると承知してはいたのですが、お許し願いたい。まだ魔法の使い方を心得ていないマスターをあのままここで戦いに行かせたくなかった……一から術式を構築すると時間がかかり過ぎる、そうになると、すでにある術式を利用させていたらくしか方法がありませんでした』

「……ってことは、なのはの砲撃魔法だけじゃなくて、私の『フォトンランサー』とかも……」

『はい、私の中にあります。私に対応した術式に改良するには時間がかかるので使っていませんが』

「そうやったんか……アンタもヒロユキのためや言うけど、随分と無茶するなあ」

『面目次第も御座いません』

「……やそうやけど、二人はどうするん？」

はやては干渉せず、を決め込んだらしく、判断を二人に任せる。

なのはもフェイトもしばらく黙って何か考え込んでいるようだったが、

「……うらやましいねヒロユキは……こんなにデバイスに想われてるって」

フェイトは困ったような笑いを浮かべた。

「……逆に驚いたくらいだよ」

ヒロユキは肩をすくめて困惑しながら呟いた。

「まあ、仕方ないね……ゼロはヒロユキの身のためにやったことなんでしょ？ シグナム達がまさか模擬戦をいきなり仕掛けて来るなんて私たちも予想外だったけど、あのままだったらヒロユキはさっきより酷い結果になってたかもしれないよ」

フェイトはあくまで不可抗力だと思ったようで、べつだん追及はしてこなかった。

そして、黙っていたなのはが、やや遠慮がちに口を開いた。

「一つ聞いていい？ アレはヒロユキがやろうと思ってやったことじゃ……ないんだよね？」

「ああ、使ったのは俺だが、ゼロが魔法の存在を言ってきたのは模擬戦の途中だ、その時までまったく知らなかったさ」

『マスターの言うとおりです、これはすべて私の独断でやったことです。懲罰は私一人にお与えください』

なのははそこで言葉を切り、何かを考えていたが、

「……いいよ、自分の部下の考えを見逃してた私たちも悪いんだもの、お互い様」

『いいのですか？』

「いいの。それに魔法くらい、参考になるなら一言言ってくれればいくらでもあげるよ？」

『……………恐縮です、ミスなのは』

ゼロはそう言って頭を下げる。

結局、三人とも、責任はお互いにあるという認識で一致したらしく、ヒロユキとゼロは無罪放免となった。

「さてと、それじゃあその部下たちにも、ちょっとオハナシしておかないとダメかな？」

「せやな、訓練施設の無断使用と無断戦闘、おまけに新人相手に本気出した罪は重いで」

なのはが暗い笑みを含んだ言い方ではやてに言つと、はやてはあからさまに何か悪だくみをしている顔になり、薄笑いを浮かべながら通信画面を呼び出す。

「あ、あはは……ほどほどにね」

フェイトは引きつった笑いを浮かべて言った。ところどころに微かな期待めいた輝きが見え隠れしてはいたが。

そんな薄気味悪い三人に一抹の恐怖を感じ、ヒロユキはこそそと隊長室を後にした。

昼下がりの機動六課はまるで誰もいない入居前の家のように静まりかえっていた。これで一大組織の一角を担う隊であると言われても、初見ではすぐには信じられないであろう。

それとなく歩き回っているうち、ヒロユキは屋上にたどり着いていた。見渡す限りの海が、目の前に広がっていた。傾きかけた太陽が、じき向こうに沈んで行くとき、さぞ美しいものだろうとヒロユキは思った。

同時に、海から吹く静かなそよ風と、それに乗って運ばれてくるかすかな潮の香りが、ヒロユキの心を凪いだ。

「俺は……何がしたいと思っていたんだろうな……」

ヒロユキは誰ともなく呟いていた。

守るためにその力を貸してほしい。そう言われた。

だが、守るものとは何か。今更になって考えさせられる。この世界か、それともこの機動六課か。はたまたそれ以外の何かか。

考えても、今その答えは出るはずはなかった。守るものはおるか、この世界、この世界の物事ですらまだ半分も理解したわけではない自分にとって、それが分かるわけではないのだ。

ヒロユキは自分に言い聞かせる。知ること、考えること、それはこの後見極めていけばいいのだと。

記憶の奥底にしまいこまれたあの悲しい事件は、自らの存在意義を見いだせずにいたヒロユキにとって、ひとつのきっかけを与えてくれた。

守るものは最初からあるのではない、後から出来るものだ。

そして、あの時もそうだった。最初は守るものなど、あつて無いようなものだった。ただ気にかかる程度で。その大きさに気づかされたのは、それが奪われそうになった時で。

最初は気にしているかすら分からなかった。しかし、失いかけて初めて、その大きさ、大切さに気付かされた。それまで何気なく見ていたものが、その時になってかけがえのないものに感じられた。

そして、その記憶と教訓は、今のヒロユキに一つの考えを見出させるには十分だった。

「これから、見つかるさ……」

ヒロユキは再び、小さく呟いた。

心地よい疲労に似た感覚が身体に回ってきた。ヒロユキは地面に寝ころぶ。

「そつえば、今までもこんなこと何度もしてきたっけな……」

ヒロユキはそう考えたが、考えるよりも先に不意打ちで乱入してきた睡魔が思考回路を停止させ、そのまま意識が暗闇に運び去られてしまったのだった。

「……………んん……………!？」

妙な違和感を感じて、ヒロユキの意識が引き戻される。ゆっくりと視界を広げてみると、傍らにはやての顔があった。はやての頭の後ろに広がる空は、オレンジに染まっていく途中であった。

「あ、起こしてもた？」

はやてはヒロユキに気づき、様子を聞いてくる。

「……………いや、大丈夫だ」

ヒロユキは寝ころんだまま言う。

「俺の寝顔でも堪能してたってか？」

ヒロユキはふとそう思い、はやてに聞き返した。

「まあな、結構楽しかったで？ 可愛いかったしなあ」

ヒロユキの予想した通りの答えがはやてから返ってくる。そう言

いつつも、はやての顔は少しだけ赤いように見えた。それが地平線に向けて歩を進める太陽のせいなのかは、ヒロユキには分からなかった。ヒロユキ自身が若干恥ずかしかったので、むしろ感謝すべきことだったのかもしれないが。

「ええ景色やろ？」

海の方こうを見つめながら、はやては感想を求めてきた。

「ああ、そうだな」

「せやる？ 私らのお気に入りの場所なんやから、ここ」

「この海岸がか？」

「そうや。風が気持ちええからなあ、嫌なことがあっても、ここに来ればどうでもよくなるんよ」

「確かにな」

「六課設立するとき、無理言つてここの隊舎にしてみろたんやからな、私の目に狂いはないんや」

はやてはなぜか胸を張って自慢げに言った。

「ま、お前の目利きを挟んだのかどうかは別にして、確かにここはいいな」

「あ、さらつとスルーしよつたな」

不満気な声ははやてから聞こえてくるが、当の本人は笑顔だった。

「して、お前はなんでここに來たんだ？」

思い出したようにヒロユキは聞いた。

「いやあ……説教しとつて疲れてなあ、リフレッシュいうところかなあ、用件はもう一つあつてな」

はやてはそう言つて制服のポケットから鍵が3つ通されたリングをヒロユキに差し出した。

「一番大きいのは部屋の鍵や。あいにく、副隊長をスバルたちと同じ普通の部屋で寝泊りさせるわけにもいかへんしな」

「そりやまたご丁寧に」

鍵の大きさからして、そこそのVIPルームであると予想がついた。というより、使われていないのか鍵が新品同様にピカピカ過ぎて傷も曇りも見当たらないのだ。

ヒロユキは少し呆れながらもその鍵を見る。角度を変えるとヒロユキの顔が写り込むほどに、その鍵は磨かれたように輝いていた。「で、銀色のは訓練シミュレーターのスイッチの切り替えキーや。システム制御室の扉の鍵も兼ねてるで。シグナムとヴィータとシャリーたつてのお願いでな、ヒロユキに自由に訓練施設を使わせてやれへんかって話があつたんよ」

「……………」

それを聞いてヒロユキは内心不安に思った。シャリオはともかく、シグナムとヴィータに至っては完全に興味から来る頼み込みであることは容易に想像がついてしまったからだ。先の模擬戦であんなれば、戦士として興味が湧かないはずはない。表向きは訓練させてやってほしいと戦った者の立場で頼み込んでおいて、裏では恐らく俺のスタイルを観察するとか、上達したところで俺ともう一度一戦やらかしたいと考えているに違いない。頭が痛くなるヒロユキであつた。

「一番小さいのはドックの入り口の鍵や」

「ドック？」

ヒロユキは聞きなれない言葉に疑問符を浮かべる。

「せや。一応ヘリポートを兼ねてるんやけどな、六課は空戦魔導師が多くてヘリがそんなに必要ないんよ。ほんでドックはがら空きなんやけど、アレをしまつくらいの余裕はある思てな」

「……………そういうことか」

はやてが指差した先には『ガンダム』があつた。つまり『ガンダム』の責任者であるヒロユキに鍵を渡して、整備はそっちでやってくれという話だろう。

まあもつともな話である。一応どんな魔導師のデバイスにも対応

しているガンダムだが、それはガンダムそのものの構造や操作方法を理解した上での話である。いつか他の人間が使わなければならな
いときも来るとは思うが、今のところはその心配はないだろう。裏
を返せば逆に任せられる人間が今はヒロユキしかないのだ。慣れ
ない人間がやってトラブルを起こすと面倒なことになる。そうなら
ないためにも、時間はかかるが今はヒロユキ一人でやるのが最善の
策であった。

「了解した」

「ほんなら、部屋に案内するで」

沈み行く夕日を背に、ヒロユキははやてについて屋上を後にした
のだった。

案内された部屋は隊長室のある最上階の奥にあった。近くには隊
長室のほか、なのはやフェイト達くらいの地位にある人間が使用す
る、階下の一般用寢室より一回りゆったりとした部屋もある。恐ら
くは連絡を素早く回せるようにとの配慮か。部屋にはインターホン
も付いていた。

「ここやで」

「……なんだこりゃあ」

ヒロユキは部屋の中を見て、呆れで絶句してしまった。

明らかにVIP専用の部屋である。隊長室より一回りほど狭い程
度だ。ホテルの一人部屋というにも広すぎるし、そう言われなけれ
ば二人部屋ではないかと思えるが、ベッドが一つしかないので一人
部屋だと分かる。しかし、広さが一人部屋にはミスマッチである。

「豪華すぎないか、ここ」

ヒロユキは率直に感想を述べる。

「まあ、せやな。けど、このまま使わずに放置しとくのも埃が溜ま

るからアレやし、有効利用っちゅうことでありがたく使つとき？」

「……ご好意感謝しますよ」

ヒロユキは引きつった笑いで答える。使わないままで埃が積もれば、いちいち開けて掃除するのも面倒であるというのにも納得はそれなりに行った。副隊長が隊長に匹敵する部屋で寝泊まりしているのかと、煮え切らない部分はあったが。

「ほんなら、私はもうちょい仕事あるから行くわ。夕食は6時から食堂でやつとるから、遅くならんうちに食べに行きや」

はやてはそう言い残して階段を下りて姿が見えなくなる。

「まあ、使わないのも悪いしな……飯にも俺はメンバーの中でも今は鍵なんだから」

無理やり自分を納得させ、ヒロユキは、すでに部屋に届けられていた荷物の整理を始めたのだった。

日が暮れ、空が薄暗く染まり始めたころ、夕食が始まった。

食堂に来てみると、すでにフォワード陣と副隊長が夕食を待っていた。だが、ヒロユキはそこで、副隊長二人が異様にやつれてボロボロになっているのに気がついた。勝てると思っていた相手に全力で挑んで勝てなかったどころか屈辱を受けてきた後のようなやつれ具合の二人に、ヒロユキは声をかけずには居られなかった。

「随分とボロボロだな」

「あ、ああ、高岡か。ちよつと隊長三人から説教を食らっただけだ」「説教？」

「訓練施設の無断使用とか、新入り相手に手加減なしで闘ったとか、そんなことだ」

グイータもいつもの刺々しさが欠片もない。完全に見栄を張るといふ気力は残っていないようだ。

「そうか、大変だったな」

ヒロユキはそれだけしか言えなかった。というより、戦いであれだけ激しい二人がこれだけボロボロになるとは、隊長三人がどんな説教をしたのかと激しく疑問を抱いたが、それを聞くのは憚られた。トラウマを呼びさましそうな事態に陥る感じがしなくもなかったからだ。隊長室を出る前にちらりと見えたあの三人、特になのはとはやてのブラックな笑いを考えると無理にでも納得がいく。

掘り返すのはよしておこう。ヒロユキはそう思いながら、夕食のメニューを品定めにかかるのであった。

ちなみにその後のことを少しだけ話しておくと、なのはとフェイトとはやての三人は、食堂に来た時、何というか、つやつやだった。まるで日ごろのストレスがほとんど吐き出されたかのように。そして、しかも三人がヒロユキの横で談議に花咲かせて盛り上がるたび、後ろのシグナムとヴィータがびくびくしていたのだ。完全にトラウマ寸前になるような説教だったのだとヒロユキは確信せざるを得なかった。

そして、シグナムとヴィータは、傍にいたフォワードの四人に

「くれぐれも訓練施設を壊すなよ」とか

「やり過ぎはよくねえんだよ、うん」とか、

意味もなく注意を促していたのであった。訓練とか戦闘に支障が無いのかと心配になるヒロユキであったが、隊長三人にそれとなく聞く

「大丈夫、アレくらいでやわになるほど、二人は伊達に副隊長やってないよ」

「そうだよ、仮にも戦士だもの」

「私たちの人選は間違ってへんのや」

などと、隊長のお墨付きともいえる確約を、それも副隊長本人たちの居る前で言われてしまい、それ以上の追及ができなかったのも事

実だった。そう言われて、後ろで二人が、三人を恨みのこもった目で見ていたのはヒロユキだけが知ることである。フォワードが、そんなことに気づかず、笑顔で食事を取り続けていたのが幸いというべきか。

「機動六課……か」

明かりの消えた部屋のベッドで、ヒロユキは呟いた。本来管理局にない6番目の小隊。ロストログアの搜索・回収を目的とした試験部隊。それが機動六課だった。

そして自分は今、その機動六課の副隊長としてここにいる。来たからには、それ相応の覚悟を持って挑まねばならない。

とはいえ、この六課の雰囲気、特に隊長たち三人が、昔いた場所、その時の三人と何一つ雰囲気が変わらないことに、ヒロユキはある意味安心を抱いていた。

時間が経って、世界が変わっても、肝心なことはいつまでも変わらない。

それを噛み締めて、ヒロユキは眠りにつき、彼の機動六課の初日は幕を閉じた。

「きゃああつ!?!」

少女の悲鳴が響く。それと同時に、敵は猛烈な攻撃の嵐をその少女に向けた。

「んなことさせるかよ!?!」

少年は敵に突っ込んだ。敵はもんどりうつてバランスを崩すが、時間稼ぎには足りなかった。

「逃げる!?!」

別の声が後ろの逃げ惑う人々に向かって叫んだ。しかし、そうしている間にも、敵は彼らの防御網をかくぐり、逃げ惑う人影に向かい容赦なく光の嵐を叩きつける。

「くそっ!?!」

少年は歯ぎしりした。数が多すぎる。とても二人や三人そこらで対処できる数ではない。

「仕方が無い……!?!」

「ああ、我々も退くしかない、その間に救援を求める」

納得のいかない顔で、彼らは決断した。

.....

ふと、ヒロユキは目が覚めた。

と言つても、窓から差し込む朝日のせいでは、自然と目が覚めてしまったとしか言いようがないが、それでも昨日の疲れは不思議と感じなかった。時計を見ると五時半。まだ起きるには少しばかり早い時間だ。

が、覚めてしまったものは仕方が無い。ヒロユキはルームウェアから制服に身ぐるみを変え、朝の空気を吸おうと外へ出ることにした。

ミッドチルダの朝は少しばかり早い。東の水平線からは間もなく太陽が顔を出すというところだった。ミッドチルダにも季節というものはあるが、せいぜい季節によって平均気温が変わる程度で、冬に雪が降ったりすることは無い。

それでも、深呼吸をすると、朝の冷たい空気と、海からの潮の香りが肺いっぱいになり込まれた。排気ガスと喧騒と騒音が渦巻く都会ではこうはいくまい。昔居たところも空気は良かった。しかし海を見たことはなかったなと、ヒロユキは今更ながら思います。

『お目覚めですか、マスター。おはようございます。昨日の疲れはとれましたか？』

ゼロが挨拶をしてきた。

「ああ、おかげさまでな。少しばかり早く目が覚めすぎちまって、やる事が無いんだがな」

ヒロユキは途中で眠気覚ましにと買っておいた缶コーヒーを飲む。暖かい缶コーヒーは、朝のウォーミングアップには結構な効果を發揮してくれた。身体がじわじわと温まる。

「それなら、少しばかり私のストレージ魔法を使ってみてはいかがですか？」

「今から？」

突然のゼロの提案にヒロユキはポカンとする。

「昨日の模擬戦で何とか使用できた『ショートバスター』が、偶然だとは言われたくないでしょうし、思いたくないでしょう？」

「……なるほど、ならやってみるか」

ゼロのいうことにも一理あったし、何よりその通りではあつてほしくなかった。

ヒロユキはそこから少し歩き、海岸に近い開けた丘に出る。

「ここでいいか……なら、行くぜ？」

メモリング・テクスチャ

『了解。システム・イヴォルヴ起動。記録術式解放。記録コードN R0002、術式名”デバインシューター”、発動します』

ヒロユキの指の先に水色の魔力弾が形成される。

「なるほど、コツとしては今までと変わらないな……昔は、戦いじやこれと似た感じでエネルギーをがむしやらにぶつけてただけだったが」

ヒロユキは内心で苦笑いした。

『マスター、そのまま魔力弾に意識を集中させ、動きを念じてください』

「わかった」

ヒロユキは目の前の魔力弾に視線を向け、それに向かって、動け

と頭の中で思考する。

途端、魔力弾が小さく縮み上がったかと思うと、ヒロユキが念じたとおりに上空へ勢い良く飛び上がった。

「右……左…直角、急降下、急上昇……」

魔力弾はヒロユキの命令どおりに急角度の動きを繰り返していく。それをやっているうち、ヒロユキの中にあることが浮かんた。

「……やってみるか」

ヒロユキは足元に置いておいた缶コーヒーの空缶を拾い上げ、上空に向けて勢いよく投げ上げる。

『もうターゲットを使うのですか？』

ゼロが少しばかり困惑気味に聞いてきたのを聞いて、ヒロユキは言い返す。

「動かない分、昨日の模擬戦よりは楽だろ」

ヒロユキは指と腕を上下左右に小刻みに動かす。魔力弾はその振った方向に振った通りの勢いで動き、カンカンとリズムカルな音を立てて、まるでバレーボールのトスのように上空で缶を弾き続ける。指と腕でやっているのは、感覚的なことに加えて目に見える形での動きも交えた方が分かりやすいと感じたからだ。

やってみると実際その通りで、魔力弾はよりシャープに鋭く俊敏に動き回る。

「よし……これはどうだ!!」

ヒロユキは空いた左手でもう一つ魔力弾を形成し、空に打ち上げる。ちょうど前の魔力弾が弾いた空缶が飛んできて、飛び上がった魔力弾がそこに命中し、飛んできた方向へ返っていく。

「よっ、と、ほっ……」

ヒロユキは魔力弾を操作し、空缶を、まるでバドミントンのよう

に上空で二つの魔力弾に打ち合いをさせる。

『なかなかですね、マスター』

「お褒めの言葉感謝するよ」

ヒロユキは上空の魔力弾と空缶から目を離さずに言った。片方の魔力弾がバレーのアタックのように上空から空缶を地面に向かって叩きつけるように打つ。もう片方の魔力弾はそこに先回りして、落ちてきた空缶を再び上空へ弾き返した。

「今だ！ ゼロ！！」

『了解。記録術式解放、記録コードF B 0 0 0 4、』フォトンランサー』発動』

「行け！」

ヒロユキが空へかざした手の先に鋭い魔力槍が現れた。同時にそれは『デイバインシューター』を超える猛烈なスピードで空気を切り裂き、打ち上がった空缶へ迫る。

上空で金属音がした。少しの間を置いて、空から落下してくるものがあつた。すんと地面に落ちたその空缶は、『フォトンランサー』の直撃を受けて、凹んでいた。

『上出来ですよ、マスター』

「そうか」

ヒロユキはどこがどういいのかは分からなかったもので、そうかただけ答える。気がつけば、太陽は水平線から顔を出きっていた。コントロールに夢中で、朝日が上っていても気が付いていなかったらしい。

「今日はこんなもんか」

そう言ってヒロユキは左手で缶を拾うと、右手で残っていた魔力弾を操作し、空缶を思い切り弾く。弾かれた空缶は弧を描き、そのまま広場の隅にあつたくずかごに収まる……かと思われたが、些か

強く打ち過ぎたのか、空缶はそのまま茂みの向こうへ消えてしまった。

「あいたツ！？」

消えたと同時に、茂みの向こうから短く叫び声が聞こえてきた。ヒロユキは一瞬呆気にとられたが、すぐさまその声の正体を確かめるべく、茂みをかきわけてその向こうを見た。

「いったあゝ……もお、誰？ 空缶投げたのゝ」

そこにいたのはスバル・ナカジマとティアナ・ランスターの二人だった。スバルは後頭部を手で押さえて涙目になっている。彼女の足元に今ヒロユキが弾き飛ばした空缶が転がっているのを見て、ヒロユキは慌てた。どうやら弾き飛ばした空缶が不運にもスバルの頭に落ちてしまったらしい。

「ごめん、それ俺だ」

「えっ！？」

なるべくナチュラルに、しかし成るだけ真面目に、ヒロユキは二人に声をかける。二人は驚いてヒロユキの方を見た。

「マジで悪い。誘導魔法の練習に使った空缶が弾き飛ばされちゃってな」

ヒロユキはスバルの足元の空缶を指差した。

「ええゝ……酷いですよお……」

スバルはしよげてしまった。今までのヒロユキの謝罪がまったく聞こえていなかったような落ち込みっぷりだ。というか、むしろ怒ってもいいはずなのだが、スバルには怒るという選択肢が浮かばなかったのであるうか。

「ちよつと、バカスバル、副隊長の前で隊員が情けない顔するんじ

やないの!!」

「痛あつ！ ティアまで殴ることないでしょ……」

「アンタが情けない顔してるからよ」

しかし、むしろ頭に空缶が直撃した後で頭を殴るのは泣き面に蜂ではないだろうか。というよりどう考えてもスバルには逆効果である。

「……ティアナ、今は殴る必要はなかったと思うが」

「えっ!？」

「お前、スバルの傷口に塩を塗る気か？ 色々な意味で」

「あつ……」

そこまで言われてティアナは、最初よりも余計に凹んでいるスバルにやつと気がついた。

「ご、ゴメン、スバル……痛かった？」

「む、痛いから痛いって言ったんじゃない！」

「まったく、飯にもお前らチームメイトなんだろ？ 互いが互いを見てねえって、チームワークとして問題だぞ」

「う……」

うなだれるティアナをスバルが必死にフォローする。

「あ、だ、大丈夫です、いつもティアはこうですから」

「いや……それあんまりフォローになってないぞ、スバル」

どう考えても、いつもこうだとスバルが言ったことは、ティアナのぶつきらぼうさを逆に証明することになってしまった。しかもスバルは悪意が無いから余計にタチが悪い。

「あわわ……そういう意味で言ったんじゃないからね、ティア!？」

「うつ、どーせ私は乱暴ですよ」

完全にいじけてしまったティアナに、スバルは必死で弁解する。
なんだか妙なことになる。被害者はスバルのはずなのに、なぜ結局ティアナが落ち込んでいるのだろうか。

「まあ、それはそうと、二人は朝っぱらから何してるんだ？」

ヒロユキは空気を変えるべく、気になっていた話題を持ち出す。

「副隊長と同じ目的です」

「つまり、二人も俺と同じく朝練をやったってことか？」

「はい！」

二人は揃って元気に返事をした。まるで健康生活を行動で表現したような爽やかさに、ヒロユキは感心させられてしまった。

「よくそこまでやるな」

「これくらいしないと、前線じゃやっていけませんし、何より強くなれませんから」

ティアナは真剣な顔で言っただけ。

「若人が感心なことだな。前にいた世界じゃこんなこともなかったし、ま、当たり前か」

「高岡副隊長の前いた世界って、こういうことはしないんですか？」
スバルはこれが普通じゃないのかと言いたげな顔で聞いてくる。

「ああ……そもそも俺のいた世界じゃ『魔法』っていう概念そのものがほとんど無いに等しいからな」

「へえ……魔法が無い世界ってあるんですね」

「まあな……というよりは、呼び方が違うだけさ。こっちでの『魔導師』は、向こうじゃ『超能力者』と言われるんだ」

「超能力者……ですか？」

「ああ、読んで字のごとく、普通の人間を超えた力を持つ者……ってことさ」

「へえ……」

「魔導師と超能力者ってのは、区分的にはほとんど同じなんだが、実際には結構違うんだ」

「どう違うんですか？」

スバルもティアナも興味がわいてきたらしい。

「そうだな……じゃあ試しに、その空缶を、手を触れずに、道具

を使わずに動かしてみろと言われたらどうする？」

ヒロユキは転がっている空缶を指差す。もちろんそれはヒロユキが弾き飛ばし、スバルの頭に落ちた空缶である。

「えっと……こうですか？」

ティアナは手をかざして小振りな魔力弾を作り、それを缶めがけて打ち出す。缶は弾き飛ばされ、数メートル向こうに飛んで落ちた。

「そうだな、魔導師ならそうするだろう。だが、超能力者はこうだ」

ヒロユキが向こうに転がる空缶に手をかざすと、空缶はふわふわと宙に漂い始める。

「ええ！？」

「ど、どうなってるの！？」

目を丸くしてそれを凝視する二人をよそに、ヒロユキはひよいひよいと空缶を念力で動かす。まるでアクロバットする猛禽類のように空缶は宙を舞った。

「やうに……」

ヒロユキがクイツと手を握ると、パカッという音とともに、空缶が曲がり、潰れる。そのまま空缶はポツと地面に落下した。

「わかったか？ 魔力エネルギーを撃ち出して物をどうこうする魔法とは違って、超能力者は体内の潜在エネルギーを外に出さなくても、こういったことができるのさ」

超能力者と魔導師の根本的な違いは、潜在エネルギーが目に見え

るか見えないかである。魔導師は「リンカーコア」という、目に見える形で魔力エネルギーが体内に蓄積されているのであるが、超能力者の場合、そのエネルギーは筋電流が元になっているため、目に見えないのである。このエネルギーを、神経で活性化させれば神経電流で電撃に、脳で活性化させれば脳波で念力に、筋肉で活性化させれば熱で炎に、発汗器官で活性化させれば冷却熱で冷気になるのである。もっとも、これも仮説の一つに過ぎず、現在最も有力であるからここに例として挙げただけであることを注釈しておこう。

「ふええ、便利ですね」

スバルは感心したように言った。

「便利って言っても、普段はこういう力を使って物事をやる時はあんまりないんだよ、その方が疲れるからな」

ヒロユキは苦い顔で言った。それもまた事実であつたからだ。

「ま、とにかく、世界にはその世界の概念つてのがあるのさ、自分がいる世界の『当たり前』が、別の世界でもそうとは限らないんだよ」

「へえ、勉強になりました」

スバルは何やら達成感のある顔だ。ヒロユキにとっては当たり前のことでも、スバルにとっては大きな発見なのだろう。どこまで精神年齢が幼いのかと、一瞬気になりはしたが。

「っと、もう7時か」

ヒロユキは腕時計を見て気がつく。

「え、もうそんな時間なんですか？」

ティアナとスバルはもう少し練習を続けるつもりだったのか、その気になっていたらしく、若干不満そうな顔になる。

「まあ、朝からあまり練習していても、それで疲れて後の訓練が疎

かになつちや意味が無いからな、何事も適切な量つてのを見極めた方がいい」

「は〜い……」

二人は渋々といった感じで返事をする。特にティアナが不満そうだった。

「朝食食えば、少しはましになるさ」

「えっ、ホントですか!？」

『朝食』という言葉でスバルの顔が一瞬で明るくなる。単純ということか、ヒロユキは困惑せざるを得なかった。

「朝食つてのは大事だぞ？ 食わないと頭も冴えないし運動エネルギーも満たせないからな。それじゃ俺は先に行くぞ？ 二人はとりあえず汗を流してきた方がいいだろう」

「わかりました」

ヒロユキは二人と別れ、一人食堂に向かう。中庭に面した廊下は日が差し込み、少しずつ暖かくなってきていた。

食堂に着いてみると、先客はおらず、今日はヒロユキが一番乗りだった。食堂の給仕係はもう厨房で湯気を被りながら準備をしている。隅の壁に掛けられた液晶は、ミッドチルダの朝のニュースを伝えていた。

注文した焼魚定食を受け取り、ヒロユキは液晶が見える位置のテーブルに着席する。昨日悪質な魔法トラブルが町中で二件発生していたというニュースを聞きながら、ヒロユキは味噌汁を啜った。

「おつはようございま〜……って、なんだ、今日はもう先客がいたのですか」

後ろから声がする。振り返ってみるが、姿が見えない。

「ここここ、ここですよ〜」

今度は前から声がした。ヒロユキが顔を戻すと、目の前には身長30センチに満たない小さな女の子がふわふわ浮いていた。

「……………」

ヒロユキは言葉に詰まった。どう反応したものか。見て驚いたのは事実だったが、ミッドチルダでは何でもありなことを思いだし、どうしてもよくなってしまうたからだ。

「え、ええと……聞こえてるですか？」

「ああ、しっかり聞こえてる」

「ならなんで無視したですか！」

その妖精のような少女は怒ってくるが、見た目が小さいので小学生が怒っているより迫力が無い。むしろ可愛いという人間がいてもおかしくないほどだ。

「いや、どう反応していいか迷ってな。とりあえず、お前は？」

「リインフォース？^{ツヴァイ}曹長です！ 高岡一佐さんですね？」

「リインフォース？」

ヒロユキは疑問に思った。リインフォースというのははやての使っているデバイスの名前だ。いくらなんでもインテリジェントデバイスがここまで自律的に動けるはずはないし、それ以前にこんな姿になるなど聞いたこともない。

「ああ、リインははやてのデバイスの一部なんですよ」

「デバイスの一部？」

「はい、実はですね——」

それからリインフォース？なる妖精のような少女は自らの生い立ちを語った。

時は二年前、なのは、フェイト、はやての三人が時空管理局に入学したときまで遡る。

当時、デバイスの代わりともいえる『杖』を使って超能力を行使

することができていた三人は、クロノの判断によりデバイスが必要ないと判断された。しかし、それではデバイスとして、あるいは魔導師として、管理局のデータベースに登録ができないという問題が発生したのだ。

そのときの解決策として行われたのは、彼女たちの『杖』、すなわち『超能力のエネルギーの欠片』を、新しく用意したデバイスの基盤に固定し、元の『杖』の能力を引き継いだ『デバイス』とすることだった。

こうして「レイジングハート」と「バルディッシュ」はデバイスとして日の目を見た。

しかし、「リインフォース」だけは違った。

三人の『杖』は、それぞれ精神的な苦しみから偶然に生まれたものだ。超能力を持ったことによる精神的な辛さ。彼女たちの下意識は、無自覚のうちに超能力の根源となるエネルギーそのものを身体から分離させることで、彼女たちを少しでも救おうとした。これは時折超能力が見せる、あたかも感情を持ったような不思議な現象だ。三本の杖はそこから生まれた。持ち主の苦しみを、そのまま力に変えて。

だが、はやてのリインフォースだけは事情が違っていた。

施設にいたところに麻痺障害を抱えていたはやては、自らの超能力

に対する苦しみに加え、思うように動かすことのできない足の辛さも抱え込んでいた。そして、苦しみが杖の形となった時、その杖は心の苦しみばかりか、身体の苦しみすらも抱えて生まれたのだったのだ。

心と身体、二重の苦しみを力に変えて生まれてきた「リインフォース」は、あまりにその力が強すぎた。なのはやフェイトに施したものと同じデバイス基盤の強さでは基盤そのものが耐えられなかったのだ。

そこで、技術部とはやてが共同で講じた策が、「リインフォース」の持つ力を『精神的な辛さから生まれた力』と『身体的な辛さから生まれた力』の二つに分け、力を弱めて一方だけをデバイス基盤に固定し、残ったもう半分を、ユニゾンデバイスとして新たなデバイスに作り直す、というものだった。

ユニゾンデバイスという選択になったのは、力を分割しても、ユニゾンデバイスならばあたかも一つのデバイスであるかのように元の感覚で力を使えるという理由、そしてはやてが、自らの力に愛着を持っていたことも影響した。

ちなみにユニゾンデバイスというのは、魔導師が『持つて使う』のではなく『融合する』ことで力を発揮できるタイプのデバイスのことだ。ユニゾンデバイスは術者との相性、すなわち融合率が重要視されるため、ただの機械的なデバイスのままでは融合率が今ひとつとなる。そのため、ユニゾンデバイスとなったデバイスは、人間に近い知能と、デバイスサイズに対応した基盤、すなわち人間の見た目を与えられ、あたかも一人の人間であるかのような存在となるのである。

リインの場合、この妖精のようなサイズが最も融合に適していたためこのようになったのであるが、ユニゾンデバイスが皆こうというわけでもない。大きさは、術者のことを知るデバイス自身が考え

て決めることであり、全てが同じではないのである。

そして、『心の苦しみ』の力』は、騎士十字をかたどった「騎士杖シユベルクロイツ」を形とする『リインフォース』となつてはやての元にとどまり、『身体の苦しみ』の力』が『リインフォース？』となつて、新たな機動六課の隊員となつたのである。心配されていた力の使用にも、以前と同じように何ら制約も引つかかりもなく、離れていても同様に力を使用できることが確かめられ、ようやく「リインフォース」はデバイスとしてこの世界に降り立ったのだつた。

「なるほど……じゃあ結局、お前もはやてから生まれた『力』ってことか」

「そういうことです。はやての気持ちは、私だつて手に取るように分かるですよ」

『なかむつまじいことですね』

「ふえ？」

リインは声の主が分からず、きょとんとした。ゼロはどうしてこゝ突然話に割り込んできて相手を驚かすのが好きなのだろうか。

「趣味が悪いぞ、ゼロ」

『……これは失礼しました。それと、申し遅れましたね、リインフォース、彼のデバイスのゼロと申します』

ヒロユキがゼロの行動をたしなめると、ゼロはさすがに悪いと思つたのか、慌てて態度を改める。いつもながら人間臭いデバイスだとヒロユキは思つた。

「悪い、俺のデバイスが迷惑をかけたな」

「いえ、お互いまだ初対面ですから仕方ないですよ」

なんともポジティブだ。しかし、これでデバイスと言われても、

簡単には信じられないだろう。

「まあ、とにかくにも、これからよろしくな？」

「はいっ、よろしく頼むですよ」

差し出したヒロユキの手の人差し指を、リインは両手で握って、「握手」をした。ヒロユキは戸惑ったが、サイズが違うのだから仕方が無い。

「あ、おいこら、人の朝飯を勝手につまみ食いするな！」

気がつくと、リインが勝手にヒロユキの前にあつた茶碗に手を伸ばし、米粒を二つ三つ掴み取って口に運んでいた。

「えゝ、いいじゃないですかゝ、些細な量ですよ」

「いや、それはそうだが……」

たかがご飯粒を数粒かすめ取られたところで満腹感が変わるわけでは到底ない。勝手に盗み食いされたという部分でまだ煮え切らないところはあつたが、ヒロユキは放っておくことにした。こいつはいつもこういう飯の食い方をしているのかと、ヒロユキは気になってしまう。

「あ、ザファイラさんです！！ おはようですよ」

つまみ食いを続けていたリインが、突然机から飛び上がって俺の後ろに向かい手を振った。振り返ってみると、筋骨隆々なくましい男がそこにいた。精悍な顔つきと、その屈強な体つきは目立っていたが、それ以前にかなりヒロユキは気になった点があつた。

「獣……！？」

ヒロユキは小さく呟いた。男の頭からは、まるで動物のような耳が生えていたからだ。そして、その後ろには、獣の尻尾までが生えていた。

「お前は……？ 見かけん顔だが」

ヒロユキに気がつき、男は訝しげな顔でこちらに近づいてきた。

「あ、ザフィーラさんにはまだ紹介してなかったですね。こちら高岡ヒロユキさんです。今度この小隊の副隊長として本局から来たそうですよ」

ヒロユキの代わりにリインが大まかに紹介をしてくれる。

「失礼いたしました。私はザフィーラ、機動六課の守護を任された者です」

「守護……すると、お前がシグナム達の言っていたもう一人の『守護騎士』か？」

「左様でございます」

「そうか。守護騎士であれお前もこのメンバーだ、気軽に接してくれて構わない。いちいち若い人間に敬語を使うのもやりにくいだろっ？」

「……心遣い感謝する」

ザフィーラは一瞬口をつぐんだが、すぐに元の口調に戻る。

「その見た目……お前、獣人か？」

「ああ、そうだ」

「管理局にいた時に少し話は聞いたよ。魔導師が作り出した、獣の力と人間の知能を併せ持った存在……ってな」

「管理局……」

ザフィーラはその説明を聞いて難しい顔をした。

「まあ、教え文句だけ聞けばあたかも気味が悪いような言い方を取れてもおかしくはない。だが、生憎と、俺は自分で見て聞いて触れたものしか信じないタチなんでな、お前の姿を見て安心した」

「……随分と現実主義なのだな」

「ああ。昔から過去も未来も見er暇が無かったら、こうもなるよ」
ヒロユキは自嘲気味に笑った。

「それにしても、ザフィーラさん、珍しいですね、人型でいるなんて」

リインが不思議そうにザフィーラを見る。

「なに、たまには人間の食事を食いたくなっただけだ。いつも同じものばかりでは飽きるし、何より力も出んからな」

ザフィーラはカウンターでヒロユキと同じ料理を受け取り、少し離れた席に座った。

「珍しいって、いつもはあじやないのか？ リイン」

気になったヒロユキはそのことをリインに聞いた。

「あ、はい。いつもは狼の姿なんです、ザフィーラさんは。六課に来てから一年ほどたちますけど、未だに数えるほどしかあの姿を見たことが無くて……」

リインは困惑したように答えた。獣の姿の方が活動がしやすいのであろうか。あるいは戦闘でも変わりはないのか。疑問が尽きなかったが、それはそのうち戦いの中で分かるであろうと、ヒロユキは勝手に決め付け、そのまま朝食をとり続けた。

そのあと、隊長陣やフォワードのメンバーも食堂にやってきたが、皆が一樣にザフィーラの姿を珍しがっていたのを見て、ヒロユキはそのレアさをよく理解したのであった。

「それにしても、犯罪のニュースばかりだな」

ヒロユキはテレビで朝のニュースを見ながらぼそつと言った。

「まあなあ……最近どっから流れて来とるんか、不法な次元ツールを使った次元渡航者が増えとってな、管理局でも手を焼いとるらしいんよ」

はやてはため息混じりに答える。

「なるほど、一種の麻薬取引みたいなもんか」

「そういうことやな。組織的やないけど、人から人の手へ次々渡つて瞬く間に広がっていくいうんは麻薬と変わらへん」

「一度世の中に流れはじめたら完全に消し去ることは難しいんだよね……魔法の技術が進歩しても」

フェイトは納得がいかないというような顔をする。

「厄介なことだな……」

ヒロユキはやってられんと言いたげに茶を啜る。緑茶の味が、いつもよりヒロユキには苦く感じられた。

「まあ、そんな時はそんな時だ、今は俺たちもやるべきことをやるしかないんだ」

「そうやな……先のことばかり考えてても何にもならへん、今は目先のことに集中せな」

はやても同意し、横のなのはとフェイトも頷いた。

『オーライオーライ、もう少し入れますよ』

シャリオは通信でヒロユキに合図を送る。

ヒロユキは六課のヘリ用ドックに『ガンダム』を格納する作業をしていた。格納できるとは言っても、広さこそ『ガンダム』を余裕

でしまえるが、それは奥行きだけの話で、入口はヘリコプターサイズのために、高さが十数メートルもある『ガンダム』はドックに仰向けで入らなければならないのだ。

地面から小刻みなブーストにより数メートル浮遊した状態で、各部のバーニアを操作し、ゆっくりと格納庫に脚から入り込んでいく『ガンダム』。出撃するときはこれと逆の操作で出撃することになった。普通に出るなら外に置いておくのが手っ取り早いし簡単なのだが、それだと防犯上の理由でどうなるかわかったものではない。そうである以上このしまい方をするしかなかったのだ。

『『ガンダム』格納庫内に入庫完了しました、マウントラック、上げます』

シャリオが言うと同時に、下の床がせり上がって『ガンダム』を支える。床に直接置くと凹んだりしてヘリの安定に支障をきたす恐れがあったので、地面に接地しない状態で格納することにしたのである。

軽い衝撃とともに、マウントラックが『ガンダム』に接触し、その巨体を地面から一段上がった状態で寝かせる。まるでベッドだ。

『格納完了しました、お疲れ様です』

「ああ、協力感謝するよ」

ヒロユキはシャリオに礼を言ってメインスイッチを切る。ツインアイの輝きがゆっくりと消えていった。

「お疲れさまでした」

通信室から出てきたシャリオが同じことをもう一度言ってくる。

「こつちこそ、くだらない野暮用に付き合わせちまって悪いな」

「いえ、むしろ歓迎です！」

シャリオの目がキラキラしている。恐らくは未知のメカを見ながら作業できること自体が彼女にとっては至福なのであろう。ヒロユ

キは苦笑いしかできなかった。

「しかし、随分とすごいメカを任されたんですね、高岡さんも」

「まあな……大層なとは言っても、実際まだ未知の部分がほとんどのメカなんだ、ロストログアの一種だから仕方ないと言えば仕方ないんだが、下手に手を加えて使いものにならなくなっちまったら洒落にならないしな、一応お前もさわりだけくらいは知っておいた方がいいぞ」

「は、はいっ！！ 頑張りますっ！！」

ハッスルしながら、シャリオは何故か敬礼をしてみせた。意気込みはいいが、空回りしないかとヒロユキは少し心配になったりもした。

「あ、ここにいた！ ヒロユキー！」

そこへフェイトが走ってきた。かなり急いできたのか息が上がっている。

「どうした？ 俺に用事か？」

「う、うん、用事があるのはなのはとはやてもなんだけど……と、とにかく来て」

「え、おい、ちょっとフェイト！？」

そう言うとフェイトはそのままヒロユキを引っ張って格納庫から連れ出した。ヒロユキの戸惑った声も耳に入っていたか怪しかった。

ヒロユキはそのまま状況理解もままならない状態で隊長室に連れ込まれた。するとそこにはなのはとフェイトだけではなく、シグナムとヴィータまでがいたのだ。副隊長までが招集されるということは重要な伝達事項があることが分らないほどヒロユキもバカではない。

「……なにか重大なミッションでも任されたか、隊長さん？」

ヒロユキは張りつめた空気に物怖じすら見せず、淡々と聞いた。

「ヒロユキも来たことやし、ほんなら改めて伝えるわ」
「……………」

「実は先ほど管理局本部から連絡があつたんやけど、管理局の通信施設に、今朝がた、発信元不明の謎の救難信号が飛び込んだきたんや」

「救難信号？」

ヒロユキは怪訝な顔になる。

「せや。救難信号なんてこの平和なミッドチルダの世界では使われてへんのや。つまり、私たちの見解としては——」

「ミッドチルダじゃない、どこか別の管理世界、あるいは管理外世界から発信されたと考えるのが妥当だ、というわけか？」

五人の難しい顔の内側にあつた考察をヒロユキは理解した。五人が揃って小さく頷く。

「その信号を逆探知することはできなかったのか？」

「それが、向こうからメッセージを一方的に送るようになってないみたいで……」

フェイトは困つたような顔をする。悔しさが少しだけ顔ににじみ出ていた。

「それじゃなんで救難信号だつて分かつたんだ？」

ヒロユキは疑問に思った。向こうから一方的に送られてくるだけの信号なら、単に微小次元震による電波混乱の影響で、という可能性も考えられなくはなかったからだ。

「問題はそこなんや。あの後、信号を解析してみたんやけど、信号

の発信パターンが管理局に記録されとるどの波長にも言語にも当てはまらんかったんや。つまり、これは相手に内容を知られないように極端に暗号化された信号としか考えられへん」

「内容が分かんねえんじや助けに行きようが無いじゃねえか」

ヴィータは唇を噛んだ。その横のシグナムも同じだ。

「……………」

ヒロユキは少し考えてから、はやてに言った。

「はやて、その信号の記録を管理局から取り寄せてくれないか？

それと、無限書庫に連絡を取ってくれ」

ヒロユキはそれだけ口早に言っと、そのまま隊長室を駆けだして階下へ向かった。

無限書庫からいくつかの管理外世界で使われている通信技術に関する資料を取り寄せ、ヒロユキは資料とにらめっこを始めた。

無限書庫の資料に記録されている信号の図式と、資料に記録された波長のパターンを一つ一つ照らし合わせていく気の遠くなるような作業だ。食堂の夕食も早々に端末室に持ち込み、無表情で機械的な作業を黙々とヒロユキは続ける。

珍しくデスクに向かいっきりのヒロユキを見かねた隊長や副隊長、フォワードのメンバーが手伝い始めても、一向に分からない。

そうして時は瞬く間に過ぎ、夜になった。

「あうう、も〜だめ……」

頭を使う作業の苦手なスバルが真っ先にリタイアした。ティアナが咎めていたが、疲れは隠せていなかったのは同じだった。

「もうみんな疲れとるんやし、作業は明日に持ち越してもええんぢやう？ ヒロユキ明日フォワードと模擬戦やる予定なんやろ？」

「ああ、その予定だ。とりあえずフォワードはもう休んでおけ、後は俺たちでできるところまでやっとく」

「はい、お手数かけます」……」

スバルはティアナにもたれかかるようにして寝室棟に向かっていった。

「それじゃあ、後お願いします」

エリオとキャラはぺこりとお礼をすると丁寧にドアを閉めて出て行った。

「随分と年下の方がしつかりしてるじゃねえか、おい」

どう見てもしつかりするべき立場が逆だろうと突っ込まざるを得なかったヒロユキに、フェイトは苦笑しながら答えた。

「あはは、まああの子たちは昔から人との関わりがあんまりなかったから、どうしても他人行儀になっちゃうのは仕方ないよ」

「人との関わり？」

「うん……実は、エリオもキャラも、管理局の施設に保護されてた孤児なんだ」

「……………!!」

その言葉を聞いて、ヒロユキの表情がわずかに歪んだ。

「そうか……どこの世界にもいるんだな、俺たちと同じような人間が」

「そうだね……でも、それを守るのも、私たちの仕事だもの……目を背けるわけにもいかないんだ」

フェイトは静かな決意を込めた目で言った。その言葉には、恐怖めいた感情は一欠片も見当たらなかった。

それきり言葉を交わすことなく、作業は夜が更けても続いた。

……………

「……ん……ん……？」

闇に染まっていた意識が急に白く塗りつぶされ、俺は目を覚ました。部屋はまだ明かりがついたままだった。どうやらいつの間にか作業していて眠ってしまっただけらしい。

「……………ん？」

椅子から立ち上がろうとして、ふと、自分の体に毛布がかけられていることに気がついた。そして、目の前にあった自分の作業していた書類が無くなっていることにも気がつく。誰かと聞かれれば、思い当たる人間は――。

「随分と疲れたんだな……………」

目の前で仲良く机にうずくまって寝息を立てている三人を見て、俺は思わず微笑んでいた。三人の目の前には、それぞれ割り当てられた一人分の仕事がつっちり終わらせて置いてあった。無くなっていた俺の分の書類もそこにあった。しっかり検証済みの印まである。

俺は三人を起こさないよう静かに部屋を出て、隣のリネン室から毛布をもう二枚持ってきた。それをそつとなのはとフェイトの肩にかけてやる。はやてには俺が被っていた毛布をかけておいた。

「……………ん……………ヒロ……………ユキ……………」

はやてが寝言を言いながらもぞもぞ動き、また寝息を立て始める。隊長としてもうちよつと気張っていた方がいいと言われそうだが、はやてはこのくらいでちょうどいい。何しろ、頼もしいパートナーの二人がこうなんだから。

「明日は少しくらい楽させてやるかな」

俺はそんなことを考えながら、端末室の照明を一段階落とし、薄暗くしてから、そろそろと抜き足で部屋を後にした。

部屋のベッドに寝転がると、疲れが一気にまとめて襲ってきて、俺はすぐに眠りに落ちた。椅子で数時間そこら寝たところで疲れが取れるはずもないのだから当たり前だ。そんなことを考える由もなく、すぐに朝はやってきた。

結局俺は、本来想定していた起床時間を二時間も通り越し、目が覚めたのは八時だったということだけを付け加えておく。

.....

「しかし、地味な作業やなあ」

作業しながら、私、八神はやては愚痴をこぼさずにはおれへんかった。一人では明らかに非効率に見える仕事をものも言わず淡々とやるヒロユキを見かねて手伝いを始めたまでは良かったんやけど、しかしながら、いざやってみれば退屈でしかも疲れる作業なことこの上あらへんかった。

「まあ、そう言わないの、はやてちゃん。一刻も早く謎を突き止めないといけないと思ってるのはみんな同じなんだから」

「そうだぞ、それに本来だったら隊長のお前が率先してこういう仕事をやるべきなんだぞ」

「んなこと言うたかて、雑用やるのは六課のイメージに合わへんて言うか……」

もつともなことをヒロユキに言われ、私は思わず口ごもってしまった。

「雑用やるのも仕事のうちだ。イメージだけでやってけるほど仕事ってのは甘くねえぞ」

「う……」

私はむくれとったけど、意地でも手だけは動かし続けとった。そうせんとヒロユキにいろいろ言われてまう気がしたからや。

「せやけど、ヒロユキも無茶するなあ。人の頭で考えてこの暗号を解くんやなんて、私やつたら思いついても絶対やりたくあらへんに」

「管理局の機械で分らない以上、俺たちの頭でやるしかないんだよ。機械は言われたことを素早くやるのは得意だが、新しいことを考えるというのは出来ない相談だからな」

ヒロユキの言い方はまるで管理局の機械が信用あらへんとも言いたげやった。昔から信じるより疑うことの方が多かった彼にしてみたら、こういう表立った大きな組織を真っ向から信じる方がおかしいのかもしれへんけど。

「これをここにこうしたら、こつちの韻がここになるから……ダメや、これも意味が通らへん」

当てはまらなかつた資料をまた一枚机の隅に積み上げる。さつきから何種類の言語文字をこの暗号に当てはめてきたんやるか。あかん、もう肩がバキバキや。

「そつちはどや？」

「こつちも……あてはまるのではないよ」

「私も……っていうか、もうそろそろ疲れてきたんだけど……」

「やつぱせやな……ヒロユキ、もういい加減やめにせん——」

そこまで言うて、私は続きの言葉を飲み込んでもうた。というか、飲み込まざるを得へんかった。

「あんだけガツガツやつとったら、そうなるて……」

そう言いながらも、私は思わず笑とった。

いつの間にか、ヒロユキは寝てしもとった。目の前に、まだ調べない書類が十数枚ほど残ったまま。

起こそうかと思たけど、あまりに気持ちよさそうに寝てたからやめにした。それに、起こしてまた苦勞かけるんも、なんか申し訳ない氣もしたしな。

隣のリネン室から毛布を取ってきて、そつと肩に掛けといた。

「さ、ヒロユキの分も、私らが頑張るで」

ヒロユキを起こさないように、私は小声で二人に呼び掛けた。

「ふふ、はやてちゃんたら、さっきので躍起になっちゃった？」

「まあ、隊長が率先してやれって言われちゃったら、やらないわけにいかないしね」

「あゝ、二人とも他人事や思とるな？ よっしゃ、ほな私が一番先に全部終わらせたるで！」

私はそつ意氣込んでまた手を動かし始めた。

それから時間がしばらくたって、ようやく最後の一枚が確認し終わった。もちろん、それもピンとくるパターンやなかったけど。

「はあ…… やつと終わったわ」

そう言つて私は机に突つ伏した。そうしたと同時にあくびが出て、どつと疲れが押し寄せてきてもうた。あかん、瞼が持ちこたえられへん。

なのはちゃんとフェイトちゃんの作業が終わったんかどうか確認せえへんまま、私は睡魔に心奪われてもうた。

「……んん……ここは……」

なんや知らんけど、深海に沈んどった意識が一氣に白い砂浜の海へ引き上げられた感じで、私は目を覺ました。見るとそこは自分の部屋やのうて、端末室やった。

「私……」

まだぼーつとする頭の中から、何とか寝る前の記憶を掘り返そうとする。そこまで考えて、私はあることに気がついた。

「あれ……何で毛布が……」

しかも、部屋の照明が一段階落とされとって、結構薄暗くなった。それで今まで目が覚めへんかったんやろか。見ると、なのはちゃんとフェイトちゃんも同じ状態で、毛布を被ってまだすやすや眠った。机の上の卓上時計を見ると、午前二時過ぎだった。作業を始めたのは九時ごろやったけど、意識が途切れたんはいつごろか分からんまんまやった。

そこまで状況を理解したところで、ようやく私は思い出す。私らはヒロユキの資料調査の手伝いを始めて、しばらくたったところでヒロユキが眠ってしまい、後の仕事を三人だけでやって、終わったところで疲れに負けて眠りに落ちてしまったことを。

ふと見ると、そこに彼の姿はあらへんかった。考えてもみれば、私らに毛布が掛けられとる時点で、それをやったんはヒロユキ一人しかおらんのは分かりきったことやった。自分がやったことを、結局最後は彼にされ逃げされてもった。

「……またやられてもったな」

私は内心苦笑しながら、なのはちゃんとフェイトちゃんを起こしにかかった。変な寝方しとったせいで、なんや体中が痛かったけど、ちよっぴり心だけは気分が良くて気にはならへんかった。

.....

その朝の食堂には、神妙な面持ちで朝食を機械的に口に運ぶヒロユキの姿があった。

結局解けずじまいに終わった昨日のことがまだ記憶から抜けず、ヒロユキはやや煮え切らないという気持ちで一杯だったが、しかし、今日は別の仕事に取り組まなければならない。

何あるう、フォワードとの模擬戦である。

先にいたシグナム達に聞いてみても、どうやらなのはたちはまだ起きていないらしかった。いつもよりかなり遅く起きた方であるヒロユキであったが、今朝に限ってはなのはたちの方がそれに輪をかけて寝坊していた。やはり昨日の重労働が影響したのかと思わずにはいられなかったヒロユキであった。

気を取り直し、ヒロユキは訓練施設に向かうが、心なしかその足取りは昨日より重かった。まだ疲れが抜けきっていない気がしたが、それくらいのことと訓練に影響は出るまいと高を括って、ヒロユキは模擬戦に参加することにしたのであった。

むしろ、この程度でフォワードに負けるようであれば、副隊長をやっつけていけるか怪しいのだ。状況的にも、退くわけにはいかなかった。

目的の場所に来てみると、すでに誰かが始めているらしく音がす

る。見ると、フォワードの四人が、ガジェットを相手にフォーメーションの練習をしていた。ガジェットは初日にシャリオから立体体感映像で出せると聞いていたが、改めてみるとほとんど本物に近かった。そうして、本物のような動きをするその仮想敵を、四人は決して鮮やかとはいえないチームワークながらもそれを一つ一つ破壊していく。破壊される時の爆煙まで本物さながらであった。

「あつ、高岡副部長……!!」

仮想敵をすべて叩きつぶし、一息ついたスバルがヒロユキに気がついて真っ先に近づいてくる。足元に、布をふわつと広げたような道を展開してそこをローラーブレードで滑りながらである。その後を、その道を走って他の三人が続く。

「お待ちしてました!!」

光の道から飛び降り、スバルはヒロユキの目の前に着地する。

「悪いな、わざわざ予定を変えさせちゃって」

「い、いえ、こちらこそ、副隊長クラスの方と模擬戦なんて光栄です!!」

後から追いついたティアナが敬礼しながら恐れ入って言う。

「それは何よりだな……一応改めて自己紹介しておく、高岡ヒロユキだ。それと、皆は初対面だと思うが、俺のデバイスのゼロだ」

『初めまして、フォワードの皆さん。ゼロと申します。貴女方とそのデバイスと一戦交えられるとは、光栄です』

「ふえー、これが副隊長のデバイスなんですか……」

四人はそろってヒロユキの胸のピンバッジをマジマジと見る。

「見たところ四人とも自身のデバイスを持ってるみたいだが、紹介してくれないか？」

「あ、はい、スターズ分隊、アタッカーのスバル・ナカジマです！」

！ それとデバイスの『マツハキヤリバー』といいます」

「どうやら足のローラーブレードがデバイスらしい。」

「右手のやつは？」

「これはリボルバーナックルって言いまして、一種の格闘補助器具みたいなもんです」

「なるほど…… 魔力補助器具か」

ヒロユキは小さく頷いた。

「改めまして、スターズ分隊、バックアップガーダーのティアナ・ランスターです。それと、デバイスのクロスミラーージュです」

「クロスミラーージュ…… 確か『屋気楼』って意味だとどつかで聞いたが……」

「ええ、まあ連想できるとおり、一応私幻術魔法も使えるんです」

「ほう、随分とレアだな、最近使い手が少ないとか聞いたが」

「まあ、それほどでも」

ヒロユキは感心したが、ティアナは謙遜した。

「ライティング分隊、アタッカーのエリオ・モンディアルです、それと、デバイスのストラード」

「なんか、随分とスタイルがフェイトに似てるな」

「はい、一応、僕もフェイトさんと同じで、魔力変換資質が電気なんです」

「なるほど、それでお前も格闘型デバイスの使い手ってわけか」

ヒロユキは納得した。子供は親の背中から全てを学ぶとかよく言うが、こういうことを言うのかと目で見てよく理解できた。

「ライトニング分隊、サポートのキャロ・ル・ルシエです。それと、デバイスのケリユケイオンです」

「珍しいな、ブーストデバイスの使い手か？」

「は、私の本分は竜召喚なので……」

キャロは右手にはめられたハントカバーのようなデバイスを見せる。

「竜が好きなんだな」

「はい！ 家族と同じくらいに」

そう聞かれて答えるキャロの顔は、何故か少しだけ輝いていたようにヒロユキには見えた。

「なんだ、もう来ていたのか」

振り返ると、シグナムとヴィータがいた。すでにバリアジャケット姿である。

「ああ、いつでもできるぜ」

ヒロユキがそう言ったが、そこで横から質問が飛んできた。

「あの、一つ質問してもいいですか？」

「なんだスバル？」

「高岡副部隊長って、バリアジャケット着用しないんですか？」

「あ、それアタシも聞きたかった」

ヴィータが同意してくる。一応この間の模擬戦に立ち会っていた身としては当然だろう。

「ああ、それ言ってなかったな。俺の場合、言ってみればデバイスがバリアジャケットの代わりなんだ」

「へ？」

全員がポカンとする。

「分かりやすく言えば、俺のゼロには使用者の身体の表面に薄型のアンチマジックフィールドAMFを展開することができるんだ。管理局の開発した新技術らしいが、なんでもこれでバリアジャケットをもっと強化できるんじゃないかって今技術部が大忙しなんだ」

AMFとは、魔力砲撃を散らして威力を相殺できるバリアのようなもので、ガジェットの一部などが装備している武装だ。これがあると、魔力エネルギーによるダメージを軽減できる。無論、格闘攻撃や、魔力攻撃そのものの衝撃までは消せないのが弱点といえば弱点だが。

「へえ」

四人がまたゼロを興味津々に見つめる。

「まあ、対魔導師用のバリアジャケットもあるにはあるんだが、模擬戦はそこまで気張ることもない、これだけで十分さ」

「では、始めるか、高岡。ルールはどうする？」

「そうだな……いきなりやり合うのもいいが、まずは実力を見たい。四人は俺をめいいっぱい攻撃しまくってくれ」

「ええ!？」

それを聞いて四人が驚く。だがシグナムとヴィータは驚かない。それもそのはずである。実際に見て体感すればもう驚かなくなるというものだ。

「分かった、それで行こう」

シグナムとヴィータはあっさり納得した。

「ヴィータ副隊長、いいんですか!？」

ティアナが驚いたように聞き返してくる。

「いいんだよ。てかちよつとは実力の差つてのを考える。お前ら四人じゃ束になってかかってもアイツに傷一つ負わせられるかも怪し

いからな」

二日前に見た圧倒的な模擬戦の結果を思い出し、ティアナはそれきりぐうの音も出なくなつた。

「ほ、ホントにいいんですか？」

スバルが困惑した顔で確認してくる。

「いいんだ、お前たち四人で俺をノセるとも思えないしな、まあノセたら実力は折り紙つきってことだが」

「うつん……それじゃあ……」

困惑するスバルに、ティアナは耳打ちした。

「いいのよスバル、あの人を驚かしてあげましょ、あたしたちのチームワークで。いいわね？ エリオ、キャラ！！」

「はい！！」

エリオとキャラは声こそ元気良く返事をするが、その顔には緊張がにじみ出ていた。

「全員、本気でかかってこい！！」

「はいっ！！」

ヒロユキが檄を飛ばすように叫ぶと、四人は弾かれたように返事をした。

「では、高岡対フォーワード四人の模擬戦、これより開始だ！！」

シグナムが叫び、模擬戦の火蓋は切つて落とされた。

Cross・11 Team or Alone

「たあああつ!!」

先に動いたのはスバルとティアナだった。機動力に優れるスバルがティアナの援護を受けて正面切つて突っ込んでくる。

「そんな一直線な攻撃つ!!」

ヒロユキはスバルの一撃を真正面から受け止める。

「くっ!!」

「くっ!!」

ヒロユキとスバルは同時に呻いた。スバルは自慢の一撃があつさり受け止められたことに、ヒロユキは予想していた以上の衝撃に、である。

「やっぱり受け止められた!! どうすんのティア!？」

「落ちついて!! これくらいは予想の範囲内よ!!」

ティアナはまだ余裕を残していた。というより、初めからあの一撃で決まるとは万に一つも考えていなかったという方が正しい。あれで決まっていたりしたらそれこそ予想外であるとティアナは思っていたのだ。ゆえに、あくまでスバルの一撃は様子見とでも言うべきであろうか。

「でも、これじゃ埒が明かないよ?」

「それもそうね……（ちよっと早いけど、四人で行くわよ? いい? エリオ、キャラ?）」

ティアナはヒロユキに悟られないよう念話でエリオとキャラに指示を送る。

（は、はい!!）

（頑張ります!!）

まだ緊張が混じった声で、二人は了解の意を返した。

「とりゃあああっ!!」

再びスバルがヒロユキに突っ込む。今度は後ろからティアナの射撃の援護が混じっている。

「選択肢は選ばせないつもりか……なら!!」

ヒロユキは再びスバルの攻撃を受け止めようとした。が、受け止めるかと思った途端、スバルの姿が歪んで見えなくなってしまふ。

「ブラスタアア、シュートオオ!!」

スバルが消えたことに驚いている暇もなく、ティアナの砲撃が続けて向かってくる。オレンジ色の魔力光がヒロユキに直撃する……というところまでは行かず、

「うおおっ!!」

ヒロユキはその魔力光を力ずくで打ち消す。だが、それも初めから打ち消されること前提で撃ったつもりだったらしく、ティアナは驚きの一つすら見せることなく、逆に不敵に笑った。

「スバル、エリオ、今よ!!」

「オーケー、おりゃああアッ!!」

消えたと思っていたスバルが、ヒロユキの背後から再び強烈な打撃を加える。

「うおおっ!!」

ダメージこそさほどではなかったが、強烈なストレートを直撃で食らってしまった、吹き飛ばされると同時に、脳が激しく揺れた。まだ反動が残る頭を必死に立て直しながら、ヒロユキは空中でブレーキをかけて体勢を立て直そうとする。

だが、ブレーキをかけて元いた方向を振り返ったのがまずかった。

「うおおおっ!!」

「後ろかっ!？」

振り向いたタイミングを見計らってエリオが上段から攻撃を叩き

つけてきた。ガキンという音とともに、ストラーダが咄嗟に張られたプロテクションとかち合って火花が散る。

「やってくれるな……!!」

ヒロユキは余裕を残しつつ呟いたが、

「まだです」

エリオがそれを遮るように呟き返した。そして、ヒロユキがその意を理解する前に、

「フリード、竜炎撃!!」

『キュルアアッ!!』

キャロの命令とフリードの咆哮とともに、強烈な炎が後ろから襲ってきた。

「くっ!!」

ヒロユキはすんでのところでもう片方の手でプロテクションを張り、その攻撃を防ぐことに成功した。が、しかし。

「がら空きッ!!」

両手が塞がった状態のヒロユキに、回り込んだスバルが三度拳を叩き込む。

「くそつたれ!! ゼロ!!」

『Protection』

ゼロがスバルの側にプロテクションを展開する。が、またしてもスバルは歪んで消えてしまう。

「幻術かつ!？」

「遅いです!!」

来た側と逆方向からスバルの叫び声が聞こえたかと思うと、次の瞬間、ヒロユキを魔力光が飲み込んだ。

「デイバイイイイン、バスタアアアッ!!」

凄まじい衝撃とともに爆発が起こり、空気が震えた。砲撃が放たれる瞬間にエリオとキヤロは距離をとったが、両手がふさがれていたヒロユキは動きようが無い。そのままともに『デイバインバスター』の直撃を受けてしまう。

「おいおい……決まっちゃいやがったぜ」

直下でその様子を見ていたヴィータが焦る。まさか自分たちをあつさりのしたヒロユキが自分たちよりもランクの低い相手から決められるとは予想できなかったのだ。数的不利はあれど、スピードとチームワークを考えればむしろあの四人の方が戦いやすいのだ。

「どうするんだよシグナム!？」

「落ちつけ、ヴィータ。アレを見ろ」

シグナムは焦るヴィータを静かに制した。

「え……あ……」

言われてヴィータがその方向を見ると、シグナムが余裕であった理由をすぐに理解することができた。

「ふう……まさかこうも早く一発決められるとはな……」

全く無傷、ダメージも負った様子のないヒロユキの姿があった。

「うええ、至近距離であれ食らって無傷う!？」

スバルが素っ頓狂な声を上げる。もったもなことだろう。なのはも愛用する信頼性の高い大威力砲撃魔法『デイバインバスター』をほぼゼロ距離でプロテクションも張ることなく直撃したのだから、

少しはダメージがあってもいいはずだと思っていたのだ。

「い、いくらなんでもデタラメよ……」

さすがのティアナも少しばかりうるたえていた。後ろのエリオとキャラも同様だ。

その時、不意にヒロユキが四人に向かって3本の指を立てた手を突き出した。

「……………！？」

四人ともその意図が分からず反応を返せない。

「……………三つ……………」

ヒロユキが静かに口を開く。

「三つだ……今ので三つ、お前らのチームワークの弱点を見つけたぜ」

「なっ！？」

その言葉に、ティアナが目を丸くする。自身を持って立案した作戦が上手く行き、ダメージは与えられなかったが形の上ではほぼ成功に近かったその弱点を、たった一度の、しかもあの一瞬で見抜かれたと言われたのだ、これでは自分がバカにされていると思えてもおかしくない。

「今からそれを実証してやるぜ」

ヒロユキはニヤツと不敵に笑いながら言った。

ティアナはヒロユキの言葉で意地になっていた。

「くっ、だったらもう一度……………！！」

四人が再び四方に散らばる。

「おおおりゃあああ！！」

そして、ヒロユキの予想通り、スバルが戦闘で突撃してきた。だ

が、ヒロユキはあえてスバルに向かっていく。

「弱点その1!!」

そしてヒロユキはスバルの打撃を横にするりと受け流す。

「えっ!?!」

スバルが驚く間もなく、

「デイベインシューター!!」

「うわあっ!?!」

ヒロユキが放った『デイベインシューター』がスバルの背中に直撃した。スバルはそのまま直下の地面へ墜落する。

「スバル!!」

ティアナが声を上げるが、どうにかなるものではない。

「攻撃が直線的すぎる!! 読みやすいんだ!!」

一つ目の弱点が告げられた。だが、言うが早いかヒロユキはその後ろにいたエリオとキャロの方に迫っていた。

四人の攻撃は悪くない。だが先読みなどというものが全くないのだ。機械的に、マニュアル通りに動作をしているだけではそのうちに避けられてしまう。敵はプログラムの通りになど動いてはくれないのだ。避けられた時の対処を、攻撃する方も後ろから援護する方も、まったく言っていないほど考えていない。

「弱点その2!!」

「くっ!! ストラダー!!」

エリオが咄嗟に攻撃を出してきたが、いかんせんタイミングが遅すぎた。

「時間差攻撃のタイミングが合っていない!! 意思疎通がまだまだだ!!」

「わあっ!!」

エリオがそのまま真下へたたき落とされる。

時間差攻撃という心意気は十分すぎるほどに感じられたが、そのタイミングがいまいちで、一撃目の後にしかける攻撃が砲撃なのか格闘なのかで間隔も違ってくる筈なのにもかかわらず、それがなっていない。格闘戦を仕掛けるには、今のタイミングでは敵に時間を与え過ぎていた。

「エリオ！？」

ティアナが叫んだ。もちろんヒロユキも加減はしている。10歳の相手に本気を出すほどヒロユキもバカではない。本気を出せばよくてもKO、悪ければ気絶か絶命である。

ヒロユキが弱点が三つあると宣言してからまだ二分もたっていない。それなのにあつという間に二人が叩き落とされてしまった。それはひとえに、弱点を突かれた時の脆さであり、それが三つ目の弱点を勝手にさらけ出す結果となっていたが、四人はまだそれに気づいていなかった。

「手加減ねえな……アイツ」

ヴィータは眼前で繰り広げられる戦いを見ながら呟いた。模擬戦とはいえこれではあまりに一方的だ。レベルが違いすぎる。

「いや、奴はまだ手加減している」

「はっ？」

シグナムの一言に、ヴィータは目を見開いた。シグナムは構わず言う。

「間隔を研ぎ澄ませろヴィータ。奴はまだ実力の二割も出してはいない」

「……………」

言われて間隔を鋭くして魔力を感知するヴィータ。確かにその通りだった。ヒロユキの手加減の仕方たるや、人間がまるで蟻を潰さずに摘みあげるような手加減の仕方だった。あの一瞬でこれほど細

かい加減ができるなど、並大抵できる技ではない。

「ま、そりゃそうだよな……」

グイータは納得した。そもそもヒロユキが本気を出せば、フォワードのメンバー程度の錬度ではいくらヒロユキがリミッター付きといえど一撃で戦闘不能にされてしまう可能性もないではない。自分たちが受けたあの威力を思い出し、グイータはそれを改めて再認識するのだった。

「くっ！！ それでも！！」

下からティアナが再び砲撃を放った。だが、ヒロユキはぎりぎりのところでそれを避ける。

「えっ！？」

「なっ！？」

ティアナと、挟み撃ちにしようと反対側で構えていたキャラコが同時に驚く。が、そんなことはお構いなしに、かわされた砲撃は真っ直ぐ、後ろにいたキャラコの方へ向かう。

「キャラコ！！」

ティアナが叫んだが、キャラコの竜の機動力では間に合わない。

「弱点その三！！」

あわやキャラコに当たるといところで、ヒロユキがその間に回り込んで割って入り、その砲撃を弾き飛ばした。

「周りをよく見ていない！！」

「……………！！」

ティアナとキャラコは同時に黙りこんで言葉を失う。ヒロユキの言葉通りだったからだ。

先ほど決まった時もそうである。二方向から攻撃を加えて防御に徹させて、その間にがら空きのところを叩く作戦というのもよく考

えられていた。

しかし、あのときは全て防御に徹させることができていたから良かったが、仮に誰か一人でも、攻撃を加える前に叩き落とされていたらどうだっただろうか。あるいは、防御したと見せかけて一瞬で抜け出されていたらどうだっただろうか。互いの攻撃が直撃して形勢逆転という可能性がゼロとはいえない。

どちらにせよ、四人は「もしも」という場合まで気が回っていないということが明らかになってしまった。その時の状況だけで反射的に攻撃をするので、失敗したときのリスクがあまりにも大きいのである。しかもそれを考えてすらいなかったというのだからもはやどういえば良いかさえ分らない。さらに、失敗をした時の対応ができないという事実は、たった今目の前で起こったすべてがそれを証明していた。

「そこまでだ」

シグナムの一言で、模擬戦はそこで終了となった。

フォワードは完全沈黙状態だった。全員でんで違う方向を向いて目の焦点もあっていないのか、ぼーっとしている。

実力の違いを見せつけられたところか、あまつさえ自分たちの弱点をさらけ出されてしまった……いや、むしろあそこまで攻撃していて、防御に手一杯だと見えたが実際はそれを見つける余裕があったということが最もダメージが大きかったと言える。

「……沈んでるなー、あいつら」

ヴィータはさすがに気の毒に思ったのか、若干引き気味にそう言った。

「やむを得んだろう、あいつらの実力は所詮あだったということ

だ」

「つつか、引き合わせたのはお前だろうが、シグナム」

「まあ、それはそうだが」

珍しくシグナムがヴィータに突っ込まれていた。どうやらシグナムでもここまで精神的にクくる模擬戦になるとは予想外だったらしい。そして、シグナムはその展開を招いた張本人であるヒロユキに視線を移す。

「随分と手荒くやったものだな、高岡」

そう言われたヒロユキは、しかし涼しい顔で答えた。

「あいつらはまだ色々知らないことが多すぎる。実戦を訓練の延長線上にあるモノと考えてる……そんな顔だ。俺はそれを知る切っ掛けを作っただけだ」

「確かにあいつらはまだ実戦に行ったことはねえけどよ……何もあそこまで分かりやすくやる必要はなかったんじゃないのか？」

副隊長の親心なのか、フォワードのメンタルの心配をするヴィータ。しかし、ヒロユキは殺し文句を突き付けた。

「だったら、部隊が始まって二週間だと言うが、どうして今まで教えなかった？ 実戦慣れしているお前なら、その必要性は分からないでもないだろう？」

「う……」

ヴィータはその言葉に圧されて押し黙る。

「謎の敵の出現でそれどころではなかった……では言い訳にはならんか？」

シグナムが考え込んでから一言言ったが。ヒロユキは有無を言わせない。

「確かにそうだ……だが、敵が攻めてくるならなおさらじゃないのか？ あの時ガジェットと、人型も少数だったから良かったが、

最初からあのデカイのが大群で攻めてきていたら、それをお前らだけで何とかできるとは思えないが？」

その通りだった。Sランク越えの隊長陣でさえやつとであるあの人型機械を、それより力量で劣る副隊長二人がどうにかできる可能性は低かった。シグナムは俯く。

「……確かに一理ある。すまない、我々も四人を買い被り過ぎていたようだ」

「おい、シグナム！？ 何も認めなくてもよ……！！」

あっさりと自らの甘さを認めたシグナムにヴィータが噛みついたが、シグナムはそれを冷静に諫める。

「いいんだヴィータ。副隊長である以上、連中の命は我々が背負っているも同じなんだ。部下が戦場で命を落とせば、それはひとえに副隊長、ひいては隊長の責任になる。お前も分かるだろう」

「……………」

ヴィータはそれを聞いて黙ってしまふ。シグナムの言うことはもともとだった。自分たちが副隊長である以上、部下が何かミスをしでかせばそれは副隊長にも責任があるし、まして戦場で命を失ったならば、それは全て、戦場の厳しさを理解させていなかったベテランの責任である。

「……悪い、言い方がきつかった……命のやり取りだのどうだってことに必要以上に入れ込んでしまうのは俺の悪い癖だ」

ヒロユキは小さく言った。

「いや、お互い責はある。お前だけのではない」

シグナムは俯き加減にごちた。自らが『守護騎士』の将であるならば、なおのこと自分の過ちは許せないのだ。

「……四人にはお前から結果を言っておいてくれ。ついでに弱点もな。俺ははやてに報告に行ってくる。そろそろあいつらも目が覚めたころだろうからな」

「あ、ああ……」

ヴィータは戸惑いながらもそれを了承した。ヒロユキはのろのろ

と訓練場を後にする。自分が犯した過ちではないのに、何故かやりきれない気持ちで一杯だった。そのせいで、足取りが余計に重くなっていた。ただでさえ疲労が取りきれない状態で模擬戦をやったのだから当たり前なのだが、そこに気の重さも手伝って足が数キロ重くなつたような感覚に陥っていた。

一方、訓練場ではシグナムとヴィータが、落ち込むフォワード陣に事の経緯とヒロユキの真意を話していた。

「……というわけで、彼はお前たちに実戦的な感覚を味わってもらうべく、ああいうことをしたと言っていたんだ」

「実戦……でも、私たちまだどれくらい強いかわからないのにそんなこと……」

スバルがおびえたような顔になり、震える声でそう言った。ヴィータはその言葉に答える。

「分からねえだろうな。だから言っておく。シグナムだけじゃなく、アタシたちも気づかされた……今のまま実戦に出たとしたら、お前らは戦力になるところか命の危険にさらされる」

「……!!」

冷やかな、しかし鋭い、まるで研ぎ澄まされた刃物のようなその一言に、四人は返す言葉を失った。そこにシグナムも付け加える。

「最近出現が相次いでいる新しい人型の機械兵器の敵がいる。あれはお前たちのレベルでは障害物になれるかどうか、せいぜいその程度にしかならん。故に今のお前たちを六課の戦力に加味することはできないのだ」

「そんな敵が……」

「分からねえのも当然だ。敵の存在は隊長陣でさえ把握しきれてねえんだ、お前らが知るわけもないし、知ったところでどうにもならねえ」

「……………」

重い沈黙が訓練場を支配する。

「あの……聞いていいですか？」

「なんだティアナ？」

ティアナが恐る恐る手を上げた。

「だったら、私たちはどうすればいいんですか……？ このまま六課に居ても足手まといなだけなんでしょう？」

「そ、そうです……私たちの訓練の意味が無いじゃないですか……」スバルもそれに同意し、エリオとキャロも無言で頷く。

「……………」

それを聞いてシグナムとヴィータは顔を見合わせ、少し考え込む。そして、シグナムが口を開いた。

「では逆に聞こう。足手まといにならないためには、どうすればいいと思う？」

「あ……………」

その言葉に四人はハツとした。ヴィータはニヤリと口元に笑みを浮かべた。

「答えは……言うまでもねえだろ？」

「力を……つける……ってことですか？」

「アタリだ」

ヴィータがにんまりと笑った。百戦錬磨の彼女たち二人にとっては単純かつ明快、そして当たり前の答えだった。敵わないなら敵わせるために追い付けばいい。力を得ればいい。

「ヴィータ副隊長！！ もっと厳しく鍛えていただけませんか！？」
不意にスバルが立ち上がって叫んだ。他の三人は驚いてスバルを見ている。

「ほう、それはいかなる心境だ？」

シグナムが問いかける。

「つ、強くなつて、足手まといにならないようになりたいんです！
！」

スバルの声は揺れていたが、内側に真つ直ぐな何かを感じて、シグナムは口元で笑う。

「よかろう。元よりそのつもりだ。覚悟はいいな？」

「は、はい！！」

スバルはカチカチになりかけながらも、精一杯の笑みで答えて見せた。

「お前たちはどうなんだ？」

シグナムは三人を見遣った。三人はともにしばらく考え込んでいたが、やがて、

「……………やります！！」

「……………自分ができるだけだけのことでしたいんです……………！！」

エリオとキャラコが立ち上がった。

「期待してるぞ」

シグナムの含み笑いに、エリオとキャラコは敬礼で答えた。

「ティアナ、お前はどうなんだよ？」

最後まで考え込むティアナにヴィータが問いかける。

「あいつらはやる気なんだ、後はお前だけだぜ」

ティアナはなおも逡巡していたが、やがて口を開いた。

「……分かりました、やります。力が無いとダメだっていうんなら、強くなつて見せます」

それを聞いたとたん、ヴィータは悪戯っぽい笑みを浮かべ、

「決まりだな」

そう呟いたと同時に、

「おーし、お前ら、今からちよつくらぶちのめすぞー!」

さらつと宣言する。その言葉に四人は驚いてしまふ。シグナムだけは平然としていた。

「ちよ、ちよつと!? 今からですか!？」

「おう、当然だ。戦場には休憩なんてものはねえんだ、普通だろ」

「それにしたつて少しいきなりなんじゃ……」

「……なんだ? さっきやるつていったのは嘘かあ?」

渋る四人にヴィータはジト目で殺し文句をぶつける。四人は強くなりた、そのために努力をすると決意していた手前引き下がれなかった。

その後、かつてないほど本気の（主に副隊長が）模擬戦が行われ、フォワードはヒイヒイ言いながらそれをこなしていくことになるのだが、それはまた別の話である。

隊長室に来てみたが、誰もいなかった。時計を見るともう11時を回っている。隊長の肩書きを持つ人間が、まさかこんな時間で寝ているなどということはないだろうが、心配になったので見に行くべきかヒロユキは迷った。しかし、見に行つたところでそもそも女

史の寝起きに押し掛けるとは軽く犯罪だ。少しでも早く起きることを期待して、ヒロユキは不干涉を決め込むことにした。

隊長室を出ようとした時、デスクの通信機が呼び出し音を奏でた。

不思議に思いヒロユキが通信機を見ると、呼出人は管理局本部だった。

『こちら管理局本部、機動六課、応答してください！』

やや切羽詰まったようなエイミイの声が飛び込んできた。

「こちら機動六課、副隊長の高岡だ。隊長陣は今不在だ、用件は俺が聞く」

『よかった、通じたんですね？ それはともかく、お知らせしたいことが』

「なんだ？」

『またあの救難信号です！』

「なに！？」

ヒロユキも驚きを隠せなかった。再び救難信号が管理局に飛び込んできたという知らせだった。

「それで、内容は！？」

『分かりません！ また謎の暗号パターンで送られてきてます！』

「くそっ……」

ヒロユキは唇を噛んだ。二度目となれば相当に状況がひっ迫しているとしてもおかしくない。それなのにまたしても受け取った相手に理解できるかどうか分からない信号を送りつけてくるというのは、どうにも理解も納得もいかなかった。

「とにかく、それを今すぐこっちに送ってくれ」

『りよ、了解しました』

通信はそこで途切れる。そして、再びその信号電文が送られてきた。

やはり前と同じくちんぷんかんぷんである。

「ちっ……やっぱり意味が分からない……なんなんだこの暗号は」
ヒロユキは一人誰もいない隊長室で考え込む。管理局のデータベースにも、無限書庫にもない……ということとは……」
ヒロユキは一つの可能性に思い当る。

「管理局も把握していない、未発見の次元世界……」

ヒロユキは噛みしめるようにそう呟いた。

「さて……どうするか……」

ヒロユキは奇妙な電文が印刷された紙を見てため息をついた。昨日の作業で、管理局の把握できる世界の信号でないことは分かっていた。手間が省けるという意味では嬉しいことだとれるが、裏を返せば読み取ることが今のところできないということ、すなわち完全に行き詰ってしまったということでもあった。

落ちつけ、見方を変えてみよう。ヒロユキはそう思った。

管理局から送られてきた暗号文は、色々な解読形式で書かれていた。波長に直せば大波の後に小波が来るような図に、管理局で使用されている電文形式に直すと丸やら点やらがややこしく羅列された文面になる。

ヒロユキは頭を抱えた。考え方を変えと言っても、どう変えるというのであろうか。すでにある資料と照らし合わせて分からない暗号と睨めっこしたところで答えが浮き出てくるなどという都合のいいことを期待したいものだが、生憎と救難信号がそんな都合よく出来ているわけなどない。しかし、方法が他にあるわけでもない。

「……………」

ヒロユキは紙面を上下左右隅々まで見る。視線だけ送ってもはじまらないので仕方なくヒロユキは解読に取り組み始める。まず波長で表した方の暗号に目を通してみた。まるでスクロールするゲームのステージにある山のように、大小の波が、紙の上に一列に並ぶ。

「大波、大波、小波、空白、大波、小波、小波、小波、空白……」

ヒロユキはブツブツと口で紙面をリピートする。こうしたところ

でどうなるわけでもないのだが、口に出して言えば何か分かるのではないかと淡い期待を持って挑んだのである。

「……………ん？」

だが、そこでヒロユキはあることに気付いた。

「空白、大波、大波、小波……………やっぱり……………！！」

ヒロユキは目を丸くした。波長のパターンにある一定の法則があるということに。

並べられている波長のパターンは大波と小波がランダムに並んでいる。時折波の形にならない空白部分もある。そこを見ているうち、ヒロユキは、大波の後に必ず小波が来ること、大波から小波に変わった後大波には戻らず、小波の後ろには必ず空白が来ること、空白の直後に小波は絶対に来ないということに気が付いたのだ。

「……………ということは、まさか……………」

ヒロユキは胸騒ぎがして、もう片方の電文で表された方の紙面に目を通した。そして、その予感は的中した。

やはり、電文の方にも一定のパターンがあったのだ。丸と点と線で表されたその電文も、必ず間に空白を表すと思われる横線が入れられていたり、点がいくつか並んでいてその間には必ず丸が入っている、横線は連続して並ぶことはない、などの決まりが見えてきた。

だが、法則が分かって喜んだのもつかの間、話は振り出しに戻る。

そう、これでは解決したことには何らならないのである。法則が分かってても、その法則が何にしたがって作られたものなのかを理解できなければ読み解いたことにはならない。このままではただのバグが印刷されているも同然である。ヒロユキはまたしても頭を抱えてしまった。しかし、嘆いてもどうにもならないのもまた事実だ。

「落ちつけよ……時間はあるんだ、パターンを読み取るんだ……」
自分に言い聞かせ、ヒロユキは波長暗号のパターンの分析に取りかかった。

三十分ほどして、あらかたの分析が済む。

「大きい波は多くても五連続まで、小さい波は一番多いもので十連続か……」

これがヒロユキの導き出した法則だった。表せるパターンは全部で五十。つまり、文字の種類が五十以下の言語を用いた救難信号だと特定できた。それはつまり、ある程度絞り込みが完了したことを意味する。

「さて、ここからが問題だ……」

ヒロユキは気合を入れ直す。ここからこのパターンにぴったり当てはまる言語を探さなければならぬのだ。

だが、それは驚くほどあっさり見つかった。

「こりゃ管理局の判定で出てこないわけだ……ちくしょう!!」

ヒロユキはどうしてこんな簡単な謎が分からなかったのかと自分を殴りたくなった。

一枚目の波長電文は日本語、二枚目の記号電文は英語にあっさり

当てはまってしまつたのである。

見直してみよう。波長電文は、大波の後に小波が連続して表されるパターンが、間に空白を挟んでいくつも連なっている。そして大波は多くても五連続まで、小波は十連続まであつた。それが何を意味するか。

答えは簡単、大波はあいいうえおの段を表し、小波はあかさたなを行を表すのである。念のため確かめてみると、や行とわ行は確かに三文字しかない。わ行の大波3の次に小波10という波長は恐らく「を」を、大波が5になれば「ん」を表すのであろう。前後の文と照らし合わせても、その方がしっくりきた。何もなく平らなグラフの部分は、文字の区切りを表しているのだと容易に想像できた。

そしてもう一方の記号電文は、アルファベット二十六文字を点と丸の羅列で表したものだつた。ヒロユキは、最大で点が9つ、丸がふたつという法則に着目したのだ。最大で二十九通りの文字を暗号に出来るが、丸がふたつ並ぶと点は6つまでしか並んでいない事を発見した。横線は文字間の空白を表しているのだらう。

そして、ヒロユキは、解読した法則を別の紙に書き留めておき、それを使って二つの暗号文を読み解く。法則が分かつてしまつた今、読み解くには三分とかからなかつた。

『キンキュ - - タイ キュウエンモトム ショウタイフメイノ -
- シュウゲキ クセンセリ - - ス キョウカ - - ニホン

シブ
『

『SOS SOS emergency Secret enemies are destroying everything International force had broken - - - school students - - battle for enemies』

電文はところどころ乱れていて読み取れない部分が何箇所があったが、内容は読めなくはなかった。しかし、そこでヒロユキは奇妙なことに気付く。「二ホン」という単語があることにである。

管理局では日本はおろか世界中の言語、すなわち『第97管理外世界・地球』の言葉はちゃんとデータベースにあるのである。しかし、今回は、『第97管理外世界』に存在する言語にもかかわらず、データベースにヒットしなかった。これはどういうことか。暗号パターンは学校のレクリエーションで使うような暗号と何ら変わらない。しかし、それが管理局のデータに反応しなかった。すでに登録されている言語であるにもかかわらずである。それが示すことはただ一つ。

「俺たちの世界じゃない、別世界、しかも未発見の並行世界の『地球』から発信されたもの……！！」

そうでなければ説明がつかない。コンピューターは、救難信号を受け取ると、まずデータベースから発信元に一致する世界を探し出し、そこから、その世界のデータに登録された暗号パターンで解析を始めるという二つの段階を踏んで動くのである。言語が登録されていて、どこから来たのか分からなければコンピューターが反応

しないのも当たり前なのだ。さらに、この暗号パターンは単純すぎるゆえに管理局のデータベースに無かったことが、余計事態をややこしくしていた。

「くっ！！ もはや一刻の猶予もねえぞ！！」

電文には「キュウエンモトム」「ショウタイフメイ シュウゲキ」とあった。これが意味するところは、謎の敵の襲撃を受け交戦状態となり、救援を求めなければならぬほど窮地に立たされているという状況である。事実ならば、もたもたしてはいられない。

「シャーリー！！ 全体にアラートを鳴らせ！！ 機動六課出動だ！！」

開いた通信回線に怒鳴りながら、ヒロユキはその足で格納庫に向かって急いでいた。

「ヒロユキ！？ どういうことや！？ 第一級エマージェンシーやなんて！！」

ヒロユキが格納庫に到着したところで、事情をまだ飲み込めていないはやてが息せき切って駆け込んでくる。エマージェンシーコールで叩き起こされたのか、ところどころ髪に寝癖がついている。いつものヘアピンも付けていなかった。制服も乱れ気味である。

「詳しいことは後で話す！ とにかく今は急いで出撃準備をするんだ！！ それと、フォワードチームにも全員出撃命令だ！！」

「ふえ！？ フォワードを正体の分からん敵とやらせるん！？」

はやてはヒロユキの言葉をすぐには受け入れがたかった。だが、

ヒロユキは有無を言わせないとでも言うように叫んだ。

「人の命がかかってるかもしれないんだ、メンバーは多い方がいい、急げ!!」

「わ、わかったで……!!」

はやては空気に圧されたか、Uターンをして隊長室のある方向へ駆けて行った。

「管理局、聞こえるか!? 解析はすんだのか!?」

通信回線を開き、ヒロユキは管理局を呼び出す。

『今すみました!! 高岡さんの予想通り、ヒットしました!!』

エイミイの声が興奮気味に上ずって返ってくる。数分前、ヒロユキは信号の発信元を特定するため、管理局に信号発信時の状況を見直してくれと頼んでいたのだ。空間を飛び越えて電波の類が飛んでくることなどあり得ないため、ヒロユキはその時に次元震かなにかが起きたのではないかと推測していたのである。そして、その予想は的中した。

「よし、発生地点の座標と深度を『ガンダム』に送っておいてくれ!! それと転送ポートの用意も頼む、ヘリサイズでな!!」

『りよ、了解!!』

ヒロユキがあまりにできばきと指示を出すことに驚きながらも、エイミイは通信を切った。通信機を切るのもどかしく、ヒロユキは梯子をかけ上り、コクピットに滑り込んでスイッチを入れる。『エクストリームガンダム』の頭部にある二つの目に光が入り、駆動機関の唸りが聞こえ始めた。

数分後、格納庫の前に、機動六課の実働部隊が整列していた。若手のフォワードはやや緊張した面持ちで、隊長陣三人は懸念を隠せていないような顔で立っていた。

「では、これより機動六課は緊急任務に出動します。行先は未登録

の管理外世界、目的は救難信号発信者の救助、あるいは保護です」

はやてはできるだけ冷静を装って告げる。

「これは機動六課総動員で挑む初めてのミッションや。フォワードはいきなりでビックリしとるかもしれへんけど、無理だけはせんといてや？」

「り、了解！！」

四人はそろって敬礼をするが、その声はまだ緊張が混じったものであったのを、ヒロユキは聞き逃さなかった。

「皆、いきなりでまだ気持ちが悪く落ちていないかもしれないが、このミッションは最悪の場合人命が失われることも覚悟しておかなければならない。厳しいだろうが、各員の健闘を祈る」

ヒロユキはあえて大声では言わなかった。言えば余計プレッシャーになると考えたからだ。その甲斐あってか、二度目の「了解」を叫んだフォワードの目には、心なしか意思が宿っているように見えたのであった。

『転送ポート、準備完了しました』

「了解、これより時空間解放、次元移動を開始する」

ヒロユキが転送ポートをヘリコプターサイズで用意してくれと頼んだのには訳があった。第一に、管理局が所有するメカにおいて、単機で次元の壁をくぐり抜けられるのは航行艦と『エクストリームガンダム』だけであること。第二に、機動六課には、大勢の人員を乗せて移動できるものがヘリシかなかったということからだ。

そこで今回はヒロユキが『エクストリームガンダム』で先行し、状況を確認しだい、後続してヘリが転送ポートで到着するという移動の手はずになっていた。転送ゲートを抜けたところに敵がいたりしては、応戦能力が皆無に等しいヘリでは墜とされるのがオチだからだ。なので、『ガンダム』が先行し、出たところに敵がいれば『

ガンダム』が殲滅を担当し、状況が整ってからヘリが移動するという手順を踏まざるを得なかったのである。

『時空間ゲート形成、移動開始します』

ゼロが準備完了のメッセージを発する。バチバチという音とともに『ガンダム』の頭上空間に穴が空き、ゲートが形成された。

『氣いつけてな、無理するんやないで？』

「大丈夫だ、『ガンダム』とゼロの性能があれば問題はない」

通信で自分を気にかけてくるはやてに、ヒロユキは平然と言ってみせる。恐らくはやても不安であるには間違い無いので、むしろこう言わなければ余計空気がまずくなると思ったせいもあったのだが。

「『エクストリームガンダム』、発進する！！」

勢いよくペダルを踏み込む。背のスラスターが火を噴き、十数メートルの鋼鉄の巨体を宙に浮き上がらせる。そのままの勢いで、鋼鉄の巨人は時空の狭間に消えた。

『時空間トンネル、次元震度異常なし、巡行に支障ありません』

「よし、一気に突破する」

ヒロユキは早口で指示を出し、レバーを押しこむ。機体は一気に加速を開始した。

次元の隙間にエネルギーの塊が長居し過ぎると、放たれるエネルギーの奔流が次元震の引き金になってしまう恐れがあったために、早く突破しなければならぬと、ヒロユキは発進前にシャリオから聞いていた。ゆえに、出来るだけ早くこの空間から抜け出さなければならなかった。

幸いにも、その瞬間はすぐにやってきた。

『間もなく、時空間トンネル抜けます』

「随分と早いな」

『ええ、私も驚いています、マスター』

『私を嘗めてもらっては困りますよ』

顔を見合わせるヒロユキとゼロに、『エクストリームガンダム』

はどんなもんだとでも言いたげな顔をする。ヒロユキとゼロは苦笑する以外に選択肢が無かった。

スラスターを吹かし、体勢を整える。視界の先に小さく白い光が見えたかと思うと、あっという間にトンネルは終わりを告げる。

「うわっと!!」

抜けた先に小山があつたので危うく衝突しそうになる。ヒロユキはとつさにレバーを目一杯引き込み、何とかそれを回避することに成功する。空中で体勢を整えながら、ヒロユキは周りを見渡した。直下は一面に緑が広がっており、向こうには海まで見える。

「……見た目、どこからどう見ても地球にしか見えないな、ここ」

『はい、大気の含有成分もマスターの住んでいた「地球」とほとんど変わりありません』

「油断だけはするな。『エクストリームガンダム』……いや、長いから『エクス』でもいいか？」

呼ぼうとしてヒロユキは気が付き、そして思いつく。

『は？ はい、構いませんが？』

「よし、じゃあエクスは可能な範囲で出来る限り策敵を頼む、ゼロは発信地点の特定をしてくれ」

やや戸惑い気味に答えたエクスに、呼び方をどう思おうが勝手にしろという顔でヒロユキは指示をする。今は何より状況を知るのが最優先だ。

『策敵完了しました、半径20キロ圏内に敵の反応なし』

「オーケー、エクス、機動六課に青信号を送るんだ」

『了解』

エクスは先ほどの一瞬の戸惑いなどなかったかのように指示を的確に進めていく。その辺はAIである、対応が早くなければ困るというものだ。

「ゼロ、そっちはどうだ？」

『申し訳ありません、この世界のデータがない以上、正確な位置までは……』

スクリーンに表示されたのは、大まかな範囲を映した地図であった。発進されたと推定される範囲が地図上に赤く囲まれて表示されている。

やはり管理局に登録されていない未発見の世界からの、しかも次元の壁を隔てて発進された信号の探知では、大まかな範囲だけ示すのが限界だった。

「まあ仕方が無いさ。他のメンバーが到着次第、搜索を始めよう」
ヒロユキはあきらめてメンバーを待つことにした。だが、到着を待っていると、突然コクピットに警報音が鳴り響いた。

「なんだ、敵か！？」

『いえ、敵影は見当たりません』

「ならこれは一体……！？」

ヒロユキは戸惑う。システムの故障かとも思ったが、そうではなかった。

『これは……マスター、あの救難信号です！』

「なに！？」

三度目の救難信号。ここでその信号を受け取るということは、それがこの世界でたった今発信されたものであることを意味していた。
「どこからだ！？」

『お待ちください、今逆探知しています』

「急げ!!」

ヒロユキが急かしたと同時に、目の前の空に転送ポートが出現し、そこからヘリコプターが押し出されるように這い出てくる。

『マスターヒロユキ、機動六課戦闘班が到着したようです』

「来たか」

同時にゼロがスクリーンに救難信号の発信地点を表示する。

『推定地点でした。ここから北北東に137キロ地点、半径2キロ圏内です』

「よし、ゼロ、向こうに地点のデータを送っておいでくれ。ヘリ、聞こえるか!？」

ヒロユキはそれを確認すると同時に、ヘリに向かって通信回線を開き、急いで呼び掛ける。

『こちらライトニング01、フェイト。どうかしたの?』

「どうしたもこうしたもない、三度目の救難信号を受信した!」

ヒロユキは押し切るように怒鳴る。同時に画面の向こうのフェイトが驚いた。

『三度目って……状況は!?』

「さあな! とにかく、そっちに発進地点のデータを送った! 俺はこのまま先行するから、間隔を適度に開けて後から追いかけてきてくれ、もう一刻の猶予もない!!」

『分かった、気をつけてね!』

フェイトの返事を最後まで聞くか聞かないかのうちにヒロユキは通信を切る。同時にペダルを力一杯踏み込み、最大加速をかける。

『ガンダム』は青白い光条を残し、空の彼方へ飛び出した。

「救難信号がまた来たて、ホンマか!？」

はやてはその事実を聞くなり血相を変えた。

「う、うん……今こっちに発進地点を送ったから後は急いで向かえ
って……」

フェイトははやての迫力に若干気圧され気味になりながら答える。
全員の前に、ヒロユキが送ったそのデータが映し出された。そして、
その地点に猛烈な勢いで向かっていく、『ガンダム』を示すアイコ
ンまでが映っていた。

「……今更だけど、速すぎない？」

なのはがぼそつと呟いた。フェイトとはやてはそれに頷かざるを
得なかった。『ガンダム』の速さは初対面の時に自分の目で見てこ
そいたが、あれでも全力でなかったのかと改めて驚かされる結果に
なった。

「とにかく、もたもたしてはおれへん、私らも今すぐ行くんや！

フェイトちゃん、操縦は頼んだで！！ なのはちゃん、そっちの索
敵は任せたわ！！ 私はこのちをやるから！！ フォワード、デバ
イスともども戦闘準備は万全にしときや！！」

はやては早口で全員に指示を回すと、ヘリの右側の索敵を始める。
デバイスの性能上、索敵は全方位出来るのだが、後方をなのはに任
せ、全精度を前180度に注ぎ込むことで、より広く探知ができる
のだ。

一方、ヒロユキは間に合えとばかりに祈りながら全力で機体を走
らせていた。スクリーンに映る目標座標がみるみる近づいてくる。

だが、ヒロユキにはそれでもその時間経過が遅く感じられた。距離
を示すカウンターの減り方さえもどかしく思えるほどに。

「くそっ、もつと急げよ……！！」

ヒロユキはついつい口に出して言う。すると、それを聞いたエクス
スとは思いがけない言葉を口にした。

『もつと急ぐ方法……ありますよ』

「なんだと？」

ヒロユキは耳を疑った。すでに目一杯飛ばしているはずだが、これ以上まだ急ぐ方法があると言うのか。エクスの自信満々な口調はいつものことだったが、この状況でエクスが冗談を言うとも思えない。「出来るのか？」

期待半分疑心半分で、ヒロユキは聞き返した。

『はい、出来ます。今より2割ほど早く行けますよ』
「どうするんだ？」

『システム“eX”^{イクス}を発動させるのです』

エクスが聞きなれない単語を口にする。これにはゼロも黙っていらなくなったらしく、口を挟んできた。

『危険なシステムではないのですか？』

『まあ、使い方を間違えれば危険かもしれませんがね』

エクスはしれつと答えた。それを今提示するとは、一体どういう魂胆であろうか。ヒロユキには見当がつかなかった。

「何故それを今使った？」

『貴方が望んだからですよ、マスター』

エクスは全てヒロユキのせいだと言い切って見せた。それを聞いたヒロユキは呆氣にとられると同時に思わず笑ってしまう。

「ははは、確かにそうだな、早くしろといったのは俺だ、悪いな。で、危険というのはどういうことだ？」

『実をいうと、“eX”の発動中は、貴方のエネルギーを頂かなければなりません』

打って変わって申し訳なげな声になりながらも、エクスは答える。危険というのは恐らく、やり過ぎると操縦している方が倒れてしまうということを言いたいのだろう。無論、操縦する側が倒れれ

ば機体も止まってしまう。そうならば更なる危険も生じるであろう。エクスはそれを言いたかったのだ。

『問題ありませんよ、エクス。マスターの魔力は少しぐらいもらってもどうということはありませんから』

「おいゼロ、当人を差し置いてそれを言うのはどうなんだよ」

ゼロが突如として分かりきったようなことを口にし、ヒロユキは慌てた。いくらヒロユキとはいえ、魔力、もといエネルギーには限りは当然ある。長い時間続けばタダでは済まないのだ。それを大丈夫だと言いきったゼロにヒロユキが驚くのは、ある意味当然であった。

『マスターヒロユキ、私は貴方のデバイスなのですよ？ 貴方のこと、貴方の魔力のことは私が一番よく知っていますし、私がいる限り貴方の魔力を尽かせはしません、だから、私に任せてくださいませんか、マスター？』

それを聞いてヒロユキは理解した。つまり、ゼロとて急ぎたい気持ちは同じなのだ。そのために、ヒロユキに力を貸してほしいと言ったのだ。ヒロユキなら大丈夫、ヒロユキの力なら不可能はない、ゼロはその可能性を信じていたのだということを。自分以上に他を思うゼロの心に、ヒロユキは思わず胸が熱くなった。

「わかった、ゼロ、お前が俺を信じてるなら、俺もお前の可能性に賭けてやるよ。それだけ大口を叩くといって出来ませんなんてことは、お前に限っては無いだろうからな」

『ありがとうございます、マスター、感謝します』

『決まりましたか、では……』

エクスは言葉を受け取ると、一拍置いて言った。

『システム”eX”、起動』

同時に『エクストリームガンダム』はまばゆい光に包まれ、その姿を徐々に変えていく。

まず、その背に4つの蒼い羽根のようなものを纏った翼、もといウイングが、対となって現れた。同時に右手にあったライフルは形を変えて左手にも出現し、代わりに左手にあった盾が消失する。機体の色は灰色がかった銀色から、美しいまでの白亜に変わり、関節はくすんだ灰色から、輝かしい金色へと変わる。その姿はまるで天使だった。

ヒロユキとゼロは、その変わりように、揃って言葉を失った。

「これは一体……！？」

やっとのことですれだけを言うことができたヒロユキに、エクスが説明を始める。

『“System-eX”——状況に応じて機体に外装・装備を追加、または削除し、臨機応変な戦闘に対応できるシステムです。これは私エクスがこの機体に搭載される前からあったものらしいのですが、私も詳しくは知りません』

「なるほど、生来の機能ってことか。で、これは何なんだ？」

『“Phase/Strike Freedom”——高機動戦闘に特化した形態です。外装を減らし、防御性能は落ちますが、代わりに素体の2割増しの速度を出すことができます。武装は見ての

通り、2つのライフルです、盾はありません。一応他にも武装はあるらしいのですが……とにかく火力と機動性で一撃離脱を行うのがこの形態の基本戦術のようですね」

まだ不確定要素が多いのか、エクスはそう締めくくる。結局のところ、実際に使ってみなければわからないということだ。

「速度と火力には問題ないのか。で、危険性は？」

『第一には、先ほど言いましたが、防御性が落ちていきますので、なるべく攻撃を受けないことが重要です。第二に、この形態は武装と機動に使用するエネルギーの消費がやや大きいため、本来の駆動エネルギーに加えて搭乗者の魔力を補助として使用します。そのため、あまり長時間の戦闘は望ましくありません。火力にものを言わせて早く敵を殲滅できるのが理想です』

「……なるほど、分かった。やってみるさ。とにかく急ぐぞ」

『了解』

エクスがそう答えた時、ヒロユキの視界に妙な光景が映った。

「なんだあれは？」

ヒロユキの視界に映ったのは、飛んでいく方向の先の陸から立ち上る雲だった。空は晴天で雲は殆どないというのに、目の前にはまるで火山から立ち上る噴煙のように空へ伸びる雲があった。

「……あっ！！」

少しして、ヒロユキは気がついた。その雲の先端は、空へ届く寸前にずっと消えていたのだ。まるで煙のように。

そう、あれは煙のように見える雲ではない、煙そのものなのだ。

近づいていくにつれ、白いばかりと思っていた大きな煙の根元にちらほら黒煙が見えてきた。カメラをズームすると、それはもうも

うと動きながら立ち上っており、間違いなく煙であった。立ち上るいく筋もの煙が合わさって、まるで雲のように遠くから見えていたというわけだ。

そして、立ち上る多くの白煙、黒煙が意味すること、それは――
|。

「救難信号の発進地点はあそこだ!! あの様子だと相当まずい、一刻も早く救援をしないと!!」

その場所が危機的な状況に陥っており、相当危険な状態であること。それこそ、救難信号を発信しなければならないほどに。

「頼む、間に合ってくれ!!」

ヒロユキは、スクリーンで、そこが目標地点であることを確認すると、最大加速で目標地点へ向かった。

Cross・13 戦騎乙女

「くっ、これではきりがいい!!」

少女は歯ぎしりをした。襲ってきた緑色の人型は、自分たちの攻撃などまるで意に介さないように平然としていた。いくら切りつけても、いくら撃つても、致命傷を与えられない。

「くそっ……救難信号は出してるのか!？」

「だっ、出し続けてるよ!! あとは気がついてくれる人がいればいいだけ!!」

少女は後ろにいる中性的な顔立ちをした別の少女に問いかけてみたが、返答は同じだった。発信され続けている救難信号に気づいてくれる人間がいるかどうか。それが自分たちの命運を握っていた。

「ええい、誰でもいい、早く来い……!!」

焦りを隠そうともせず、あまりにも細すぎるその命運の糸が切れないことを、少女は祈った。

「来るぞ!!」

少年の声が言った。見ると、真正面から別の人型機械が砲撃を行いながら向かってくる。

「ああ、もう!! こいつら一体どれだけいるのよ!!」

別の少女がイライラしながら空で地団駄を踏む。

「迎撃しますわ!!」

「私も行こう」

後ろの二人が一直線に飛び出す。もう余裕はない。

「私も行くぞ!!」

なりふり構っていらなくなり、少女は飛び出した。

先に飛び出した二人の援護射撃を受けながら、少女は手にしたブレードで敵に切りかかる。渾身の力を刀身に込め、その胴体を真っ

二つにしようと刀を真一文字に構え、通りざま切り裂こうとした。
が、やはり先ほどまでと同じく、刀身はキンツという音を立てて
あっさり弾かれてしまった。

「くっ、やはり駄目か!？」

少女は急いで距離を置こうと加速をかけた。だが、警報音が鳴る。
見ると、攻撃が大して効いていなかったのか、後ろから敵が猛烈な
射撃の嵐をお見舞いしてきたのだ。

「くっ、この……!!」

雨のように押し寄せる弾の嵐を、少女は必死に身を振ってかわす。
だが、運悪く、横っ腹に一発直撃が命中してしまう。

「うわあっ!!」

体勢を崩したところを、敵は見逃さなかった、一刀の元に切り裂
くべく、斧のような武器を振りかざして少女に迫ってきた。

恐怖のあまり、身体が動かなくなる。身体が全身で警報音を鳴ら
していたが、頭が思考を停止した。少女が思わず目を閉じた時、
横から一筋の光が飛んできて、その人型を貫いた。胸を打ち抜かれ
た人型は、その眼の輝きを失い、眼下の海へと墜落していく。

光の来た方向の先にいたのは。

「天……使……!？」

蒼い翼を背負った、純白の人型機械だった。

.....

近づくにつれてだんだんと状況が克明に理解できた。

崩れ落ちたビル。燃え上がる廃墟。舞い上がる火の粉。そこにあった何もかもが元の形をとどめていなかった。

そして、煙で薄暗く染められたその空では、光があつちで弾け、こつちで輝いている。

「戦いが続いているのか……！！」

ヒロユキは唇を噛んだ。自分が来るのがあまりにも遅すぎたのではないかと一瞬思ったが、慌てて振り払う。そして、これ以上一名でも犠牲者が増えないことを祈る方に頭を切り替えた。

その時、ヒロユキの視界、コクピットのスクリーンの片隅にあるものが映る。抱えた大きな何かから光を放ち、目先のものを破壊していく。上から下まで、緑で染められたそれは――。

「あいつら……！！」

まぎれもなく、あの時の一つ目の人型機械兵器だった。

「この世界でも、あいつらが……ってことは、まさか……」

ヒロユキは嫌な予感がして、咄嗟にカメラを地表に向けてズームしてみる。その予感は、不幸にも的中した。

無数のガジェットが、ビームを発射して、通る道なりにあるものをことごとく焼きつくしていく。通った後に瓦礫しか残さない様は、まるでハイエナの群れだった。

人型を始末するか、ガジェットを殲滅するか。ヒロユキは迷ったが、人型を先に破壊することにした。ガジェットの始末だけなら、後から来る機動六課のメンバーでも何とかなるはずだ。今は、生身

では厄介なあつちを先に潰さなければ面倒だ。

ヒロユキは機体を構え直す。速度に優れる『Phase/Strike Freedom』は、それを活かし一瞬で敵に近づき、腰に付いたビームサーベルで切り捨てるのがセオリーである。ゆえに、動きの最初から最後まで一切の無駄は許されない。あれば被弾したが最後、薄い防御性が仇となりあつという間に攻め落とされてしまうのがオチだ。

ヒロユキは軽く深呼吸すると、加速すべくペダルを踏み込もうとするが、ペダルに足の裏が付きかけたところでその足が止まってしまった。

その理由は、スクリーンに妙な光景が映ったからだだった。

一機の人型に狙いを定め、加速しようとしたところで、横から何かが青白い光とともに飛んできてその人型に体当たりをかまし、一瞬でまたスクリーンの外へ消え去っていったのだ。あまりに一瞬のことで、ぶつかった「何か」の正体を掴めなかったが、ぶつかられた人型の方は一瞬ふらついただけで何のダメージも受けておらず、すぐに攻撃を再開する。

「なんだ今のは？ ゼロ、分かるか？」

『分かりませんが、そこそこの熱量を持っていたことは分かりました。推定ですがあの人型の三分の二はあつた感じがありました』

「三分の二？」

ヒロユキは違和感を感じた。仮にもこの世界は『地球』である。ヒロユキがもと住んでいたそれとは違う世界と分かっていたが、街を見渡す限り、そこまで技術が発達したような街ではない。せい

ぜい『第97管理外世界の地球』を20年30年ほど未来にしたような程度で、特にこれといって目立つ高度な技術など見当たらない。ならばあの人型機械に対抗できる技術があるとは考えにくかった。

「くっ、考えるのは後だ、今はアレの殲滅を優先する!!」

ヒロユキは目標に向かい『ガンダム』を飛翔させようとする。

だが、その時、またしても横やりが入る。

『急速接近する物体……来ます、マスター!!』

「なに!？」

同時にリーダーに接近を知らせるアラートが表示され、警告音が鳴る。一瞬ののち、ヒロユキの右前方から青白い尾を引く何かが猛烈な勢いで接近し、目の前にいた人型に、持っていた刀のようなもので斬りつけ、左へ飛び去っていく。

だが、今度は攻撃の入りが甘かったのか、人型は体勢を崩すどころか反転してそれを追いかける。そして、雨のような光の嵐が、その光に向かって放たれる。そして、その中の一発が命中し、それは体勢を崩す。

「なっ……なんだあれは……!？」

体勢を崩した「光」の正体は、深紅の装甲のようなものを身にまとい、手には刀を持ち、背には翼のようなスラスターを装備した『人間』だった。背中の翼のようなものからは先ほどの青白い光が出ている。恐らくはアレの力で空を飛んでいるのだろう。

だが、手足こそ分厚い外装に包まれているものの、肝心の胴体はボデイラインが浮かぶほどの厚さしかない布で覆われているだけ。つまり、生命的に肝心な部分がほとんど丸腰なのである。それだけあればどこまで応戦できるのか、ヒロユキは疑問符を浮かべかけたが、体勢を崩したその人間に人型機械が斧で斬りかかったのを見て、そんな疑問は一瞬できれいさっぱり吹き飛び、ヒロユキは反射

的に機体を動かしていた。

照準もままならないまま放った射撃は、しかししっかりとその敵の胸を撃ち抜いた。重力に従ってゆっくりと落ちていく敵。狙われた方の人間はどうやら無傷だったようだ。

「危なかった……くそつ、ヒヤヒヤさせやがって……!!」

ヒロユキはそのまま機体を駆り、ドンパチに気づいたらしい向この敵の集団に突っ込んで行く。向かってきた2機を即座に両手のビームライフルで一機ずつ撃ち抜き、続けて後ろにいたもう一体を、すれ違いざま腰のビームサーベルを引き抜き両断する。

『マスター、先ほどと同程度の熱量を感知、数は先ほどのを含めて6です』

エリアをサーチしていたゼロが告げる。

「つまり、あの武装した人間が最低でも6人いるということか」

『はい、ですが、あれは人型と応戦しています。少なくとも、利害は一致しているとみて間違いないでしょう』

「要するに、俺たちがここで人型を殲滅すれば何の問題もないわけだな？」

『そういうことになります』

「よし……」

ヒロユキはそれを確認すると、通信回線を全チャンネルオープンにして呼びかける。

「その連中、聞こえるか、聞こえていたら応答頼む」

少しの間をおいて、声が返ってくる。

『感度良好、聞こえている。救援に感謝する。私はドイツ国家軍特殊遊撃隊所属、ラウラ・ボーデヴィツヒだ。貴様は何者だ?』

「こちらは時空管理局、特別部隊第6小隊、高岡ヒロユキだ」

『時空管理局……？ 聞いたことが無いな……どここの組織だ？』

当然のように知らないという答えが返ってくるが、ある程度は予想済みであった。

「説明は後回しだ！ この人型は俺が相手をする！ こいつはお前たちの武装では太刀打ちできない！ お前たちは地表の連中の殲滅を頼む！ 数が多いが、後から俺の仲間が来るから、それまで踏ん張っていてくれ！」

『……了解した。そちらの策に従おう』

何か反発の一つも返ってくるかと思っていたが、意外にも相手はあっさり了承してくれた。六本の青白い光が、地表に向かって降下していく。相手は軍人と名乗っていたが、恐らくはそれのおかげで力量差を理解できる人間であったのだろうか。とにかく、ヒロユキは幸運と思う他なかった。頭の片隅に、軍隊がこんな人体装着型の兵器を使用しているというのは聞いたことが無いというひっかかりは残っていたが、今は敵に集中しなければならない。ヒロユキは再び『ガンダム』を加速させ、向こうにいる集団へ突っ込む。

「機動六課、聞こえるか！？」

ヒロユキは通信回線を開きなおし、今度は追いかけてきているであろううへりに呼び掛ける。

『ヒロユキ！？ どないした？』

はやての声が返事をした。

「敵はかなり多い！ 地表にはガジェットが300体ほど、空にはあの人型が十数機ほどもいる！ 撃墜されないように、へりを適当なところで降りろ！ お前らは地表のガジェットの殲滅に回れ！」

『りよ、了解』

早口でいうヒロユキに、はやては戸惑いながらも何とか聞き取ることに成功した。

『せやけど、そんな数のガジェット、私らだけやったら無理ちゃうん？』

認めたくはないが、万一ということも考え、はやてはそう質問する。

「その点は問題ない。幸い、こつちの世界にも戦ってる人間はいた！ 人型は無理だが、ガジェットの対処なら何とかなる！ お前らはそいつらと協力して一機残らず叩き潰すんだ！」

『オーケー、了解や！ 私らの本気見せたるで！』

そう言われ、通信が切れた。ヒロユキは大丈夫だなという確信を得て、さらに『ガンダム』の速度を上げた。

「全員、魔力の使いすぎには注意して応戦するんやで！ フォワード、無茶はせんといてな？」

「はい！！」

はやての言葉に、若手四人は全員敬礼で返す。

「初戦はみんな緊張するもんや、焦らんとやってくるんやで？ ほな、行こか」

「スターズ01、ライトニング01、行きます！！」

01の部隊番号、隊長の番号を名乗るなのはとフェイトが飛び出す。ヘリは、街から数キロほど離れた丘の森の中に止められ、そこから発進・帰還することになっていた。

「ライトニング02、出る！！」

「スターズ02、行くぜ！！」

続いて、二人の後を追ひ、副隊長のシグナムとヴィータが空へ飛び出した。空戦魔導師でもある隊長と副隊長の四人は、中心の集団を蹴散らす役目だ。

「スターズ03、04、行きます！！」

「ライトニング03、04、出ます！！」

さらに、それぞれの小隊の隊員たちもめいめいに飛び出していく。「緊張して味方の邪魔すんじゃないわよ、スバル！！」

「分かってるって！！ 行くよ、ウイングロード！！」

スバルが叫ぶと、スバルのいるところから街へ向けて一直線に薄い魔力光が伸び、道が敷かれる。飛行魔法をまだ習得できていない二人は、その上を走って移動するのである。その横に、本来の龍の姿となったフリードと、その背に乗ったエリオとキャロがぴたり付きそう。

「アンタたちも、命だけは手放すんじゃないわよ！！ 初戦で死んだら、笑いの種にもならないんだから！！」

「せ、精一杯頑張ります！！」

エリオとキャロはそろって尻込みしかけながらも精一杯大声で答える。10歳でここまでの戦場に出る人間など普通はいない。むしろ、それだけ幼ければ緊張するところかおびえるのが真つ当な反応だ。だが、もちろんこの二人はそうはいかないし、そうはならないそれは、誰あろうスバルとティアナが一番よく知っていたことだった。

「フォワードは、街からこぼれそうになるガジェットを叩くんが今回の任務や！！」

「はやてさん！！」

いつの間にかはやてが横について飛んでいる。

「初戦であれだけの数はキツいんや、今日はいつもどおりに一体ずつ破壊してつたらええで！！ 無理だけはするんやないで！！」

今日何度目か分からないそのセリフを言い、はやては街から一つもガジェットを出すまいとすべく、速度を上げた。

先行して飛行するなのはとフェイトに、シグナムとヴィータが追いつく。

「見えた、ガジェット？ 型300体……結構な数だね」

フェイトは少しばかり戦慄した。数だけ聞いても分かりにくいが、

改めて自分の目で見るとその多さが良く分かった。街を覆い尽くすガジェットは、まるで灰色の川のような光景を、フェイトはテレビの自然ドキュメントでペンギンが集合している光景のようなものしか知らなかったし見たことが無かった。だが、これはペンギンの集まりなどというものとはわけが違う。よく見るとガジェット？型に紛れて？型がちらほらいる。

「どうする、なのは？」

「そうだね…… ヴィータちゃんとシグナムは前に出て？型を叩いて？ ？型は私たちが砲撃でまとめてやるから」

「わかった、それでいこう」

「よっしゃ、ちよつくら暴れてやるか……ん？」

そこまで言ったところで、ヴィータの言葉が不意に途切れた。

「どうしたヴィータ？」

「シグナム、ありやなんだ？」

そう言われシグナムはヴィータが指差した方向を見る。すると、その先の地表では、ガジェットに応戦する人影があつたのだ。

「なんだあれは！？」

シグナムもさすがに驚く。機械的な外部装甲を身にまとって応戦する6つの人影は、AMFに守られたガジェット相手に退くことなく、防戦一方だが少しずつ数を減らすことに貢献していた。

「もしかして、あれがヒロユキの言ってた『こつちの世界の戦つてる人間』？」

「多分そうだと思う……とにかく、私たちも応援に加わらないと！」

「よし、行くぞー！」

「承知した！！ 参るー！！」

シグナムとヴィータは、待ちきれないと言った様子で先陣を切り飛びだしていく。

「あ、ちょ、ちよつと待つてよー！」

「急ぐよ、フェイトちゃんー！」

なのはとフェイトは、その後を慌てて追いかける。

「飛竜、一閃!!」

「シュワルベフリーゲン!!」

シグナムとヴィータの攻撃が、十数体のガジェットを同時に消滅させる。それによって出来たスペースに二人は着地した。だが、その時、二人の後ろで息を飲む気配がした。違和感を感じた二人は同時に振りかえる。

そこには、先ほど見た、ロボットののような外装を身にまとった『武装人間』がいた。一人は赤紫色の、もう一人はオレンジ色の装甲を身につけている。そして、二人の後ろにもう一人、白亜の翼と騎士のような優雅さを併せ持ったような外装を身にまとった少年が着地した。

「応戦していたのはお前たちか？」

「そ、そうだけど、あんたたち誰よ？」

赤紫の装甲を纏った方の少女は、戸惑いながらも聞き返してくる。
「我々は時空管理局機動六課、私はその戦闘部隊副隊長のシグナムだ、こっちは同じく副隊長のヴィータ」

「時空管理局う？」

聞いたことのない組織名に、少年は露骨に怪しいという顔をする。
「アタシらのことは後まわしだ! とにかく、アタシらはこの世界から発信された救難信号に駆けつけたただだ」

「えっ、じゃああれが届いたの!？」

オレンジ色の装甲を付けた中性的な顔立ちの少女が、急にぱっと明るい顔になった。

「ああ、解読するのにちよつくら時間はかかったけどな。なにせ、管理局のデータにない信号だったし、この世界に管理局の手がまだ行き届いてなかったからな」

「とにかく、我々も加勢する！　このまま押し戻すぞ！！」

「了解！！」

後ろの二人の『武装少女』は、シグナムの掛け声に応じ、射撃を行う。シグナムとヴィータは撃ちもらしたガジェットを切り裂いていく。

「こちららストレスがたまってたんだ！！　今ここで晴らせてもらうぜ！！」

「熱くなるなよヴィータ！！」

「分かってらあ！！」

すると、その横に、先ほどの白亜の装甲の少年が追いつく。

「む、貴様、何のつもりだ？」

「悪い、俺は近接戦闘しかできないタイプだから前に出るしかないんだ……こっちに加勢させてくれないか？」

顔をしかめるシグナムに少年はそう言いつつ、手に持った日本刀のような近接ブレードを煌めかせる。そのうえ、よく見ると、少年の言うとおり、確かに彼の外装には副兵装らしきものは他に何一つとして見当たらなかった。どうやら近接戦闘特化型で間違いはないようだった。シグナムですら遠距離に対応できるすべを持ち合わせているというのに、それすら考えられていないとは、さすがにシグナムも、いっすがすがしいと心底で密かに思った。

「なるほど、了解した。くれぐれも無理はするなよ！？」

「分かってます！！」

「命こぼすんじゃねえぞ！！」

ヴィータが横から叫ぶ。

「子供に言われる筋合いはねえよ！！」

「なっ……アタシはガキじゃねえ！！　お前より年上だ！！」

「ははっ、そりゃ悪いな」

「てめえ、後でぶっ殺すからな！！」

そう言いながらも、三人はガジェットを破壊する手を止めようとはしない。その鬼気迫る無双のごとき動きに、後ろの二人の少女は

呆然とするほかなかった。

「すごい……あの人たち……」

「めちやくちゃ戦い慣れてるって感じね……」

そう呟きながらも、二人は射撃の手を休めることはなかった。

「くっ、これではキリが無い……!!」

漆黒の装備を身にまとう銀髪の少女は焦る。先ほどから全力で攻撃しているが、一向に数が減らない。このままでは、向こうが全滅するより先に自身の武装エネルギーが尽きてしまいそうだった。

「まだだ、諦めるな!!」

深紫色の装備を施した少女が、近接ブレードを手になにか迫る敵を切り裂いていく。武装が使えても、乗り手に限界が来ていることは明らかだ。だが、一人でも欠ければ押し返されてしまう危険性があった。

「どうしますの!?! 向こうの三方だって、いつまでも無事とは限りませんわよ!?!」

後ろで援護射撃を放つ、蒼い武装の少女が叫んだ。

「ちいっ……どうしようもないのか……!?!」

少女は覚悟を決めかけた。その時。

「デイベイイイン、バスタアアッ!!」

叫び声とともに上空から桜色の光が押し寄せてきて、前にいたガジェットを飲み込んだ。

「なんだ!?!」

三人は思わずその光が飛んできた方向を見る。すると、その方向からは、白い服の少女と、黒い服に白いマントの少女の二人がこち

らに急降下して来るところだった。

「大丈夫ですか！？ 怪我はありませんか！？」

二人の少女は着地するなり聞いてくる。三人は戸惑ったが、銀髪の少女が先に前に進み出た。

「こちらは大丈夫だ、救援感謝する。貴官らは何者だ？」

「時空管理局機動六課、戦闘部隊隊長、高町なのはです」

「同じく、部隊長のフェイト・テストロッサ・ハラウンです。救援信号を発信していたのは貴方達ですか？」

「時空管理局……ということは、お前たちが奴の言っていた『仲間』か？」

「えっ？」

「先ほど、高岡ヒロユキとかいう、人型機械に乗っていた奴が言っていたのだから？」

「ああ、そういうことですか……そうです、貴方達を救援に来ました」

「そうか、了解した。私はラウラ・ボーデヴィツヒ、ドイツ国家軍の所属だ。貴官らに協力しよう」

「分かりました。指示はこちらから出します、くれぐれも無理はしないでくださいね？」

「心得た」

なのはが指示を回す。それを把握したラウラ・ボーデヴィツヒは、後ろの二人に振り向きざま叫んだ。

「篠ノ之！ オルコット！ 聞いての通りだ、これより敵を押し戻すぞ！！」

「了解した！！」

「これから本番ですことよ！！」

呼ばれた二人の少女は一瞬飛び上がったが、すぐに真剣な顔つきに戻り、攻勢に転じたのだった。

「ええいつ!!」

真一文字に切り裂かれた人型が、一瞬置いて爆発する。空の敵はこれで全て殲滅した。

『敵撃墜を確認、付近に機影なし、殲滅完了しました』

『システムeX解除します』

ゼロが周囲を確認し、状況を告げる。同時に『システムeX』が解除され、『ガンダム』は元のいぶし銀の色の姿に戻る。

「よし、第一ミッション終了、これより、地上部隊の救援に回るぞ。エクス、お前は待機だが、目立たないようにしてることはできねえのか？」

『一応方法がありますが、とにかくそれは降りていただかなければ

……』

「分かった分かった。行くぞゼロ」

『はいマスター』

ガンダムを屈んだ体勢にし、ヒロユキはゼロを持ってコクピットから飛び降りる。

「エクス、それで、方法ってのはなんだ？」

『これです』

エクスがそう言うと同時に、コクピットが自動で閉まり、次の瞬間には、まるで幽霊のように機体の姿が足元から消えていった。

姿が完全に見えなくなってしまう。ぶつかりでもしなければ、誰もそこに人型機械があることなど分からないだろう。

「すごいな」

『機体の表面にステルス迷彩フィールドを展開し、機体を隠蔽するシステムです』

そう言うエクスの声は念話だった。隠れた以上、しゃべっていては意味も何もあったものではないから当たり前である。

「それじゃ、頼んだぞ」

『了解しました、マスター』

そう言ってヒロユキは駆けだした。隊長陣がこちらに加勢した以上、事態は恐らく収束に向かっていると思えたが、油断は禁物だ。どちらかでも劣勢に立たされていないか確認しようと通信を開こうとするヒロユキだったが、通信を開くより先に向こうから通信が舞い込んできた。

『ヒロユキ！？ そっちはどうや！？』

「あ、ああ、こっちは今終わったところだが……どうかしたのか？」
切羽詰まったように早口で話すはやてに、ヒロユキは思わず聞き返す。

『よかった、ほんならフォワードに加勢してくれへんか？ あつちこつちから敵が出て来とつて、フォワードが手間取ると私だけでカバーしきれへんのよ』

どうやらフォワードの墜としもらしをカバーしているはやてが、数の多さに苦しくなっているという状況のようだった。

「わかった、今どこだ？」

ヒロユキははやてから場所を聞き出したが、その場所は今居る所からは少し離れていた。足では明らかに時間がかかるが、かといってちんたらしては間に合わない。

「ゼロ、飛行魔法はコントロールできるか？」

ヒロユキの言葉に、一瞬ゼロは困惑したような顔をする。

『はい、できますが……飛んでいくのですか？』

「それが一番早い。走ってだと時間がかかり過ぎるからな」

『了解しました。飛行には、自分が磁石で浮き上がるようなイメージを浮かべてもらえれば、いけます』

「なるほど、わかった」

ヒロユキは言われたとおりに、地面と反発する磁石で浮き上がるようなイメージを浮かべる。すると、身体が軽くなったような感触の後、確かにヒロユキは空中に浮いていた。

「やってみると案外簡単だな、これ」

『マスターの資質のおかげですよ』

「かもな……行こう」

ヒロユキは苦笑しながら、空を飛んで、向かうべき場所へ急いだ。

Cross・14 カートリッジ・ブラスト

「あそこか！」

街の隅で小刻みに炎が上がっているポイントを発見し、ヒロユキは一直線にそこに向かって急降下する。

『マスター、大きな反応がいくつかあります。その周辺で味方と思われる反応が』

「フワードだな……そのデカイのを叩けそうか」

『問題はありません。どうしますか？』

「そうだな……お前を使ってみることにするよ。一応できるんだろ？」

『はい、もともとその機能もありますが』

「お前はアレをどう見る？」

ヒロユキは目線で、向かう先にいるガジェット？型を指す。

『形は違いますが、仮にもガジェットです、AMFを装備してる可能性が否定できません』

「となると、近接戦で仕留めるしかないな」

『はい、そういうことになります、とりあえず、持ち回りのよいタイプにしておきましょう』

そして、ゼロは光ったかと思うと、ヒロユキの右腕と左腕にそれぞれブレードソードの形になって固定される。その形に微かな即視感を感じ、ヒロユキは思わず聞き返していた。

「ゼロ、これは……」

『マスターの記憶にあった、一番マスターの身体に合致した近接スライルの形にしました』

「……どうりで似てるわけだよ」

ヒロユキは苦笑した。左右の手につけられたそのブレードは、傍から見ればヒロユキが自ら『物質変換^{トランス}』で、両手の細胞変化で作りに出せる『刃』とそっくりだったからだ。ついこの間、シグナムとの

模擬戦でそれを使った時の記憶がまだそこそこ鮮明に頭に残っていたが、改めて見ると、似すぎである。手首と腕に回された、固定するための金具こそあるが、刃の色合い、質感、どう見ても本物と差が見当たらない。ヒロユキは驚くしかなかった。

近づくにつれて、状況がだんだん読めてきた。向かうヒロユキの視線の先にあるガジェット？型の周りに人影が見える。オレンジ色と空色の魔力光が飛び交っているのも見えた。魔力光の色から察するに、相手はティアナとスバルのようだ。二人だけということは、恐らくはやてはライトニングのエリオとキャロのフォーローに回っている可能性が高い。つまるところ、はやてがティアナとスバルまでカバーできるかといわれれば怪しいということになる。

『マスター！！』

「あつ！？」

ゼロの叫び声に、ヒロユキは思わず前を見、そして慌てる。ティアナの援護を受けてスバルがガジェットに一撃を叩きこんだところであった。しかし、叩きこまれた相手はそれをものともせず、平然と二人に攻撃を仕掛ける。モグラの穴を塞ぐように連続で地面に突き立てられる相手の触手のような動線を二人はステップで避けるが、足にマツハキヤリバーを履いているスバルはともかく、ティアナは生身である。そう何度も避けられるものではなく、次第にステップがおぼつかなくなっていく、ティアナはついに足元をすくわれて転んでしまった。

「まずい！！」

ヒロユキは自分の飛行魔法の未熟さなどお構いなしに、一気にそのガジェットに向かって加速する。そして、ブレード形態となったゼロを、すれ違いざまガジェットの装甲にめり込ませるように薙ぐ。するとガジェットの装甲はたちまちのうちに、まるで包丁で切られた豆腐のごとくあっさりと両断され、一拍置いて爆発する。

「二人とも大丈夫か!? 特にティアナ!!!」

着地するなり二人を気につけ、後から思いだしたようにティアナを気遣うセリフを付け足しつつ、ヒロユキは振り向く。

「高岡副部隊長!?!」

「も、もう空は片付いたんですか!?!」

「そうだが、今はそんなことはどうでもいい、俺はお前らが大丈夫なのかと聞いたぞ」

まったく見当違いの答えを返してきた二人に、ヒロユキは呆れながらももう一度聞きなおした。

「あ、はい……大丈夫、です」

「なんとか……」

ポカンとしながらも、二人はようやくこのことで答えた。

「よし、よく持ちこたえてくれた」

ヒロユキはそれを確認すると、念話ではやてに確認をする。

【こちらヒロユキ、ティアナとスバルの二人に合流した。俺はこれからこっちで二人と迎撃すればいいのか?】

【おお、ヒロユキ!? うん、私はエリオとキャロのフォローに回つとつて手が離せんから、悪いけどそっちの援護、頼まれてくれへんか?】

【言われなくてもそのつもりだ、任せろ】

【おお、そらおおきにな〜】

えらく余裕を含んだような返しをされた。ひよつとして向こうははやてだけで事足りてるんじゃないかと、ヒロユキは余計なことを考えたりしたが、こちらは今はそんな余裕は生憎と無かった。

「来てます、高岡さん!?!」

「ああ、分かつてる!!! 見たところもうデカイのはいないようだな。二人とも、無理はするなよ!?!」

「了解!?!」

そう叫び、二人は再び迎撃を再開する。その後ろ姿を見て、ヒロユキは安堵にも似た感覚を感じていた。何なのかは分からなかったが、これで大丈夫だという安心感が、ヒロユキには確かにあったのだ。

「さて、行くか、ゼロ」

『了解しました。迎撃モードにシフトします』

両手のブレードが再び光に包まれる。しばしのち、ヒロユキの手には細身の銃。それが両手に二つあった。銃口の下に刃が付いており、銃剣であることが分かる。

「これは……」

『銃剣"ベイオネット"です。射撃線と格闘戦双方に対応したウェポンです』

「それはいいが、どこから持ってきたんだこんなデータ？」

それを聞いて、ゼロは一瞬ためらった後、思いがけない言葉を口にした。

『……分かりません。いつの間にか私の中にありました』

「はあ!？」

ヒロユキは耳を疑った。まるでブラックボックスだったのかとも言いたくなる。ゼロ本人が知らないデータがゼロ自身の中に知らずのうちにあったというのだから、驚くのは致仕方ないことだ。

「お前も知らなかったのか、こんな武装のデータは？」

『はい、残念ながら……』

ゼロは頂垂れる。デバイスとしての誇りか、プライドか。どちらにせよ、主を守らなければならない立場にあるデバイスであるゼロが、自らの知らないデータを知らず知らずのうちに抱え込んでいたというのは、ゼロ自身の自己管理の不行き届きと取れても仕方のないことだったからだ。真面目な士官なら眉間にしわを寄せるところだが、ヒロユキにはそのつもりは毛頭なかった。

「まあ、何でもいい、使えるなら関係ないさ」

『……心遣い感謝します、マスター』

「申し訳なく思ってる暇があったら、魔力コントロール、ぬかりなく頼むぞ」

『了解しました』

このあたりはさすが新世代デバイスの知能といったところだろうか、ゼロはすぐに頭を切り替え対応する。切り変わりの早さにはヒロユキも感心させられるところであった。

「さてと、いっちゃったるか」

ヒロユキは両手の銃剣を構え直し、一直線にガジェットの列へ突っ込んで行った。

一時間ほど経った後だっただろうか。不意に、廃墟の隙間から湧き出てくるガジェットの流れがピタッと止まった。

「ん？」

ヒロユキは通信回線を開き、確認をとる。

「スターズ、ライトニング！！ こっちにガジェットが来なくなっただぞ！？ そっちはどうなってる！？」

『こちらはまだだ、もう少しなのだが』

『こっちもまだだ！ 数が残ってやがる！！』

「なのはたちは！！？」

『殲滅を続けてはいるが、一向に数が減らん！！』

ヒロユキはそのシグナムの一言で確信した。

「なのは、フェイト、シグナム、ヴィータ！！ 気をつけろ、ここにいるガジェットがすべてそっちに向かった可能性がある！！」

『ええっ！？』

ようやくフェイトに通信がつながり、つながったとたんにフェイトの叫び声が飛び込んでくる。

『スバルたちは！？ 無事なの！？』

「こっちは俺とはやてがフォローしておいたから心配ない！！ それよりも、ガジェットはそっちに集中して攻撃をかけるつもりかもしれない、気をつける！！」

『き、気をつけるったって、どうすればいいの！？』

「これだけの戦闘を続けてれば、お前らにもこの世界の人間にも相当の消耗が来てるはずだ！ やむを得ない、カートリッジシステムを使ってでも短時間で敵を出来る限り殲滅させる！！ 一撃で仕留めきれなければ俺がやる！！ そっちに向かうまでに、一発だけでも攻撃を加えられるか？」

『……………わかった、やってみる』

通信は、そこで切れた。

「頼むぞ、レイジングハート、バルディッシュ……………」

フレーム強化を施していない以上、使った後のデバイスの安全は保障できない。優秀な『二人』が最悪の事態にならないことを祈りつつ、ヒロユキはその場を飛び立った。

……………

『やむを得ない、カートリッジシステムを使っても、出来る限り敵を殲滅しろ』

苦渋がにじみ出た言葉が、私とフェイトちゃんに突きつけられた。

技術部が、対未確認エネミー用として急遽開発したカートリッジシステム。シグナムやヴィータちゃんのデバイスにそれと似たよう

な機能があるのは、うすうす模擬戦とかで知ってはいた。けど、まさか道の敵の対策に、管理局が古代ベルカの技術に手を出すなんて私には正直予想外だった。100パーセント確立されていない技術を最前線に送り込むなんて、失敗が伴うリスクを冒してでも勝たなければならぬほど、管理局、ひいては私たちが追い詰められてるってことになる。

可能性は100じゃない。だけど、今はその完全じゃない可能性に賭けないと勝てない。

「行こう、フェイトちゃん」

「本気なの、なのは？」

フェイトちゃんは不安がぎっしり詰まった顔で聞き返してきた。

それはそうだよ。でも、今はそんなこと構ってられない。

「フェイトちゃんも聞いたでしょ？ 今は何とかする方が先なんだよ」

「だ、だけど、まだ試し撃ちもしてないのにそんなこと……」

フェイトちゃんの言うことはもつともなこと、だけど、そんなこと言ったら、チャンスは永遠に失われてしまう。

「今は難しくて、やらなきゃいけないんだよ……大丈夫、私たちがなら出来るから」

嘘。ホントはできる保証なんてない。でも、そう言わないと出来ることも出来ない。踏み出すことさえできない。大切なのは出来るか出来ないかじゃない。やるか、やらないか。ただそれだけ。

フェイトちゃんは迷った顔をしたけど、コクリと頷いてくれた。踏み出す勇気は、私よりフェイトちゃんに必要なことかもしれないって、私は密かにその時思った。

目の前を蟻の群れのようにこちらに向かってくるガジェットの集団に、私たちは向かい合う。

「レイジングハート、ブラスターモードシフト。カートリッジロード」

『All right, Release Bluster Mode, Road cartridge』

「バルディッシュ、カートリッジロード、魔力収束」

『Road cartridge, Power charge s
tert』

私とフェイトちゃんの前に魔力の光が集まっていく。同時にレイジングハートとバルディッシュが、ガシャッという音と一緒に、薬莢をひとつずつ弾きだした。

「っ!!」

私とフェイトちゃんは同時に小さく呻いた。薬莢が弾きだされた途端、何か重いものが心臓の上に置かれたようなショックが来た。カートリッジシステムは、魔力が込められたカートリッジを使用することで強制的かつ一時的に魔力を増大させるシステム。でも、それは、術者の許容範囲を超えた魔力を否が応にも本人に押し付けることになる。限界を超えた魔力を扱えば、デバイスにも本人にも負担はかかる。

だけど。

「デイベイイン——」
「プラズマアア——」

——これで何かを救えるのなら、たとえ苦しくても、救ってみせる。

「バスタアアアッ！！」

「スマツシャアアッ！！」

レイジングハートの先端から、フェイトちゃんの左手から、今までの私たちのそれよりも格段に大威力の砲撃が、特大の魔力光になって放たれた。そして、その光は真っ直ぐ、目の前を埋め尽くすガジェットの集団に直撃し、凄まじい光と轟音ともにそれを金属の欠片と爆煙へと変えていく。あまりのことに、私もフェイトちゃんも思わず目を瞑った。

光と爆煙がおさまった時、私たちの目の前にあったのは、運よく直撃を免れたらしい生き残りのガジェットが数体だけだった。その生き残りも、先ほどの攻撃でショックを受けたのか、動きがガタガタと、明らかに異常が起きていた。

そして、次の瞬間にはその生き残りが、空から降ってきた一条の水色の光に撃ち抜かれ、すべて沈黙した。

「大丈夫か！？」

私たちの目の前に着地したヒロユキ君は、私たちの方を向くなりそう聞いてきた。まあ、私たちの息が上がっていたらそう聞かれても無理はないけれど。

「はあ、はあ……だ、大丈夫」

私は残された気力で精一杯の虚勢を張ってみせる。

「どこがだよ、息が上がってるそのどこが大丈夫なんだ。まったく、ぶつつけ本番とはいえ、これくらいの結果を出せたなら文句なしか。しばらくはお前らもトレーニングが必要だろうな」

「あはは……」

けれど、その虚勢はあっさりと切り捨てられてしまった。まあ、せえせえ言いながらそんなことを言っても説得力に欠けるのは分かりきってるから仕方が無いけれど。

「ま、でもよくやったよ、お前らは。助かった」

「……どういたしまして」

でも、その一言で、私はその疲れなんてほとんど気にならなくなった。少ない言葉だったけれど、そこには確かに何かを守れたという感触があったから。

レイジングハートは相当反動が来たと言っていた。つまり、本当はもつと苦しかったのだろっけけれど、それはレイジングハートが魔力の流れを上手くコントロールして、負担が少なくなるようにしてくれていたということ。

——ほんと、助けられてばかりだね、私。

誰にも聞こえないように、私は小さく呟いた。その声は、煙が晴れ日が傾いて赤く染まった夕方の空に吸い込まれていった。

.....

一瞬、自分が放った砲撃なのかと、私は目を疑いたくなった。

ガクツと来る負担の代償に得た力は、今までの本気を軽く超越したパワーだった。横のなのはでさえ、今まで私が見てきた中でも敵うものが無いんじゃないかというぐらいの攻撃を放っていた。

『攻撃完了。冷却開始』

バルディツシュが告げる。同時に回転部に付いた突起が動き、蒸気が噴き出す。システムが熱を持つぐらいの魔力を使った攻撃。それを今自分の目で見たが、未だに信じられない。

「だ、大丈夫？ フェイトちゃん……」

なのはは息が上がっていたけれどそう聞いてきた。もっとも私も同じ状態で、そんなことを気にする余裕はあまりなかった。

「な、なんとか……」

自分の状態が今どうなのか確信が持てなかった私はそう返しておく。カートリッジをロードしたときのあの衝撃が、自分の身体にどんな影響を及ぼしたか見当がつかない。はつきりとした答えが無い以上、私はなんとも言うことができなかった。

「大丈夫か！？」

自分のことなど気にもかけず、ヒロユキは私たちのことを気遣う。他人のために自分を砕くところはなのはとあんまり変わらないなど、私は苦笑した。

「大丈夫……だよ」

私は余計な心配をさせたくないからか、そう答えていた。でも、その答えは一瞬で切り捨てられてしまった。

「どこがだよ。息が上がってるそのどこが大丈夫なんだ」

うすうす思っていたけど、やっぱりそうだった。それはそうだ。

息が上がってる状態で大丈夫だと言っても説得力には欠ける。むしろ見た目で大丈夫じゃないのが明らかだ。でもそうでも言わないとこの疲労はぬぐえそうにないという気も、私は少しした。

「ま、でもよくやったよ、お前らは。助かった」

でも、ヒロユキが不意に言ったその一言で、私は驚くと同時に疲れが半分くらい吹き飛んでしまった。たった今、そう簡単に取れそうにないと思っていたばかりなのに。どうしてヒロユキに言われると、こうも安心するんだろう。

相変わらず優しいね。

私は率直にそう思った。

昔と変わらない。表は言葉も少ないし、近づきにくいかもしれない。でもその内では、誰よりも優しいし、誰よりも気持ちを理解してくれているから。

.....

.....

その後、ガジェットの完全殲滅を確認した機動六課は、保護した6人をヘリに乗せ、機動六課本部へ帰還した。その夜は全員が疲れて早く寝ついてしまったが、始末書に急かされたヒロユキとはやはその時間が削られる羽目になった。

「ヒロユキはどう思うん？」

人気の無くなった隊長室で、不意にはやてが話を切り出す。始末書の整理がようやく済み、茶を啜っていたヒロユキはその手を止めた。

「何がだ？」

「あの身体装着式の装甲みたいなやつのこと」

はやてはあの世界にいた6人の姿に未だ疑問が消えないようだった。まあ無理もない。ほとんど生身に近い姿の人間が、機銃だのブレードだのミサイルだのビームだのを扱いながら飛びまわっているのは驚いて当然だ。そして、それがミッドチルダで見かけないのだから疑問が解決に向かうはずもない。

「恐らくは、あの世界ではアレが普通なんだろうな」

「せやな……あれがこの世界で言うバリアジャケットみたいなもんやったら、つまりあれがあの世界の武器みたいなもんやいうことか」
「そうだな……けど、気にならないか？」

「なにがや？」

今度ははやてが手を止める番だった。ヒロユキは構わず続ける。

「あの街にあの6人しか人がいなかったってことがだよ」

ヒロユキははやても予想していた、しかし言いだせないその不可解な事実をこともなげに言う。

「……ヒロユキはどう思うんや？」

はやては一瞬表情を固くしたが、冷静にそう問い返した。

「正直に言うなら、最悪の可能性も想定に無くはない。まだ希望を捨てちゃいないが、そればかりはあいつらから話してもらわないとどうにもならねえな」

「私も同意見や。今はまだ情報が少なすぎる。あの6人から情報が得られたら、必要に応じてまたあの世界に行かなあかんかもしれへん」

「だな……なんであれ、明日からいろいろ話を聞いてみなけりやならん。くれぐれも、関係者以外には極秘だぞ？」

「わかつとるよ」

関係者とは、あの世界に出向いた機動六課のメンバー、すなわちスターズ分隊、ライトニング分隊、そしてはやとヒロユキの十人である。一連のことはすべて極秘にと、前々からクロノにも頼んでいたこともあり、今回は一般の隊員には情報は一切流れなかったのだ。

「明日からまた忙しくなるな……」

「せやな……私ら、体力もつかない……」

「心配ならとつとと寝ろよ。俺もちょうど眠気が来たところだ」

ヒロユキはそう言っただけで寝る。時計は0時を回っていた。さすがに眠くなってもおかしくない時間帯である。

「あはは、ほんなら私らも寝よか」

「ああ、そうだな」

「なんなら一緒に寝る？」

「遠慮しとく」

「もー、面白いな」

はやとの冗談を速攻で切り捨て、ヒロユキは隊長室を後にした。

はやとと同じく、疑問が頭に浮かんで消え、浮かんで消えを繰り返していたが、床に伏せたとたん、すぐにそんなことは綺麗にどうでもよくなり、睡魔にあっさりと意識を奪われてしまったのであった。

Cross・15 背負った責任

暗闇に閉ざされた深海からゆっくりと意識が引き上げられた。開くことをまだ渋っている瞼を強引にこじ開け、出来た半開きの隙間から部屋の様子をうかがう。窓の外は登り始めた朝日が白く塗りつぶして行っている途中のようだ。

時計を見ると6時を少し回ったところだった。どうも最近このパターンの繰り返しである。疲れきって早く寝た日に限って、どういうわけか次の日の朝は早く目が覚めてしまう。しかもそう言いつつ身体の疲れはしっかりと取れてしまっているのだから都合のいいものだ。俺は不眠動物か何かの類か。

しかし、覚めてしまったものは仕方がない。二度寝したところで頭痛の種になるか寝坊の原因になるのがオチだ。俺はさっさと諦め、朝の空気を吸いに行くことにした。

身支度を済ませ、部屋を出たところで、

「あ」

「……ふあ？」

隣の隊長室から出てきたはやてと鉢合わせした。

「うんあ……ヒロユキ……おはよう……んにゅ……」

目をこすりながらスローに挨拶をするはやて。どう見ても目が覚めきっていない。目は半開きで、ポケーと何とも間の抜けた顔をしている。髪でさえところどころ寝癖がついていた。これで部隊長とは、初見で誰も信じられまい。

そう思いつつ、あまりの自覚の無さにイラッと来たので、俺は念話でゼロに一つの指示を出しながらはやてに挨拶を返す。

「あ、ああ、おはよう……」

懸命に平静を装ったが、顔が引きつってどもってしまった。

「うゆ……まだ眠いわぁ……」

完全に放心状態で返事をするはやて。部隊長の威厳など欠片も無い。

「顔洗ってこい。そのうちどっかで転んでも知らねえからな」

「おおきに……ふわぁ……あ……」

欠伸をしながらはやてはのろのろと部屋の中へ戻っていった。それを確認してから、俺はゼロに小声で話しかける。

「どうだ、上手くいったか？」

『はい、ばっちり』

「そうか。よしよし」

その答えに俺は氣をよくしたが、同時にその結果を知った時のはやての顔を思い浮かべてしまい、強烈に笑いがこみあげてくる。今にも噴火して爆発しそうな笑いのマグマを必死で噛み殺しながら、俺は階段を下へ降りて行った。

海から機動六課のある丘へ吹き寄せる東の海風は、潮の香りを含みながらも、まだ少し冷たかった。それでも、前にいたところに比べれば目覚めははるかにマシだ。海など見えることのない僻地に十年余りも住んでいれば、それこそ慣れてしまつて新鮮さが欲しくなつてくるといふものだ。俺はその新鮮味を味わうかのように深呼吸を繰り返し、潮騒がほのかに混ざつた早朝の冷気を肺に満たした。

正面に海を一望するこの丘に来るのは今日で四度目だ。魔法の鍛錬となれば、これ以上それにうつつつけの場所はないだろう。訓練場を使つてもいいのだが、押し込められた空気の中でやるのは何となく氣が引ける。限らない解放空間の下で鍛錬を行う方が自然になるし、何より気楽だからだ。

「魔力弾に魔力反発性を付加、練成開始」

ブツブツ言いながら、生成した魔力弾を彫刻刀で削るように加工を施していく。魔力弾をなす魔力が少しずつ圧縮され、次第に鋭い槍のように形を変えていく。

今俺が何をしているかというところ、一からの魔法術式の構築である。機動六課に来てからかれこれ二週間になろうとしているが、俺は未だにゼロにストックされたコピー術式しか使うものが無いのだ。それも、すべて他のデバイスから取ってきた、とりあえずの場しのぎでしか無い。

また、術式は全て、本来使う人間の魔力特性や得意分野に合わせて、魔力圧縮率、魔力変換率などがカスタマイズされている。そうになると、お世辞にも俺にとって扱いやすいものであるとはいえない。俺の能力を100パーセント生かすには、時間はかかるが一から俺の性質に合わせて術式を構築する必要があった。

加えて、もう一つ理由をあげるとするなら、俺が今置かれている位置である。仮にも副部隊長である俺が他人の術式しか使えないとなれば、それはもはやメンツにかかわる、いやそれ以前の問題だ。上ランクの魔導師ならば、自分の戦闘スタイルに合わせて自分自身と自分のデバイスをカスタマイズし適応させていくものである。管理局に入ってからまだ一カ月もたっていないのだが、だからといって副部隊長を任された以上、自分の力については自分で責任を持つしかない。肩書き相応の実力など、独力で作り上げられなければ長を名乗るべきではないのである。

そして、俺は今、誘導型射撃魔法の術式の練り上げをやっている。魔力弾生成そのものは少しコツさえつかめば誰でもできるが、それを目標に当てる技術となると簡単にはいかない。

事実、フェイトやはやてなんかは、射撃魔法は全て真っ直ぐ進むだけの直射型であり、フェイトの『フォトンランサー』の場合、魔力圧縮率が高いためダメージはなのはの『アクセルシューター』に勝るが、いちいち止まってから反転しなければならないという手間がかかる。反面、『アクセルシューター』は、圧縮率の低さゆえダメージはそれほどではないが、速度と誘導性に優れ、動きながら目標に向かって止まらず確実に当てることができる。

ここから分かることは、魔力を圧縮すればそれだけダメージが高くなるし、速度を上げれば相手に当てやすくなるということ。だが、その間に問題がある。高い魔力圧縮率と高速度の両立はなかなか技術を要することなのだ。

空中にある魔力粒子などの要因が絡み、最初から最後まで高レベルの圧縮率を維持することは出来ない。空中の粒子にぶつかれば速度が落ち、魔力弾に負担がかかる。圧縮率が低すぎると、速度を上げ過ぎた場合先ほどのように魔力弾自身が耐えきれず砕け散ってしまうのだ。そのうえ、圧縮率維持とコントロールに精神を使うため、両方を同時にこなすのは極めて難しい。

そこで、現実性を重視するためには速度か威力のどちらかを捨てなければならぬのだ。いくら威力が大きくとも、当てられなければ本末転倒である。

つまるところ、広く見れば、動きながら目標を追尾できる射撃魔法を扱えるのは、なのはやティアナのような射撃戦特化の魔導師くらいだったりする。近距離を捨てれば、それだけ鍊度の高い射撃魔法を扱えるからだ。

かといって、近接戦に特化したフェイトやスバルが射撃魔法を使わないかと言えばそうでもない。使えることは使えるが、先に言ったように誘導性などはほぼゼロに近いのだ。

しかし、俺はそこでどちらかのスタイルに妥協する気にはなれなかった。俺の得意な戦闘スタイルは遠距離を中心としたオールラウンド。つまりなのはとフェイトの中間に位置する。そうである以上なのはとフェイトそれぞれの短所を補って余りあるものにしなければ意味がない。それ以下で甘んじることが、俺の超能力者としてのプライドが許さなかった。守るため、跳ね返すための力を、俺の本能が追い求めていた。

完璧を求めるよう作られた、俺自身が。

「行け、ブラスト・ファイア!!」

魔力弾に命じると、魔力弾はその通りに動きだす。

「そら、とっ、はっ、ほっ」

魔力弾を思念と手で動かし、方向を変える。光跡を丸く空に描き、魔力弾は朝焼けの空を右往左往に飛び回る。

「はあっ!!」

調子をよくした俺は、魔力弾を急停止させ同時に鋭角を描いてターンさせる。だが、急停止したまでは良かったが、ターンしようとしたところで魔力弾は針を刺した風船のように粉々に弾け飛んでしまった。

「ちっ……まだ魔力弾の錬度がいまいちだな」

『はい、スピードと圧縮率がかみ合っていないですね……今の錬度ではスピードに耐えられないということになります』

「もう少し圧縮率を上げないと無理か……」

俺は悔しさが滲んだ。つくづく自分は悲しい性を持って生まれた

ものだと思う。頭では無理なんじゃないかと思ったりしていても、力はそれを可能にさせるべくあちこちから湧き上がってくる。まるで俺の超能力自身が果てしない欲望と向上心を持ったように……。

『お止めになりますか、マスター？』

俺を氣遣ったゼロが遠慮がちに聞いてくる。しかし、それくらいでやめるつもりはまだ俺には無かった。

「いや、続けるさ。生憎と、最高の作り物たる俺の身体が、まだやめるつもりが無さそうなんだな」

『わかりました。私も全力でサポートします』

「助かる」

俺はゼロの厚意に感謝を言つと、そのまま朝食の時間まで鍛錬を続けたのだった。

.....

格納庫の前に、機動六課の戦闘部隊と、救助された6人が並ぶ。

緊張感が張り詰めた中、はやてが深呼吸を一つしてから前に進み出る。

「昨日は色々ありましたが、皆さん全員が無事で何よりやと思います」

独特のイントネーションでたどたどしくも威厳を保ちつつ、はやては言葉を続ける。

「私たちは時空管理局特別部隊第6小隊、通称機動六課です。私は部隊長の八神はやて言います」

そこまで話し、はやては周りを見渡す。6人にはまだ何の反応も無かった。

「昨日、貴女方が襲撃された件については、時空管理局が責任を持つて解決にあたります。ですが、あちらの世界がまだこの世界からの渡航手段が確定されていないため、いざという時救助に手間取る可能性があるので。そのため、貴女方6人の身柄を一時的にこちらで保護せざるを得ません」

「なんだって！？ どういうことだよ！？」

身柄を保護、という言葉に、6人の中でただ一人の少年が反応した。

「言葉の通りです。あのまま貴女方があの世界にとどまっていると、同じ事態が起こる可能性があるからです」

今度はフェイトがフォローを入れるが、反論の口はかえって増えた。

「納得がいきませんわ！ 理由を説明してくださいませんか！？」

「そうよ！ 意味も無くここに縛られるなんてまっぴらよ！」

少年と違う声が反論してきた。他のメンバーも、言葉を発しこさないが、訝しげな視線で眉根にしわを寄せている。

「では理由を言います。今回の事件が起こった原因は、恐らく貴女方にあると考えざるを得ないからです」

「！？」

6人全員の顔が引きつる。まあ、あの敵の群れが、まさか自分たち目掛けて集まってきているとは、普通には考えられないだろう。だが、全員まだそこまで至っていないかつたらしく、訳が分からないという顔だった。

「今回貴女方を襲ったのは、『ガジェット』という自律行動型の機械兵器です。この兵器は無人で、ロストログアに対して集まる習性があります」

「ロストロギア？」

誰かが疑問を呈する。6人全員が？を頭の周りに浮かべていた。

「ロストロギアというのは、あちこちの世界から流出する、極端に進歩した技術やその産物のことを言います。ガジェットは時にそれを回収することもあり、そのためには何を破壊することも厭いません。その被害を食い止め、ロストロギアの回収、およびガジェット殲滅を目的として、我々機動六課が活動しています」

「それはわかった。けど、それが俺たちの身柄保護と何の関係があるんだよ？」

少年はまだ不満そうな顔だった。

「分からないか？ ガジェットはロストロギアに集まる。そして、今回ガジェットが群がったのはあの世界の飛び抜けた技術。つまり、お前らがつけていたあの機械装甲こそがガジェットを引き寄せたロストロギアということだ」

ヒロユキはいい加減イライラが我慢できなくなり、きつぱりと言いつ切る。

「インフィニット・ストラトスに！？」

別の誰かが驚く。あの機械装甲の名前であろうか。

「そういうことだ。あの街に他に何かハイテクノロジーの産物があったかは分からないが、少なくともお前たちが原因の一端である可能性は否めない」

「いい加減なことを言わないでくれ！！」

別の少女が噛みついてくる。その目は真っ直ぐで、正義感が強いということは一目でヒロユキには分かった。

「そつだ！！ 俺たちが原因じゃないかもしれないじゃないか！！」
少年も加勢する。

「そうだな、もしかするとお前たちが原因ではない可能性もある……」

ヒロユキは俯き加減にそう呟く。一瞬6人の間にほっとしたような空気が流れたが、ヒロユキはそれを切り裂く。

「だが、仮にお前たちが原因ではなかったとしても、お前たちだけであの場を切り抜けられたという保証はどこにもないはずだ」

「……………！！」

6人が全員押し黙った。それは紛れもない事実だからだ。救難信号まで出しておいて、今更あの時何とかかなりそうだったなどという言い訳が通じるはずはない。そして何より、空のあの人型の敵に6人がかりで挑んで傷一つ負わせられなかったということが、明らかに形勢不利を物語っていた。

「ここにいないかいはお前たちの自由だ。帰りたいというなら引き留める理由はない。だが、帰ったところで、今回と同じ事態が起こる可能性は否定できない。万が一再びガジェットが押し寄せてきたとき、お前たちだけで太刀打ちできる保証があるか？俺たちも、常にそっちの世界に行ける状態というわけじゃないんだ」

「……………」
ヒロユキの問いに答える者はいなかった。

「時空管理局は、すでにガジェット警戒のため、あの世界への局員の派遣を決定しています。いざというときは私たちもまた行くことになります。ガジェットだけなら十分に撃退できる筈です」

はやてが静かに口を開く。

「貴女方に責任はありません。管理局がそちらの世界を把握できていなかったのもまた事実です。ですが、貴女方があちらの世界に戻

つて、再びあの世界とそこに住む方々を危険に晒すのを見過ごすわけには行きません。ガジェットの出どころと原因が特定出来るまでの間だけで構いません……どうか管理局に協力していただけませんか？」

はやてはそう言つて頭を下げる。もう何度下げたか分からない頭だが、だからこそはやては今の肩書きを得られたも同然だった。そして、命を救うためなら、喜んで下げる覚悟がはやてにはあった。

「それはお前たちに協力するか、ここに鎖で繋ぎ止められるかのどちらかを選ぶということか？」

沈黙を破つて口を開いたのは、銀髪に眼帯をした少女だった。その声に、ヒロユキは微かに聞き覚えがあった。

「そう捉えていただいて構いません。我々にも、平和を守るための意地と覚悟がありますから」

「もう少しストレートに言えば一夏も余計な反発をしなかったかもしれないものを……随分とお前は誘導が巧みだな」

「伊達に私も部隊長の肩書きを背負つてるわけやありませんから」はやては苦笑しながらも、言葉の真摯さは崩さなかった。それに納得したのか、彼女は口元に笑みを浮かべ、答えた。

「よかるう。このラウラ・ボーデヴィツヒ、非才の身なれど、及ばずながら協力させていただきます」

「ラウラ!？」

別のツインテールの小柄な少女が驚いた様子で叫ぶ。

「何を驚いている、^{ファン}鳳」

「何じゃないわよ!! アンタつてば、こんなわけのわからない組織に協力するつもりなの!？」

彼女の言葉に、他の四人も同時に頷く。

「先ほどから聞いていて分からなかったのか? 我々に選択の余地

はない」

「けど!!」

「私は最も無難な策に乗るだけだ。お前たちが拒否しても私には止める権利はない」

「だったら何ですよ!!」

なおも食い下がる彼女に、ラウラはきっぱり言い放った。

「このまま我々が元の世界に戻っても何の解決にもならんからだ」

ラウラの目は反論を許さなかった。

「分からないのか？ 我々6人がかりであの人型機械に挑んで傷一つ負わせられなかったのだぞ？ あの敵を招いたのが我々なら、あの世界から敵を遠ざける責任も我々にある。このまま戻って、我々がこの先あの世界で無事でいられる保証がどこにある？」

「……っ、けど……!!」

「死に急ぐなら止めはしない。だが、私はまだ死にたくないんだ、あの世界を守り、自分の命も守れる方法を選ぶのは当然だと思うが？」

完全に反論の糸口を封じられた少女は黙り込む。少しして、今度は傍にいた金髪の中性的な顔立ちの少女が口を開く。

「では、私たちがここに留まるとして、貴女方だけであの敵を殲滅できる確証はあるのですか？」

「100パーセント可能とは言いきれない」

ヒロユキのその言葉に、彼女とラウラ以外の四人が再び驚いた表情になるが、反論が出る前にヒロユキは言葉を最後まで言い切る。

「だが、少なくとも、お前たちがここにいるならば、あの世界に再び敵が来る確率は下がるし、来たとしてもお前たちだけの時よりは確実に敵を撃退できるということは確かだ」

少女はそれを聞いて少しの間黙って考え込んでいたが、やがて口を開く。

「分かりました。私も協力します」

「ちよつと、シャルまで何言ってるのよ!？」

先ほどの小柄な少女が彼女に食ってかかる。

「だって分からないの!？ このまま私たちが戻っても、あの世界にまた敵が来ないなんて言いきれないんだよ!？ またアレが来たら、鈴は撃退できるって言いきれるの!？」

「……っ!！」

正論をつかれ、少女はまたしても黙り込む。どうやら感情的な行動が多いようだ。目の前のことに感じた思いだけで動くタイプだろう。

「我々は、時間がかかろうと、絶対に我々の世界を救いたいのだ。奴らに協力するのが嫌ならば、とつとと向こうに帰るがいい。そして、明日死ぬかも知れんという恐怖と闘いながら生きればいい」

冷徹な瞳でラウラは言葉を叩きつける。それを聞いて、四人は俯いてしまった。

「まあ、それくらいにしておいてあげたら？ いきなりすぎて皆まだ考えがまとまってないんだよ」

フェイトが空気を見かねて横からそれを制する。

「あ、ああ、そうだな……とにかく、我々二人はそちらに協力の意思があるということを伝えておこう……えっつと……」

「高岡ヒロユキだ。心強くて助かるよ」

「フェイト・テストアロツサ・ハラウンです」

「高町なのはです。どうぞよろしくね」

「さっきも言っただけ、八神はやてや。よろしゅうな」

「よろしく頼む。改めて、ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「シャルロット・デュノアです。呼びにくかったらシャルと呼んでください。お世話になります」

互いに握手を交わす。この日の会合は結局、ラウラとシャルロットの同意を得ただけで、他の四人はまだ決めかねたまま終わりを迎えたのであった。

「そう言えば、お前たちの着けていたあの機械装甲はなんなんだ？」
数時間後、夕食の席で、ヒロユキは向かいに座ったシャルロットに尋ねた。

「ん？ インフィニット・ストラトスのこと？」

彼女は聞き覚えのある、しかしミッドチルダでは聞き慣れない単語を口にした。

「そういう名前なのか？」

「うん。インフィニット・ストラトス、通称ISは、もともと私たちの世界で開発された一種のパワードスーツってところかな。その目的はあくまでスポーツ、いわば扱いの腕前を競う程度の目的しか無かったんだけど……」

「何か不都合が起きたってことか」

シャルロットがそこで言葉を切ったのを見て、ヒロユキは何かを悟った。

「当然、ISは今までの戦いそのものの概念を覆しかねないものだったんだ。操縦者に合わせて進化し、強くなっていくものだからね」
「へえ……」

「だから当然、世界は競って自国の力を誇示するためにISを建造したんだ。戦争にまでなったりはしなかったけど、色々とはっちりを受けてね」

「大変だったんだな」

「うん……特に辛い思いをしたのが、彼女……第なんだ」

そう言ってシャルロットは、向こうに座って黙々と食事が続いているポニーテールの少女を視線で指差した。

「とてもじゃないがそうは見えないんだが……」

「……実は、ISの根幹となるシステムを世界で初めて開発したが、あの子のお姉さんでね……」

「……………」

「ISの仕組みを知り尽くしているのも、彼女のお姉さんだけだね……。おかげで、彼女は世界から姉ともども指名手配されたも同然な扱いを受け続けてきたんだ……。彼女のお姉さんは今もあの世界で行方不明のままで……」

「……………」

ヒロユキはそれしか言うことができなかった。これ以上その話を突っ込んで知ることは憚られた。開発したのが姉である以上、彼女がISというあの武器を扱っていることは全く不自然ではない。姉がISを生み出したがゆえに世界から追われ、今またその原因となったISを着て戦っているとは、なんとも皮肉な話である。ヒロユキは待つしか無いと思った。いや、むしろそうせざるを得なかったというべきか。個人の問題に土足で踏み入るわけにはいかないし、何よりそれが世界の根幹を揺るがすもの、ひいてはロストロギアたるものに関っているとなればなおさらだ。ロストロギアに関する手掛かりを得られにくくなるのは残念だったが、人の命には代えられない。

「そうだ、とりあえず、お前たちのインフィニット・ストラトスつて言っただけか？ そいつの性能とかを明日ある程度見たいんだが」

「それは模擬戦をするということか？」

シャルロットの隣に、ラウラがトレイを持って座る。

「まあ、そういうことだな……ていうか、アレって普段はどうやってしまっているんだ？」

ヒロユキは不意に湧いて出た疑問をぶつけてみる。

「ああ、これだよ」

シャルロットは首元からネックレスを取り出す。その先端には十字型のオレンジ色をしたネックレストップが付いている。

「……………これが？」

「うん……あ、信じられなかった？」

シャルロットは意地悪そうな笑みを浮かべて見せる。

「いや、別に……ただ少し驚いただけだ、あまりにデバイスと似通ってるんでな」

それはヒロユキの率直な感想だった。持ち運びに困らない待機状態の姿と、戦闘時に使用者を防御するという仕様特性。これだけ似ていると、仕組みまでそっくりなのではないかと思ってしまう。

「デバイスだと？」

「ああ、説明していなかったな、このことだ」

ヒロユキは襟元に付いたX字型のピンズを摘んで見せる。

「デバイスのゼロだ。お前たちのISと根本的に違うところは――

――

『自律的な頭脳を搭載しているところだ』

ゼロの声がヒロユキの言葉を遮って響く。

「ひえ！？」

「なっ！？」

ラウラとシャルロットは驚いて同時に箸を落としてしまった。

ヒロユキは同時に頭を抱える。ゼロの話の入りはどうしてこう突飛なのだろうか。どう考えてもピンバッチが喋るということは初見

で予想できる筈もないが、だからといって今回こそは事前に喋るということをヒロユキは喋ろうとしていてそれをゼロに遮られてしまったのも事実だった。まだまだデバイスとの意思疎通の不足を感じずにはいられないヒロユキだった。

「悪い、驚かせちゃって」

「う、ううん、大丈夫……」

そう言いながらもシャルロットは胸を押さえている。相当心臓にキたらしかった。

「お前たちの世界では、モノが喋るのが普通なのか？」

ラウラは引きつった顔を必死に隠しながら聞き返してくる。

「いや、俺とかのは特別だな。デバイスでも自意識を持たないものだってあるし——」

「逆に私みたいに独立して動けるモノもあるですよ！」

リインが三人の間の机に着地する。その途端。

「……………」

ラウラとシャルロットが一瞬でセメント人形のように硬直した。

ヒロユキはまたしても頭を抱えてしまう。

「ん？　どうかしたですか？」

何も知らないリインは首をかしげる。

「お、おい、なんだこの小動物は？」

「むっ、リインは動物じゃないですよー！」

「よ、妖精……？」

「妖精……なんかいいかもです……じゃなくて、リインは妖精でもありません！」

リインは一瞬恍惚とした表情になりかけたがすぐに否定する。

話が進まないでヒロユキは強引に説明を切り出す。

「——自意識を持つ以外に、こういう完全に独立した人の姿と

人格を与えられたデバイスもある」

「そ、そうなんだ、あはは……」

シャルロットは完全に状況に置き去りにされている。

「……………」

ラウラに至っては引きつった顔を浮かべながら、ものも言えず固まっている。

「まったく、リイン、もうちょっと出てくるタイミングを考えろって……二人ともこの世界の常識を知らないんだぞ」

「あ、そうでした……ごめんなさいです……」

「……やれやれ……とにかく、二人とも紹介しておく。この機動六課で戦闘部隊補佐と現場管制を担当するリインフォース？曹長だ」
「改めて、リインフォース？です。リインと呼んでくれて構わないですよ」

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ。よろしく頼む、曹長」

「シャルロット・デュノアです。同じくシャルと呼んでいただいていいですよ、リインさん」

二人はリインと握手——正確にはリインが二人の人差し指を両手で持っている——をする。戦いを経験していたせいか、二人とも順応だけは早いようだ。

「ところで、あっちの四人はどうするつもりなんだ？」

食後の茶を啜りながらヒロユキは呟き、四人を横目で見る。

「うーん、僕たちから言えることはあの時全部言っちゃったから、後は四人が決めるのを待つしかないよ。僕たちから無理強いは出来ないしね」

アイスクリームを掬いながらシャルロットは言う。

「まあ、奴らがこのまま戻ったところで、どうにもならんのは目に見えているはずだから……」

ラウラはさも他人事という顔で言つてのける。そう言いながらもケーキを切るフォークは止めない。

「やれやれ……同意がなかったらなかったでまた問題が山積みになりそうだな……」

「とりあえず、今は様子見しか無いのです」

ヒロユキは先を思いやつてため息をついたのであつた。彼の肩に乗ったリインが、それに同調するように肩を落とした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6625w/>

とあるアニメの交錯物語? ~ A Cross story of Lost chronicle ~

2011年11月1日04時19分発行